

ISSN 1348-8384



拓殖大学
語学研究

Takushoku Language Studies

2008.10

No. 118

目 次

〈論 説〉

スペイン語の非人称構文 〈*haber que*＋不定詞〉

における不規則な一致 ……………小池 和良（ 1 ）

中国語母語話者の日本語発話における

助詞の軽声化とその原因

—— 2 モーラ語の単語発話と文節発話の比較 —— ………藤田 守（13）

サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダ

（スペイン）の俚諺 ……………オスカル・メンドサ（31）

ビジネス中国語誤訳例の分析

—— 構造把握の誤認の分析を中心に —— ……………関口 美幸（57）

〈研究ノート〉

ヒンディー語の諸方言研究書に収載された昔話の意義

—— 言語・方言の生きた資料として、

また昔話の正確な記録として —— ……………坂田 貞二（81）

〈調査報告〉

文検英語科出身教師の調査

—— 第 10 回合格者までを対象に —— ………長谷川文子・茂住 實男（115）

Contents

〈Articles〉

Concordancia irregular en la construcción

impersonal 《*haber que* + infinitivo》 KOIKE Kazumi (1)

The Neutral Tone and Cause of Particle in the Japanese

Utterance of a Chinese Mother Tongue Speaker

— Comparison of Word Utterance and the Clause Utterance

of Two Mora Word — FUJITA Mamoru (13)

Paremiat Calceatenses OSCAR JAVIER Mendoza García (31)

The Analysis of Mistakes in

Chinese Business Translation SEKIGUCHI Miyuki (57)

〈Study Note〉

The Singnificance of Folktales told and recorded in

Hindi Daialcts: As Source Material for Linguistic

and Folkloristic Studies SAKATA Teiji (81)

〈Report〉

On English Teachers of SSETLE

(The Secondary School English Teacher's

License Examination)

.....HASEGAWA Ayako • MOZUMI Jitsuo (115)

〈論 説〉

スペイン語の非人称構文〈*haber que*＋不定詞〉における不規則な一致

小 池 和 良

1. 序 論

スペイン語の非人称構文の一つ〈*haber que*＋不定詞〉は、文法的主語がないために動詞 *haber* が常に 3 人称単数形で活用する無主語文である。しかし、文法的な主語の不在は、意味上の主語の不在を示すものではない。〈*haber que*＋不定詞〉の構文の *haber* の意味上の主語に注目すると、(1) (2)に見られるように文脈から判断可能な場合がある。

- (1) Cuando me devolvió los papeles, *había que cogerlos* con pinzas de lo sucio y polvorientos que estaban (DP, s.v. *pinza*). [=yo tenía que cogerlos...]
- (2) *Hay que ser razonables*, Andrés, no te quedes así, no era nada, no era lógico, no tenía pies ni cabeza, era pura compulsión (CREA). [=tú tienes que ser razonable...]

(1)では与格代名詞 *me* によって *había* の意味上の主語が *yo* であることが分かる。従って、〈*había que*〉を〈(*yo*) tenía que〉と言い換えても文の意味に大きな変化はない。また(2)では下線部の *te quedes* から *hay* の意味上の主語が *tú* であることが分かる。ここでも〈*hay que ser razonables*〉を〈*tú tienes que ser razonable*〉と言い換えることができる。

一方、〈haber que+不定詞〉構文では文法的主語がないにもかかわらず、不定詞の位置に ser や estar などが現われた時に、その属詞が男性単数形ではなく、場合によっては女性形や複数形が使われることがある。つまり性・数変化を許容する。

(3) *Hay que ser más astutos* si queremos... (Gómez Torrego 1992: 38)

(4) *Anímate. Esto es lo que nos hubiera dicho él. Hay que ser fuertes* en las desgracias (CREA).

(5) Ernestina. — Y ahora, Alejandra va a leernos la espléndida composición que ha merecido la nota máxima de su clase, en lengua francesa.

Alejandra. — ¡No, eso no!

Rosa. — ¿Por qué, tonta? Tiene un acento precioso. *¡Hay que ser más decidida!* (CREA).

(3)(4)(5)の ser の後に続く形容詞は、それぞれ astutos (男性複数), fuertes (男性複数), decidida (女性単数) と性・数変化をしている。この特異な文法現象は、スペイン語の通常の一致の原則からは説明できない。なぜなら連結動詞 ser, estar の後に現れる属詞はそれが指す名詞（この構文では文法上の主語）と性・数一致するが、〈haber que+不定詞〉構文に文法的主語がないことを考慮すると、属詞が男性単数形以外で使われることは一致の原則に反するからである。スペイン語ではこの構文を初めとして、無主語文の属詞は、通常は次の用例が示すように男性単数形に置かれる。

(6) Los animales domésticos son portadores de enfermedades que se transmiten al hombre. *Hay que ser **cuidadoso** y **metódico***, y observar unas costumbres higiénicas que eviten los contagios (CREA).

(7) *No se es **joven** ni **viejo**. Se está **vivo***. A fe que esta frase de Arturo Uslar Pietri debe presidir toda su filosofía de vida a la altura de sus 91 años (CREA).

本稿では、〈haber que+不定詞〉構文の統語的特徴と意味的特徴を分析して、なぜ(3)(4)(5)にみられるような不規則な一致が許容されるのかを考察する。

2. 〈haber que+不定詞〉構文の特徴

a) 統語的特徴

この構文の統語的特徴は「文法的主語の不在」である。スペイン語には文法的主語なしに使われる動詞や構文は他にも存在するので、「文法的主語の不在」自体はそれほど特記すべき特徴ではない。

第二の統語的特徴は、文法的主語をもつ〈tener que+不定詞〉構文などと異なり、無強勢代名詞の前置を許容しないという点である（Gómez Torrego 1999: 3357, Fernández Soriano y Táboas Baylín 1999: 1769）。

(8) Hay que decírselo a ellos.

(8a) *Se lo hay que decir a ellos. (Gómez Torrego 1999: 3357)

この点において、〈haber que+不定詞〉構文は、haber の別の無主語文（～がある）と異なる。「～がある」を意味する haber は(9)に見られるように無強勢代名詞の前置を許容するからである。

(9) Las revistas llevan páginas enteras con anuncios de relojes variados. *Los hay* para todos los gustos y ocasiones (CREA).

第三の統語的特徴は、この構文はいわゆる動詞の迂言形（perífrasis verbales）の一形式であるということである。換言すると haber que の部分は助動詞的な働きをし、後続の不定詞は動詞的価値を持っているので、これを名詞的成分と置換することはできない（Gómez Torrego, 1999: 3356-3357）。

b) 不定詞の意味特徴

〈haber que＋不定詞〉構文の不定詞の位置で使われる動詞には制限がある。原則として行為を示す動詞で、有生物を主語にとる動詞しか現われない (Gómez Torrego 1999: 3358)。このことは、この構文が *ocurrir* や天候を示す *hacer* や *llover* などの動詞と共に起できないことから明らかである。

(10) Hay que {trabajar/sufrir/morir/escribir libros...} (Gómez Torrego 1999: 3357).

(10a) *Hay que {ocurrir/hacer buen tiempo/llover/transcurrir...} (*Ibid.*).

c) 意味的特徴

この構文の示す意味は「義務」(obligación)「必要」(necesidad)もしくは「命令・忠告」(orden・consejo)である。したがって、以下の用例が示すように、「義務」「必要」もしくは「命令」を示す他の表現での言い換えが可能である。

(11) Hay que hacer cosas = Es obligado/necesario hacer cosas (Gómez Torrego 1999: 3358).

(12) Había que haberlo hecho = Se debía haber hecho (*Ibid.*).

(13) Hay que hacer más ejercicio si queréis adelgazar = Haced/ Debéis hacer más ejercicio... (*Ibid.*).

3. 〈haber que＋不定詞〉の意味上の主語

〈haber que＋不定詞〉構文は、文法上の主語を欠いているが、文脈から誰が不定詞句の行為者であるかを特定できる場合がある⁽¹⁾。Gómez

(1) 出口 (1995: 535) は、この構文は「実際には、文脈や場面に依存した特定の人物に向けられている場合が多い」と述べている。

Torrego (1999: 3357) は、この構文の意味上の主語 (sujeto semántico o contextual) は必ず人で、事物ではないと述べている⁽²⁾。〈haber que+不定詞〉は非人称の構文なので、意味上の主語が一般化されている場合を除くと、意味上の主語は一人称 (yo, nosotros) である場合と、二人称 (tú, vosotros) である場合がある。文脈から判断できるこの意味上の主語の存在が、次章で扱う不規則な一致を生じさせる要因の一つであると考えられる。

4. 不規則な一致

4.1. 属詞との不規則な一致

〈haber que+不定詞〉の不定詞の位置に連結動詞が使われた場合に、属詞として用いられる形容詞に性・数変化が生じる。つまり男性単数形ばかりではなく男性複数形・女性単数形・女性複数形の形容詞が現われることがある。このことは〈haber que+不定詞〉の構文には、意味上の主語、換言すれば属詞が修飾する語句、つまり haber の意味上の主語が潜在的に存在することを示している。(14)の hay の意味上の主語は後続の文の動詞 tengo から、1 人称単数形の yo (女性) であることが分かる。

- (14) Berta. — Cirugía estética. *Hay [=Tengo] que ser precavida. Dentro de tres años quiero poder decir que **tengo** diez años menos y que se fastidien hasta mis mejores amigas (CREA).*

属詞が複数形になっている例を以下に示す。

- (15) Una vez colocados en el lugar elegido, *hay que permanecer in-*

(2) 《Un rasgo fundamental de esta construcción (*haber que*+infinitivo) es que posee un carácter encubridor de actor (agente o paciente), por lo que sólo es combinable con infinitivos de verbos que sólo pueden llevar fuera de la perífrasis sujetos animados semánticamente actores fuera de la perífrasis》(Gómez Torrego 1999: 3357).

móviles y ocultos, especialmente cuando se ven venir. También *se debe permanecer atentos* a otros posibles pasos... (CREA).

- (16) En la caza cuando se llega a la terminación de los rastros y si se ha cazado bien, *hay que permanecer muy atentos* (CREA).
- (17) En un intento por precisar el inicio de los “culebrones”, Fiallo dijo que “para hablar de las telenovelas *hay que ponerse románticos*” y... (CREA).

用例(15)では〈haber que＋不定詞〉の構文の直後に、非人称の *se* の構文が使われ、ここでも不規則な一致の現象がみられる。

一方、意味上の主語が特定できる場合でも一致が生じない場合もある。

(18)では文脈から意味上の主語が1人称複数であることが特定できるが *ser* の属詞 *humilde* は複数形にはなっていない。

- (18) *Hay que ser humilde* y admitir que también *somos* química, que a veces *necesitamos* alguna sustancia química (CREA).

以上から明らかになったことは、意味上の主語が特定できる場合に、属詞が性・数一致しないこともあれば、することもあるということである。前者の場合は、文法規則に従った現象なので特に問題はないが、後者、つまり性・数一致が生じるケースはその要因を確認しておく必要がある。

第一の要因は意味上の主語の存在である。これは、Gómez Torrego (1999: 3357) が指摘しているように、不定詞として使われる動詞に意味上の制限があることと関連している。定動詞として使われた場合は、主語に有生名詞をとる動詞しか〈haber que＋不定詞〉の構文の不定詞になることはない。つまり、この構文は、文法的主語を持たない無主語文であるにもかかわらず、不定詞になっている動詞には常に意味上の主語が存在することが前提になっているのである。話者はこの構文を使うときに、潜在的な、場合によっては具体的な主語を想定していると思われる。不規則な性・数一致は、現実の状況（性数を特定できる意味上の主語の存在）が、

形式（文法上の主語の不在）に優先されるという特異な現象のとして位置づけることができる。なぜなら、通常は形式が意味に優先されるからである⁽³⁾。

第二の要因は、類似の意味を示す〈tener que+不定詞〉構文との混用である。この構文は、文法的主語を持ち、全人称に活用することができる。動詞の活用形が3人称単数形に固定して使用できるという点で、〈haber que+不定詞〉構文は、活用形を選択しなければならない〈tener que+不定詞〉構文より使い易いのではないだろうか。そして、前者を使ったものの話し手の意識の中には特定された主語があるために、それと一致させてしまうと思われる。換言すると、〈tener que+不定詞〉構文を使うつもりが、〈haber que+不定詞〉構文を使ってしまい、属詞を意味上の主語と一致させてしまったという解釈である⁽⁴⁾。これはあくまでも推論にすぎないが、不規則な一致の多くが口語的な表現であることを考慮すると、合理的な説明であると考ええる。

4.1. 再帰代名詞との不規則な一致

〈haber que+不定詞〉構文では属詞との不規則な一致ばかりでなく、

(3) 例えば〈uno de los+複数名詞句〉では形式が優先される。この構文では uno と後続の名詞句の諸要素は同一の性にしなければならない。つまり組み合わせとしては、以下の2種類しか存在しない (DPD: 160-161)。

a) **uno de los académicos invitados**

b) **una de las académicas invitadas**

b) は「招待された学士院会員たちの一人（女性）」という意味であるが、「招待された学士院会員たち」が女性だけの時も、男性が交じっている時も女性複数形が使われる。男性が入っている時に **una de los académicos invitados** ということはいできない。

(4) 〈haber que+不定詞〉構文と〈tener que+不定詞〉構文の意味の違いを指摘する見解もある。Martín Zorraquino (1979: 367, nota 49) は前者が後者より話し手と聞き手以外の人も含むという意味で、義務性がより強いと主張している。

再帰代名詞との不規則な一致も行われている⁽⁵⁾。これは規範的には誤りであるとしてされている現象である (Gómez Torrego 1992: 38, DPD: 330)。DPD (330 ページ) は、不定詞に再帰動詞が使われた場合に、再帰代名詞を 3 人称以外の、1 人称複数形の再帰代名詞 *nos* にすることは誤りであるとしている。つまり (19) は誤用で (20) としなければならないと述べている。もし動作主を明示したい場合は、(21) のように人称形の *tener que* を使わなければならないとしている。

(19) **Todavía hay que esforzarnos* mucho más.

(20) *Todavía hay que esforzarse* mucho más.

(21) *Tenemos que esforzarnos* mucho más.

しかし、規範的には誤用とされている一致であるが、現実には不規則な一致の用例が存在する。

(22) *Siempre de niño me llamó mucho la atención el fútbol; tuve esa ilusión y la estoy realizando. Voy a seguir trabajando todavía mucho más fuerte. Le doy muchas gracias a Dios por darme esta oportunidad y estar en estos momentos en buena forma, y todavía hay que esforzarnos* mucho más (CREA).

4.3. 無主語文における不規則な一致

別の無主語文である非人称の *se* の構文では、通常は属詞は (22) のように男性単数形 (*severo*) に固定されている。

(23) *Se es severo*, nosotros incluso y yo mismo también, con él (CREA).

しかし、(15) で指摘したように、非人称の *se* の構文でも不規則な一致が生じる場合がある。この構文は無主語であるが、特にその意味上の主語

(5) Martín Zorraquino (1979: 367) は所有詞に 1 人称の所有詞が使用されている例を報告している。

Hay que vender caras nuestras vidas (Sastre 1960: 44-45).

の男女の性別が明確な場合は、これと一致した例がみられる。(24)は女性のことについて言及しているので、形容詞は女性単数形に置かれている。

- (24) ¿Qué posibilidades de embarazo hay durante la menstruación? ¿Se es más **propensa** a la adquisición de infecciones vaginales? (CREA).

これらの用例は、文法規則が適用されないケースであるが、〈haber que+不定詞〉構文でも(14)や(25)のように、同様の不規則な一致の現象が存在する。

- (25) ¡Cómo le temías al sol! Ahora *hay que ponerse* **negra**, es lo que está de moda, *negra estoy yo*. Por dentro y por fuera. Mientras más tostadas, mejor, se disimulan los años, mi vida, y las patas de gallo (CREA).

本章で検討した用例から、無主語文においては、文脈から意味上の主語が特定できる場合に、属詞や再帰代名詞がそれと（文法的には）不規則な一致を行うことがあるということを確認した。

5. ま と め

スペイン語の〈haber que+不定詞〉構文は無主語文であるにもかかわらず、不定詞に ser, estar, permanecer などの連結動詞が現われた場合に、その意味上の主語に一致して属詞が性・数一致をする場合がある。この現象の要因は二つ考えられる。第一は特定可能な意味上の主語の存在である。そして第二の要因は、類似の意味を示す〈tener que+不定詞〉構文との混用である。

主語が不在の構文における不規則な一致は、〈haber que+不定詞〉構文だけでなく、非人称の se の構文にもみられる現象である。

〈haber que+不定詞〉構文で、意味上の主語と属詞の不規則な一致が生じる場合に、意味上の主語によってこの動詞句の表す意味に違いがある。

一人称の意味上の主語が想定される場合は「義務」「必要」を示し（用例(11)(14)）、二人称の意味上の主語が想定される場合は「命令・忠告」を示す（用例(13)）。

以上から、本稿で検討した〈haber que＋不定詞〉構文の不規則な一致は、スペイン語の無主語文における不規則な一致として記述することが可能であると考ええる。

本文で使⽤した略語

CREA = Real Academia Española: Banco de datos (CREA) [en línea].

DP = Marsá (1982)

DPD = Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2005)

参考文献

Fernández Soriano, Olga y Táboas Baylín, Susana (1999), «Construcciones impersonales no reflejas», en Ignacio Bosque y Violeta Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, 1723–1778, Madrid: Espasa Calpe.

Gómez Torrego, Leonardo (1992), *La impersonalidad gramatical: descripción y norma*, Madrid: Arco Libros.

Gómez Torrego, Leonardo (1999), «Los verbos auxiliares. Las perífrasis verbales de infinitivo», en Ignacio Bosque y Violeta Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, 3323–3388, Madrid: Espasa Calpe.

Marsá, Francisco (dir.) (1982), *Diccionario Planeta de la lengua española usual*, Barcelona: Planeta.

Martín Zorraquino, María Antonia (1979), *Las construcciones pronominales en español. Paradigma y desviaciones*, Madrid: Gredos.

Real Academia Española: Banco de datos (CREA) [en línea]. *Corpus de referencia del español actual*. <<http://www.rae.es>> [2007–2008]

Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española

(2005), *Diccionario panhispánico de dudas*, Madrid: Santillana.

Sastre, Alfonso (1960), *Escuadra hacia la muerte*, Buenos Aires: Ed. Losada.

出口厚実 (1995) 「表現 12 非人称」『中級スペイン文法』(山田善郎監修) 530-535 頁, 白水社.

(原稿受付 2008 年 4 月 7 日)

〈論 說〉

中国語母語話者⁽¹⁾の日本語発話における 助詞の軽声化とその原因

— 2 モーラ語の単語発話と文節発話の比較 —

藤 田 守

中文摘要

本稿是以通過對藤田（2005）和藤田（2007）所得出的結論做已分析，並對其特徵做了比較，通過把母語的特徵作為考察那些日文語音現象的手段，清楚地知道了如下原因。

日文表達時，學習者在「單詞的詞尾＋助詞」的表達上會有「第四聲＋輕聲音」的傾向，由於中文的文法上的附屬語「助詞」全部是發輕聲音，因此，以中文為母語的說話人是比較很容易將日文的附屬語助詞部分用中文的附屬語的助詞發音長度來表達。之所以有此傾向，在於學習者在使用外語時，常常帶有母語的色彩去使用外語，尾高型在單詞表達時與平板型一樣，是沒有重音，但在文節句子的表達時，尾高型就會有重音混亂的傾向。

結論是特別是初級日文學習者在尾高型表達時，會以中文母語的輕聲發音長度來代替日文的發音。

【關鍵詞】聲調，輕聲，重音，音節，日語音節，音長

目 次

1. はじめに
2. 先行研究と本稿における検定結果
 - 2-1 単語発話（藤田 2005）について
 - 2-2 文節発話（藤田 2007）について
 - 2-3 本稿における検定結果
3. 考 察
4. 助詞の軽声化傾向について
 - 4-1 軽声の音声的特徴
 - 4-2 中国語の音の長短の機能
 - 4-3 中国語の声調の特徴
 - 4-4 日本語発話でどのモーラを引き延ばすと不自然か
5. ま と め
6. 音声教育への提言と今後の課題

1. は じ め に

言語のリズムの要素は「長さ」⁽²⁾「高さ」「強さ」である。これらにより話し手は内容を聞き手に分かりやすく伝えることが可能となる。学習者の日本語が日本語らしい発音だと評価される要素に、長さが挙げられる点（松崎・河野 1998：181）を考えると、適切な長さで発音できることがこのましい。一般に、中国語母語話者の日本語発話は、しばしば母語である中国語の影響を受けるといわれる。蔡茂豊（1987：104-105）は、助詞をつけるとその前の短音が長音化する「キ（気）ガ→キーガ」や、単に短音を長音化する「トショカン（図書館）→トーショカン」など、聴覚印象に基づく中国語母語話者の日本語発話の問題点を挙げている。

そこで中国語母語話者と東京語話者の音声データを用い、藤田（2005）は単語発話、藤田（2007）は文節発話について、それぞれ実態を調査し傾向を確認した。しかし、藤田（2005, 2007）の研究では全体的な音声の実

態の把握にとどまり、学習者の母語の背景を考慮した原因の特定には至っていない。

学習者の母語の特徴である中国語の場合、中国語の品詞の中でも名詞がもっとも多く、中でも2音節語が圧倒的に多い（楊立明 1993：236-248）。ロベルジュ・本間（1987：20-22）は、/CV/構造は音節構造の中でも最も頻度が高く有用でかつ普遍的であり、世界のどの言語にも存在する音節が/CV/構造の開音節であると述べている。学習者が慣れない日本語の発音をする場合においても、一番発音の負担がないこのような特徴を用いると考えられる。そこでまず、日本語の音声の最小単位であるモーラを研究の起点とした。その中でも2モーラ語の開音節の発話に母語の影響が出やすいと判断した。本稿では、2モーラ語を例にその特徴を例に挙げ新たに行った検定結果を踏まえた上で、中国語の先行研究と照合し問題点とその原因を特定することを試みる。

中国語の音節は第一声から第四声の声調の影響を受けて、その長さが異なる（馮 1985）。一方、日本語のアクセント核がモーラの長さに与える影響はない。従って、中国語母語話者の日本語発話は声調の影響をうけてモーラの長さが異なると仮説を立て検討する。

2. 先行研究と本稿における検定結果

被験者は東京語話者（以下、JN）5名、中国語母語話者上級者（以下、AL）6名、初級者（以下、EL）5名である。検定語リストには、単語発話では1モーラ語から4モーラ語まで/m/と/a/から構成される無意味語を用いた。無意味語を用いたのは韻律的・意味的な情報を排除して、モーラの位置的な特徴を顕在化させ、各母音・子音の隣接音素の影響を均一にする点を考慮するためである。検定語の対象からは、語頭に置けない特殊モーラは除外している。発話の方法は検定語リストを有意味語・無意味語

の順に、各モーラを/ma/に置換した reiterant speech⁽³⁾ (Hoequist 1983 : 204) を用いて、東京語アクセント型で3回ずつ発話してもらい、発話データはアクセント型に基づいて整理した。なお、被験者にはそれぞれ事前の練習を依頼した。

表1 【検定語リスト1】単語発話

	1 モーラ語	2 モーラ語	3 モーラ語	4 モーラ語
0 型	な (名) マ	まる (丸) ママ	やさい (野菜) マママ	しなもの (品物) ママママ
1 型	め' (目) マ'	さ'る (猿) マ'マ	の'やま (野山) マ'ママ	ま'いあさ (毎朝) マ'マママ
2 型		やま' (山) ママ'	のみ'や (飲み屋) ママ'マ	のみ'もの (飲み物) ママ'ママ
3 型			さしみ' (刺身) マママ'	みそし'る (味噌汁) マママ'マ
4 型				そのまま' ママママ'

注：「'」はアクセント核を表わす。

表2 【検定語リスト2】文節発話

	1 語+「に」	2 モーラ語+「に」	3 モーラ語+「に」	4 モーラ語+「に」
0 型	なに(名に) マに	まるに (丸に) ママに	やさいに(野菜に) マママに	しなものに(品物に) ママママに
1 型	め'に(目に) マ'に	さ'るに (猿に) マ'ママに	の'やまに(野山に) マ'ママに	ま'いあさに(毎朝に) マ'マママに
2 型		やま'に (山に) ママ'に	のみ'やに(飲み屋に) ママ'ママに	のみ'ものに(飲み物に) ママ'ママに
3 型			さしみ'に (刺身に) マママ'に	みそし'るに(味噌汁に) マママ'マに
4 型				そのまま'に ママママ'に

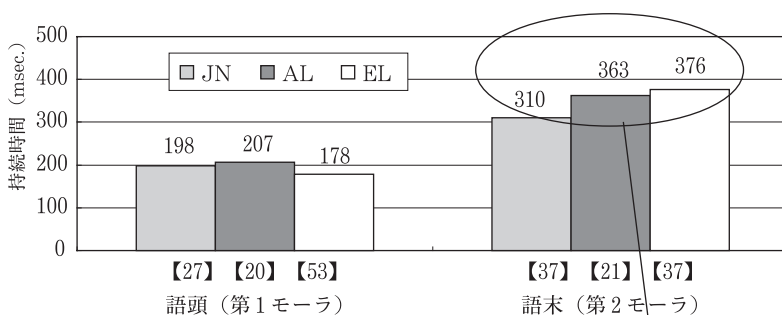
注：「'」はアクセント核を表わす。

測定の基準は、語頭の/CV/の/C/については、周期的に現れる波形が最初に立ち上がるゼロの地点を起点とし、その/V/は次の/C/との境目である周期的に現れる波形が、最後の頂点からゼロに戻った地点までとした。語末の/V/については、周期的に現れる波形が最初に立ち上がるゼロの地点を起点とし波形がなくなった地点を終点とした。なお、判断がしにくい場合は、サウンドスペクトログラムの色の変化や音声情報も参考にし、各モーラの長さを測定した。なお測定結果は、Microsoft 社の表計算ソフト EXCEL にてデータベース化した。そして、データの統計処理には SPSS Ver.10 を使用した。測定の対象は測定の対象は、アクセントの間違いやいいよどみがない無意味語の第 2 回目の発話とした。

2-1 単語発話（藤田 2005）について

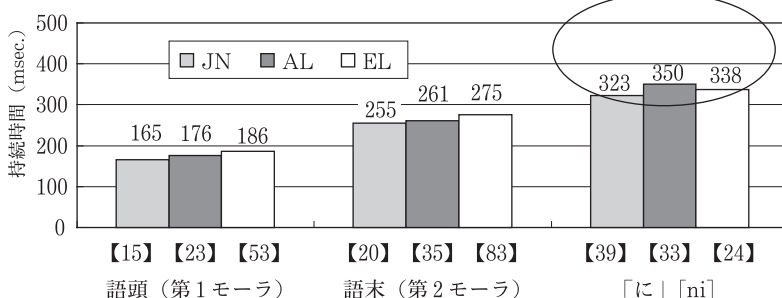
さて、中国語母語話者と東京語話者の日本語の単語発話における語末モーラの長さを測定し相違を検証した研究が藤田（2005）である。ここで測定したモーラの総数は、被験者 16 名×14 モーラ（単語発話の語末モーラ）＝総数 224 モーラである。

その結果、中国語話者は東京語話者と同じ発話傾向だが、中国語話者のモーラの伸長が、東京語話者の 10%以上で有意差が生じることが判明した。また、起伏式と平板式発話の長さに有意差があった。アクセント別三被験者間の検定によると、語末モーラのみ長さに有意差が見られた（図 1, 図 3, 図 5 の○部、棒グラフ下【 】の数字は標準偏差 SD を表す）（平板型 $F(0)=4.9 \geq F(2, 13)(0.05)=3.8$, $p < .05$, 頭高型 $F(0)=3.5 \geq F(2, 13)(0.10)=2.7$, $p < .10$ （有意傾向）, 尾高型 $F(0)=5.1 \geq F(2, 13)(0.05)=3.8$, $p < .05$ ）。下位検定 TukeyHSD による多重比較をアクセント型ごとに行った。EL は JN より有意に長かった（平板型 $p < .05$, 頭高型 $p < .10$, 尾高型 $p < .05$ ）。アクセント別の被験者内検定によると、三被験者群とも語頭よりも語末が有意に長かった（JN： $F(0)=9.76 \geq F(5, 24)(0.01)=3.9$, $p < .01$ ただし下



出典：藤田（2002a）より

図1 平板型単語発話の平均持続時間



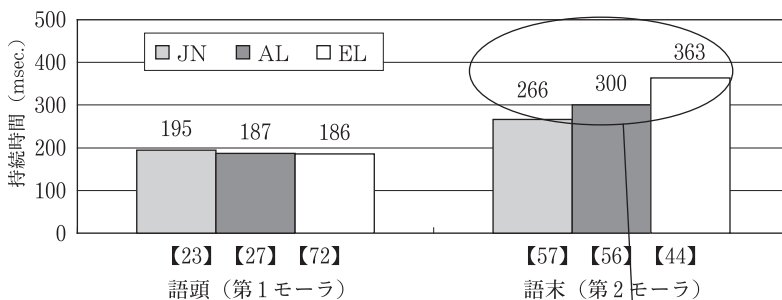
出典：藤田（2002a）より

図2 平板型文節発話の平均持続時間

位検定により頭高のみ有意差はなかった。AL： $F_0=33.3 \geq F(5, 30) (0.01) = 3.7, p < .01$, EL： $F_0=17.1 \geq F(5, 24) (0.01) = 3.9, p < .01$ 。

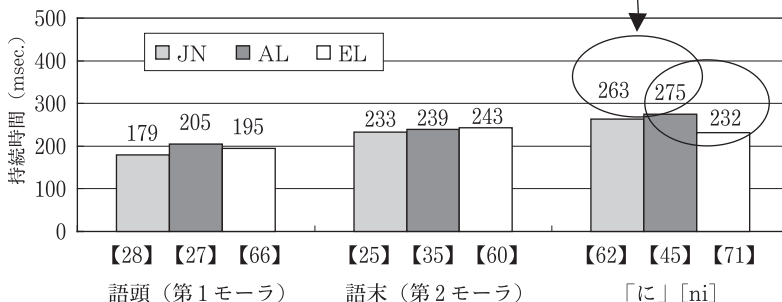
2-2 文節発話（藤田 2007）について

藤田（2007）は、中国語母語話者と東京語話者の日本語の文節発話における語末モーラと助詞モーラの長さを測定し、その結果を報告したものである。中国語母語話者は助詞直前の語末モーラの長さが長音化すると仮説を立て、中国語母語話者と東京語話者の単語発話時の語末モーラの長さを測定し相違を検証した。検定語には、文節発話による /ma/ + /ni/（助詞



出典：藤田（2002a）より

図3 頭高型単語発話の平均持続時間

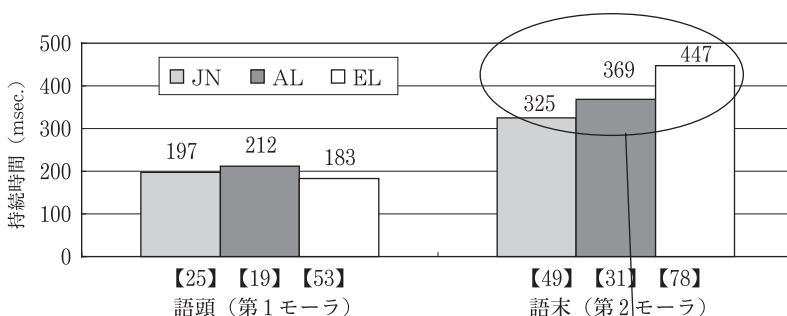


出典：藤田（2002a）より

図4 頭高型文節発話の平均持続時間

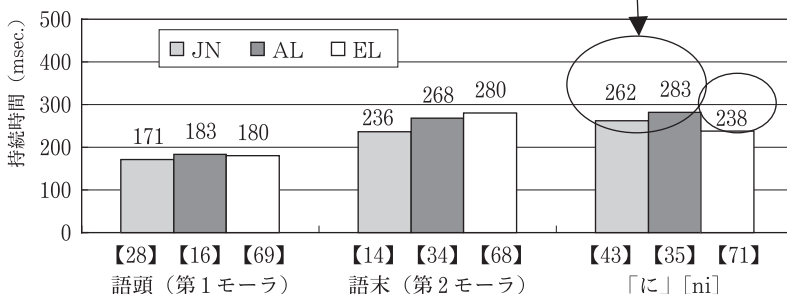
「に」から構成される無意味語を用いた。藤田（2007）の測定したモーラの総数は、被験者16名×28モーラ（文節発話の語末 [ma] 14モーラ、文節助詞 [ni] 14モーラ）＝総数448モーラである。

その結果、被験者間でモーラ位置毎に有意差が見られた。 $(F_{0}=19.3 \geq F_{(24, 104)}(0.01)=1.975, p<.01)$ 。東京語話者は平板式と起伏式アクセントで語末と助詞の長さの関係は「短・長」傾向であった。平板式アクセント発話では中国語母語話者の初級者・上級者ともに東京語話者と同様であった。起伏式アクセント発話では中国語母語話者の上級者は東京語話者と同様だが、初級者は「長・短」傾向であった。アクセント型にかかわらず単



出典：藤田（2002a）より

図5 尾高型単語発話の平均持続時間



出典：藤田（2002a）より

図6 尾高型文節発話の平均持続時間

語発話の語末は語頭のモーラよりも2倍以上の長さがあり長音化が確認された。しかし、文節発話は語末のモーラは単語発話のそれと比べると3割から4割も短縮している上、特にELの尾高型の助詞のモーラが短かった。

2-3 本稿における検定結果

本稿では、先に述べたように研究の対象を2モーラ語のみに絞り、アクセント型別に TukeyHSD 検定による多重比較を行った。その検定結果は次のとおりである。

平板型発話については、語末 [ma] は、JN と比較し有意に AL ($p < .01$)

と EL($p < .05$)の方が長かった。また、助詞 [ni] は、JN と比較し AL と EL の方が有意 ($p < .01$) に長かった。頭高型については、語末 [ma] は、JN と比較し有意に AL($p < .01$) 及び EL($p < .05$) の方が長かった。

尾高型発話については、特徴的傾向として、助詞 [ni] は、JN と比較し AL のみ有意 ($p < .05$) に長く、EL は JN より有意 ($p < .01$) に短かった点である。

2 モーラ語に絞った今回の検定結果も藤田（2007）で報告した傾向と同様であった。よって、中国語の先行研究をもとに、学習者の母語である背景を整理した上で、本稿で報告した結果についてその原因を特定し問題点の指摘を試みる。

3. 考 察

総じて、単語では語末が極端に長かったが、文節では助詞を除き語末は長さが短縮した。

起伏式・平板式発話とも東京語話者は語末モーラ、助詞の順に [短・長] の長さのリズムで発話された。程度の差はあるが平板式発話の傾向が三被験者群とも類似したのは、中国語母語話者はアクセント核がない単語は母語にはなく発音は困難なため（朱 1993：182）、アクセント核が生じないよう平板に発話したので、助詞の部分の長さは短縮しなかったと考えられる。鮎澤（1995：169）は中国語母語話者の東京語アクセントに関する知覚実験を行い、アクセント核が後になるほどアクセント型の正答率が上がり平板型の正答率が一番よい点を指摘した。

以上から、高低アクセントが母語である中国語話者には平板式発話に対する苦手意識はあろうが、概ね発音と聞き取りの傾向と一致している。

この他、朱春躍（1993：182）は名詞に後続する助詞の読み方が難しく、後続助詞のアクセント情報が無視されがちで、それが平板式と起伏式の混

同を起こすと指摘した。先に述べた、助詞 [ni] は、JN と比較し AL のみ有意 ($p < .05$) に長く、EL との有意差はなかった。特に、尾高型発話については、助詞 [ni] のみ AL は JN より有意 ($p < .01$) に長かったが、EL は JN より有意 ($p < .01$) に短かった。この点は、後続アクセントの情報により発生したものと考えられる (図 4, 図 6, 「に」○部)。

4. 助詞の軽声化傾向について

助詞 [ni] は、尾高型発話については、EL は JN より有意 ($p < .01$) に短かったことから、助詞の長さが短くなる軽声化傾向があるというのが適当であろう。中国語の「助詞」は軽声である (劉月華他 1991: 187) こと、また、声調分布の調査から第四声の使用頻布が高いという楊立明 (1993: 236-248) の指摘からも、文節発話において語末を第四声、助詞を軽声に置き換えて発話したものと考えられる。以下こうした軽声や声調に関する特徴について触れていく。

4-1 軽声の音声的特徴

中国語の軽声の影響について触れたが、ここではその経緯について中国語の音声的特徴に関する先行研究を紹介する。

馮隆 (1985: 178) は、文中・文末ごとにキャリアセンテンスの中に挿入された検定語の測定をする方法で声調別に音節の長さの変化を調べた。この結果から、長さは声調や文中・文末など位置的関係により顕著な違いが見られた。文中においては第一声が一番長く、その他は同じくらいである。文末においては第三声が一番長く、続いて第二声・第一声・第四声の順となる点を指摘した (馮隆 1985: 188)。軽声の知覚の特徴を調べるため林燾 (1985) は、長さを段階的に短縮させた合成音声を用いた知覚実験から、結論を次のように述べている。すなわち、音の長さは声調でも特に

軽声の識別に極めて重要である。そして、第一声から第四声は音の高さの変化が、軽声は音の長さが、それぞれの識別の要因である。例えば重重型の2音節の単語について、第2音節が短いとその音が弱く、軽く聞こえる率が高い点を確認している。

呉亜棟（1991：572）は軽声の長さについて、2音節単語を対象にした音響実験により、非軽声音節のそれに比べて相対的に短いという特徴を述べ、音節の相対長さをを用いた中国語多音節単語の軽声認識の実験により認識率は平均97.5%であると報告した。

以上、軽声の長さはその前の音節より音の長さが短いことで認識され、また発話も行われている点を確認した。

4-2 中国語の音の長短の機能

中国語には音の長短による言葉の意味の対立がないため、日本語の長音と短音の区別は促音、撥音などの特殊モーラとともに発音が困難なものとなるのが一般的である。しかし、林燾・王理嘉（1992：174）によると、中国語の「明白」（míng bai）の「白」は軽い音で読まれる必要があり中国語の軽重音は語意と密接な関係がある。もし軽い音で発音しなければ、不自然で標準的でなく聞き手に理解されなかったり、別の意味に誤解されたりすることがあると指摘している（例；東西では，dōng xī は方角を，dōng xi は物を意味する）。また、品詞上の「助詞」は常に軽声で読まれ、軽声が安定している。日本語にも同じ名称の品詞「助詞」があるが、劉月華他（1991：187）によると中国語の助詞とは、単語・連語・文のあとにつき、語法上の意味をそえる虚詞である。その特徴として次の3点を挙げた。

- ① 大多数は、単語・連語・文のあとにつくだけで、単独では用いない。
- ② 語法上の意味を表すだけで、具体的な意味はない。
- ③ 通常すべて軽声で発音される。

一方、日本語の助詞も、付属語で活用がなくそれだけでは文節にならな

い。主として自立語について文節を作り、その語と他の語との関係を示し一定の意味を添える語である。しかし、上の③で挙げたような音声の長さの特徴はない。

以上から、日本語のみならず中国語にも音の長短の機能があることがわかる。

4-3 中国語の声調の特徴

声調の構成要素の第1は「音の高さ」で、第2は「音の長さ」である（『國音學』1982：223）。日本語のアクセントは語の全体を覆うのに対し、中国語のアクセントは音節が多種の声調を持ち1つの音節の内部で音の高さが変化することで語の意味を区別する。

楊立明（1993：236-248）によると、中国語名詞では1音節語から4音節語の中では2音節語が約75%と最も多く、2音節語名詞に限定した場合の声調分布は、語頭はもとより語末も第四声が最も多く、また、語末にのみ発生する軽声が第四声について多い⁽⁴⁾。

また、趙元任（1980：20-21）によると、軽声の高低は、その前にある音節の声調で決定される。第三声が一番高く半高、次いで、第二声が中、第一声が半低、第四声が低となっている。

半低 陰平之後，例如：「他的」ta・de

中 陽平之後，例如：「黃的」hwang・de

半高 上聲之後，例如：「你的」nii・de

低 去聲之後，例如：「大的」dah・de

（出典：趙元任 1980：20-21）

その後、2音節単語を対象にした音響実験（呉亜棟 1991：572）において、軽声音節の高さは前の音節の高さによって決定され固有のものでない点が確認されている。藤田（2007）において、尾高型による起伏式発話では平板式とは逆にアクセント核が生じたため、「低 去聲之後，例如：「大

的」dah・de」という母語の音声的特徴が反映されたものと考えられる。

軽声は中国語では単独では生じない。母語でよく使われる声調を無意識に用いて日本語の発話を行うのであれば、軽声で発話するために語末のモーラに高さを出す必要がある。そのために母語で頻出する第四声に乗せて語末モーラを発話し助詞を軽声で発話するという傾向が生じ「単語の語末＋助詞」を読み上げる際、学習者は「第四声＋軽声」の声調の組み合わせで発話したものといえよう。

4-4 日本語発話でどのモーラを引き延ばすと不自然か

一般に、中国語母語話者は、日本語の/CV/と/CVR/の長さのコントロールが困難であることが指摘されている。黄國彦（1983：29）は中国語の音節の構造は/CV・/で、これが日本語の/CV/と/CVR/の中間の長さであることが原因であると指摘した。よって、日本語の発話の際も、こうした母語の影響を受け、モーラを引き延ばしていると考えられる。

森山（2004）が日本語の引き延ばし音調の定義として、文末部分も含め発話内部において、発話者の意図によって拍が通常の一拍の発音の長さを超えて発音されるものと述べている。また、引き延ばしが発生する場所は制約がある点が指摘されている⁽⁵⁾。森山（2004：253）は、日本語の引き延ばしの形式的特性について、京都教育大学学生（ $n=115$ ）にアンケート調査⁽⁶⁾を行い、「そのような発音ができる」と判断したものの割合を示している。それによると「これはふしぎーだ」という引き延ばしは一般的でなく、あえて不自然な発話をしたような印象になると述べている。

よって、森山（2004）と蔡茂豊（1987：104-105）を照合すると、確かに、助詞直前の短音が長音化しているように聞こえる「キ（気）ガーキーガ」という中国語母語話者の発音は日本語話者には不自然であるといえる。

5. ま と め

単語発話（藤田 2005）と文節発話（藤田 2007）の結果をもとに、本稿では特に 2 モーラ語を例に挙げて、中国語の音声の特徴を整理し、学習者の発話における不自然さは母語のどの要因が影響を与えているのか、問題点とその原因を特定してきた。

中国語の音節は第一声から第四声の声調の影響で音節の長さが異なる（馮1985）。一方、日本語のアクセント核がモーラの長さに与える影響はない。よって、中国語母語話者の日本語発話は声調の影響を受け、モーラ的位置により長さが異なる傾向が見られた。結果は以下のようにまとめられる。

中国語母語話者が日本語発話をする際、学習者が「第四声＋轻声」の声調の組み合わせで「長・短」リズムで日本語の「単語の語末＋助詞」を読み上げている傾向が示唆された。ただし、実に測定からは物理的な短音の 2 倍の長さは見られず、実際には相対的に長いといえる。

人間には言葉を自分の認識パターンにあわせようとする傾向がある。今回の結果は、特に文節発話「単語＋助詞」において、日本語の助詞を中国語の轻声に置換して発話する傾向が見られた。

まとめ：中国語母語話者は日本語の付属語に当たる助詞を中国語の付属語と同様であると誤解し、特に初級学習者の尾高型発話はそのモーラの長さの傾向から中国語の轻声化している

原因：①中国語の轻声語はすべて文法上の付属語「助詞」に当たる。

②中国語の助詞は長さが短いが日本語の助詞にはその特徴はない。

6. 音声教育への提言と今後の課題

本稿により学習者は「第四声＋軽声」で日本語の「単語の語末＋助詞」を読み上げている可能性が示唆された。黄國彦（1983：29）は、発音学習上の困難点の原因に中国語の音節の長さが日本語の/CVR/に近い点を指摘し、如何に日本語の/CV/を短く発音するかが問題点の克服の鍵と述べている。こうした問題の対策方法として、文節単位による発話練習が挙げられる。朱春躍（2001：15-42）では中国語話者のための日本語音声とその指導方法、特にリズム構造とパターン練習のタスク例が紹介されている。この中で中国人の日本語発話の中での誤りの傾向として、「元気」のように前部が長音節、後部が短音節の語の場合、短音節のモーラを延ばして「げんきい」と発話する学習者が多いと指摘されている。朱春躍（2001：15-42）はこの現象を回避するためにはパターン練習が必要であるとし、特に短音節で終わる語に1モーラの助辞をつけ、正しい読み方をする練習方法を挙げている。本稿では、文節「単語＋助詞」による発話は、極端に長かった単語発話での語末モーラが東京語話者の長さに近くなる点を確認した。すなわち、単語発話では平板型・頭高型・尾高型ともに第2モーラのELの長さが有意に長かったが、文節発話ではJNの長さにAL・ELは近づく傾向である（図2, 図4, 図6の各第2モーラ）。

河野（2001）では、文、節、句は文法の単位であり、意味の単位であるとし、ポーズなし＜文または節ごとにポーズ＜句ごとにポーズ、の順で意味の理解のしやすさが向上したと報告している。単語毎にポーズを置くと聞き取りにくくなることも確認している。こうした点からも単語の発話練習より文節での発話練習は将来的に日本人にとってわかりやすい話し方になる可能性がある。また、単語ひとつずつではなく、文節単位など意味のまとまりで考えながら聞いたり話したりするので、文節発話による練習は

一定の学習効果があると考えられる。

日本語教育の現場を省みると、新出単語導入における発音練習では、教師のモデル発話の後、学習者が模倣するのが一般的で、音声教材も同様に単語のみが発音されるのが現状であろう。中国語母語話者に関しては、本研究で助詞が短すぎることで、その前のモーラが長く聞こえるといった日本人の発話にはない不自然さが生じると考えられる。よって、文節発話の助詞のモーラの長さは、尾高型発話などにおいて短くならないように伝えるべきであろう。

今後の課題としては、学習者の語末あるいは助詞の長さが不適切であるがゆえ、聴覚的に不自然さを生む要因となっているかという点で、これを実験的に検証する必要がある。

付記

本稿は、拙作の東呉大学修士論文の一部を元に、大幅に加筆修正したものである。

《注》

- (1) 対象は、台湾出身の日本語学習者で、普通話を母語とするものをいう。本稿で扱う中国語は、普通話に限定する。
- (2) 長さとは、モーラの持続時間を表す。本稿では統一して「長さ」と表記する。
- (3) たとえば、『「の'やまに」「の'やまに」「の'やまに」「マ'ママニ」「マ'ママニ」「マ'ママニ」』という順で発話を依頼した。
- (4) 語頭の場合は、第四声（約 31%）>第二声（約 26%）>第一声（約 25%）>第三声（約 18%）の順で、語末の場合は、第四声（約 30%）>轻声（約 24%）>第二声（約 17%）>第一声（約 16%）>第三声（約 12%）である。
- (5) 非区切れ位置（文節境界内部）での引き延ばし、区切れ位置（文節境界）における引き延ばし、文末マイナス一拍目の引き延ばしとその条件、マイナス二拍目の引き延ばしに分けて論じた。
- (6) アンケートの結果は以下のとおりである。高い数値が受け入れられるものを示す。

ふしぎだ。	1%	1/115
よみました。	1%	1/115
いいですね。	0%	0/115
行きまーす。	100%	115/115
おもしろーい。	98%	113/115
やりまーした。	6%	7/108

引用参考文献

〈中国語文献〉

- 馮隆（1985）「北京話語流中聲韻調的時長」『北京語音實驗録』北京：北京大學出版社，131-195.
- 國立臺灣師範大學國語教材編輯委員會編纂（1982）『國音學』台湾：正中書局.
- 林燾（1985）「探討北京話輕音性質的初步實驗」『北京語音實驗録』北京：北京大學出版社，1-71.
- 林燾・王理嘉（1992）『語音學教程』北京：北京大學出版.
- 劉月華他（1991）『實用現代漢語語法』（繁体字版），台湾：師大書苑.
- 楊立明（1993）「漢語常用詞声調分布狀況的分析」『D 1 班研究發表論集成 4 年度研究成果報告書』水谷修他編，東京：日本語音声研究成果刊行書，236-248.
- 趙元任（1980：2002）『中國話的文法』（丁邦新訳）香港：中文大學出版社.

〈日本語文献〉

- 鮎澤孝子（1995）「日本語学習者による東京語アクセントの聞き取り —— 韓国語・英語・フランス語・北京語話者の場合 —— 」『日本語教育学会秋季大会予稿集』福岡：日本語教育学会，165-170.
- 寛一彦・広瀬友紀（1997）「対照研究を利用したモーラ数知覚の検討」『音声研究』第 1 巻第 3 号，東京：日本音声学会，23-28.
- 黃國彦（1983）「中日両語の音韻・音声の比較」『中日両語対照分析論集』台湾：中國文化大學東語系日文組，13-53.
- 呉亜棟・辺見一男・井上和夫（1991）「音節の相対長さによる中国語音声の軽声の認識」『電子情報通信学会論文誌』'91/4 Vol. J 74-D-II No. 4, 東京：電子情報通信学会，572-574.
- 河野守夫（2001）『音声言語の認識と生成のメカニズム：ことばの時間制御機構とその役割』東京：金星堂.
- 蔡茂豊（1987）『中国人に対する日本語教育の理論と実践 —— 音声教育篇 —— 』

台湾：東呉大学日本文化研究所.

朱春躍（1993）「中国語話者の日本語アクセント習得 — その特徴と指導上の問題点をめぐって —」『国際化する日本語 — 話し言葉の科学と音声教育 —』東京：クバプロ.

朱春躍（2001）「中国語話者の日本語音声およびその指導」『ことばの科学 10』言語学研究会編 東京：むぎ書房, 15-42.

藤田守（2002a）「中国語母語話者の日本語発話におけるモーラ長さの特性 — 台湾出身者と東京語話者の発話データを比較対照して —」東呉大学修士論文, 台湾：東呉大学日本語文学系.

藤田守（2002b）「中国語母語話者の日本語発話におけるモーラ長さに関する初步的研究 — 発音調査報告 —」『東呉日語教育学報』第 25 期, 台湾：東呉大学日本語文学系, 85-118.

藤田守（2003）「中国語母語話者の日本語モーラリズム — モーラ数とモーラ長さの相関関係 —」『東呉日語教育学報』第 26 期, 台湾：東呉大学日本語文学系, 243-274.

藤田守（2005）「中国語母語話者の語末長音化現象 — 単語発話における日本語モーラ長さの特徴 —」『東呉外語学報』第 21 期, 台湾：東呉大学出版, 41-72.

藤田守（2007）「中国語母語話者の日本語文節発話のモーラ長さ — 1 モーラ語から 4 モーラ語の語末と助詞の長さの特徴 —」『東呉外語学報』第 25 期, 台湾：東呉大学出版, 81-113.

松崎寛・河野俊之（1998）『よくわかる音声』東京：アルク.

森山卓郎（2004）「引き伸ばし音調について」『文法と音声IV』東京：くろしお出版, 231-255.

ロベルジュ, C・本間泰（1987）「ききとり＝発音の観点から見た日本語の音節とその構成要素の検討」『言調聴覚論研究シリーズ 日本語の音節研究』第 10 巻 上智大学聴覚言語障害研究センター, 14-54.

〈英語文献〉

Hoequest, C.Jr. (1983) "Syllable Duration in Stress-, Syllable-, and Mora-Timed Languages", *Phonetica* 40, 203-237.

（原稿受付 2008 年 6 月 2 日）

〈論 説〉

Paremias Calceatenses

Oscar Javier MENDOZA GARCÍA

El noveno centenario de la muerte de Santo Domingo de la Calzada en 2009 nos anima a sacar a la luz estos testimonios populares de devoción a nuestro Santo Patrón y Fundador del pueblo que lleva su nombre. Paremias son refranes, proverbios, adagios, sentencias, axiomas, dichos agudos y breves de contenido moral o científico, anónimos o pronunciados por alguien con nombre y apellidos. El adjetivo calceatenses se refiere a Santo Domingo de la Calzada, pueblo originado del asentamiento que el Santo hizo construyendo además de un templo, un puente y un hospital, una calzada con la que desvió el antiguo Camino Jacobeo para poder aliviar el penoso caminar de los peregrinos que por ese lugar cruzaban el río Oja encaminados a la tumba de Santiago Apóstol. Estas paremias son testimonios orales transmitidos de generación en generación que Don Bonifacio Gil García tuvo el coraje y acierto de ir recopilando unas veces de oído y otras muchas recibidos de algún vecino del pueblo o forasteros de pueblos cercanos. La bibliografía citada, tan difícil de cotejar por tratarse de ediciones antiguas ya agotadas, es digna de alabar y de que quede al menos impreso su título.

La recopilación de estas paremias la hacemos de diversas notas manuscritas de Don Bonifacio Gil García y de otras muchas fichas que le entregaron o enviaron. El sobre donde están recogidos la gran mayoría de los documentos aquí transcritos se agrupan bajo el epígrafe BG 913, “Folklore en La Rioja”, en la Biblioteca de La Rioja, en Logroño. Transcribimos y ponemos algunas notas también a otras

coplas y comentarios de Don Bonifacio Gil que se encuentran recogidos en el sobre titulado “Dictados tópicos de La Rioja” bajo el epígrafe BG 872 en la misma Biblioteca de La Rioja. Se trata pues de documentos inéditos que tienen estrecha relación con otros ya publicados por él mismo en la revista *Berceo* n° 28, año VIII (1953): “Dictados tópicos de la Rioja (Geografía Popular)”, pp. 361-364 y n° 29 (1953), con el mismo título a modo de conclusión, pp. 505-520. Igualmente, estas paremias están muy relacionadas con las coplillas del artículo “Dictados tópicos de Santo Domingo de la Calzada” publicado por Don Bonifacio Gil en la revista *RDTP (Revista de Dialectología y Tradiciones Populares)*, CSIC, t. X, cuaderno 3°, Madrid, 1954, pp. 472-482.

En esta tarea de transcripción nos limitaremos a estos dos sobres de documentos inéditos. Aunque vamos cotejando y haciendo referencia a los escritos de las revistas citadas, remitimos al lector a esos documentos ya publicados por Don Bonifacio Gil con el fin de tener una completa información de toda su recopilación folklórica de dichos y costumbres festivas de Santo Domingo de la Calzada. Para facilitar la lectura de estos documentos tan variados nos permitimos encabezar estas coplillas con un enunciado que ordenamos alfabéticamente. Fotocopiamos y hacemos un breve comentario a la canción de “Santo Domingo” de las Islas Canarias recogida en “Dictados Tópicos de La Rioja” (BG 872) por estar publicada de forma más sencilla en la ya citada *RDTP*.

Abraham de la Rioja (El)

“Santo Domingo, el Abrahán de la Rioja”.

Gloriosa denominación a Santo Domingo de la Calzada, Patrono de la ciudad del mismo nombre, cuya ejemplar vida y hechos milagrosos ha merecido se extienda aquélla a toda la demarcación geográfica. (BG 913)

Alimentos

Santo Domingo de la Calzada, pan, vino y carne asada (Siglo XV).

Es decir productos y alimentos de buena calidad. Figura en los “Fragmentos del programa de un juglar cazarro” que publicó Menéndez Pidal en su libro *Poesía juglaresca y juglares*. Otro refrán, registrado por Correas (*Vocabulario...*) dice lo contrario:

Santo Domingo, mal pan y peor vino.

Refranes que acusan respetable antigüedad por cuanto en el término de esta ciudad apenas si quedan hoy viñas. Esto en lo que respecta al vino. En lo que concierne al pan y a la carne asada, siguen teniendo fama estos dos alimentos. (BG 913)

Anuncio de las Fiestas del Santo por la Cofradía del Santo

El día veinticinco de abril / sale la gaita con el tamboril.

Expresión rimada que aún se dice en Santo Domingo de la Calzada. Alude al anuncio de las fiestas del Santo Patrono. El P. Martín Brugarola, en su trabajo “Las tradiciones populares de Santo Domingo de la Calzada”, en *RDTP*, t. VI, menciona a este respecto: “El veinticinco de abril se celebra desde tiempo inmemorial un acto sencillo, lleno de encanto inefable y placentero, que el espíritu y sentimiento popular sabe poner en las cosas y sucesos en el lento transcurso de las generaciones. A media tarde se reúne la Cofradía del Santo en el domicilio del Prior, con el andador o demandadero de la misma y los gaiteros contratados al efecto. Salen para recorrer las calles y los arrabales de la ciudad presidiendo la comitiva el grupo formado por los dos Priors, el viejo del año anterior y el actuante, acompañado por los dos Procuradores de la Cofradía y van delante el andador, portador de un antiguo tintero y los gaiteros, tocando alegres marchas y pasacalles. Los cuatro Mayordomos de la Cofradía se destacan avanzando más en el recorrido del itinerario. Cada Mayordomo lleva un pliego de papel y una blanca y hermosa pluma, de largas y rizadas

barbillas, como aquellas que suelen adornar el airón y lambrequines de los escudos heráldicos. Se trata de que los Mayordomos van al encuentro de las jóvenes que en el día once de mayo han de llevar el Pan del Santo en la primorosa y vistosa procesión. Para ello, las jóvenes adolescentes que por cualquiera circunstancia familiar tienen hecho su ofrecimiento, salen al encuentro de un Mayordomo y le ruegan que anote su nombre y así se va formando la lista de las doncellas que han de llevar el Pan del Santo que han de ser trece por lo menos ... La inscripción de una doncella en la lista es motivo de regocijo y fiesta familiar en su casa. Significa el amoroso cumplimiento de su devoción al Santo. Termina la ceremonia regresando la comitiva a casa del Prior y éste invita a los concurrentes a una frugal merienda. Con ello ha quedado solemnemente publicado el anuncio de las fiestas de la ciudad.” (BG 913)

Barrios de Santo Domingo de la Calzada relacionado con la tabernas y los borrachos

*Por San Francisco subir, / y por la Puebla bajar,
romper unas zapatillas, y otras no poder comprar.*

Remitida por José María Barruso. San Francisco y la Puebla son dos barrios de la ciudad. Este ejemplo enlaza con el siguiente, inventado por el Sr. Moneo Salinas:

*En Santo Domingo / hay muchos borrachos
que las taberneras / les roban los cuartos,
echan agua al vino, / lo venden a “rial”,
y comen y beben / y sin trabajar.*

Consideramos injusto que en nuestra ciudad atribuyan la existencia de muchos borrachos, y lo mismo en otras localidades conforme a su propia documentación. Borrachos los hay, en mayor o menor número, en todas partes, particularmente en los sitios donde abunda el vino como la Rioja. Si a ello se añade su excelente producción, cabe que la gente haga honor a lo suyo. De esto a que se emborrache en nú-

mero superlativo ...

Variante: *En Santo Domingo / hay muchos borrachos,
y las taberneras / se llevan los cuartos,
los vasos de vino / los venden a real,
y comen y beben / y sin trabajar.* (BG 913)

Calceatenses: *Pajeros*

A los de Santo Domingo les apodan “*pajeros*”, posiblemente por la abundancia de paja que existe en la ciudad, y muy verosímilmente porque en la Casa-Cuartel de la Guardia Civil hubo en tiempos unos talleres donde confeccionaban fundas de paja para botellas, así como también sillas de lo mismo. (BG 913)

Canción de Santo Domingo de las Islas Canarias

Encontramos esta misma canción que recoge de las Islas Canarias, donde se extendió, no se sabe por qué, la devoción a Santo Domingo de la Calzada, en *RDTP*, t. X, 1954, cuaderno 3º, p. 479. Lo recoge en la Biblioteca Musical Canaria, de la “colección de composiciones sueltas para piano”, publicada en Santa Cruz de Tenerife, donde tiene el título de “El Santo Domingo” que es como se le conoce. Allí mismo se describe lo siguiente: “Fue uno de los bailes y cantos más socorridos entre el elemento rural de Tenerife. En la Palma, la ‘cantiga’ del Santo Domingo es un romance que canta uno solo, respondiendo a cada dos versos los acompañantes con un estribillo”. Por lo que después expresa, el texto no constituye cuerpo de romance sino un estribillo que se intercala con el romance propiamente dicho cada dos versos.

Es realmente curioso que a Santo Domingo de la Calzada se le invoque en tierras tan lejanas a la del sitio donde se le venera. Hemos consultado sobre el caso a varios isleños, y nadie nos ha dado una razón que fundamente el hecho, a no ser de modo conjetural: algún religioso que anteriormente residiese en la ciudad del Santo o cualquier cal-

ceatense que tomase parte en la conquista de las islas (efectuada de modo definitivo en el reinado de los Reyes Católicos, pues la factura de su música acusa respetable antigüedad), divulgarían tan famoso canto, acaso añorando la tierra de origen y su Patrono.

Transcribiremos la letra y después fotocopiamos el manuscrito original de esta canción a Santo Domingo en tiempo de mazurca que clasifica como “Canción n° 4”. En esta partitura manuscrita aparece con esa misma melodía pero con la particularidad de que va adornada la estrofa con dúo y el “la, la, la...” también haciendo dúo y con la dominante fija en la voz superior que resuelve en la tercera. En otro manuscrito con tachaduras aparece también esta melodía para cantar y con acompañamiento para bandurrias que dejamos sin transcribir.

Letra del manuscrito original:

Santo Domingo de la Calzada / Marchan a misa de madrugada

La, la, la, la la; la, la, la, la, la; la, la, la, la, la; la, la.

La, la, la, la la; la, la, la, la, la; la, la, la; la.

Yo tengo un novio chiquitito / yo soy la vaifa y él el vaifito,

Y él el vaifito, si no lo fuera / Santo Domingo no lo quisiera.

Santo Domingo de la Calzada / Marchan a misa de madrugada

La, la, la, la la; la, la, la, la, la; la, la, la, la, la; la, la.

La, la, la, la la; la, la, la, la, la; la, la, la; la.

“Vaifa” quiere decir “cabra chica”. Hacemos notar que para el novio usa cariñosamente el diminutivo “vaifito”. Y también que los rebaños de ovejas y cabras están muy relacionados con el folklore popular canario.

En el libro *Educación musical escolar y popular* del Instituto Musical de Pedagogía de Santa Cruz de Tenerife (1946) que dirigió el notable músico don Manuel Borguñó, aparece una variante poética (con la misma música) de la primera cuarteta apuntada de esta copla canaria que por su rima acusa un sentido lógico:

Santo Domingo / de la Calzada

Marchan a misa (Var. llévame a misa) / de madrugada.

Los dos últimos versos antes del la, la, la, tienen a su vez esta variante:

Otra variante de los versos tras el la, la, la, son:

*Santo Domingo / Domingo Santo,
sobre tu estera / tiendo mi manto.*

Chicas guapas

Hervías y Bañares / corral de vacas

Santo Domingo y Haro, / las chicas guapas.

Hervías y Banares son pueblos próximos a Santo Domingo de la Calzada. Esta y Haro son ciudades y distan entre sí unos veinte kilómetros. Los dicterios entre localidades próximas son muy corrientes en toda España y suelen partir aquéllos de los núcleos urbanos de

mayor importancia. Copla remitida por José María Barruso. (BG 913)

Lo apreciamos también en la siguiente copla:

*Me decían los antiguos / en Grañón no busques mujer,
búscala en Santo Domingo / que hay más donde escoger.* (BG 872)

Copla de un vizcaíno

Recuerdos de un vizcaíno:

*Tres hijas que yo tener, / a Santo Domingo mandar,
castellano no aprender / y el vascongado olvidar.
Mandar tres y venir seis, / las ovejas “blancos”, borregos “negras”.*

Recogida por el sacerdote, ya fallecido, don Pedro González. (BG 913)

Cruz de los Valientes

La Cruz de los Valientes no es realmente un dictado, mas sí encierra una alusión tópica. La Cruz de los Valientes, cruz voluminosa que se encuentra en un costado de la carretera entre Santo Domingo y Grañón, es testimonio de un hecho que acaso tenga visos legendarios, si bien su existencia real (la cruz misma) dé pabulo a creer que sea fidedigno cuanto vamos a relatar:

“Hace de esto un sin fin de años”, entre las localidades de Santo Domingo de la Calzada y Grañón hubo una disputa sobre la posesión de un pago colindante entre ambas. Al no hallar una fórmula jurídica (aunque es posible que siguieran las prácticas del duelo judicial, cosa frecuente en la civilización ibera, que continuó durante la dominación romana y acaso en la Edad Media a la que llamaban los Juicios de Dios), que determinase su pertenencia a una de los contendientes, acordaron que lucharían a cuchillo un mozo de Santo Domingo con otro de Grañón, llamado Martín García. Quien venciera concretaba la posesión del encinar para su localidad. Este lugar, actualmente se denomina “Dehesa de Grañón”. Hubo para la lucha una preparación gastronómica. Al mozo de Grañón le alimentaron con tocino, habas,

caparrones y morcilla. Al de Santo Domingo a base de pollo, pescado y “otras cosas más finas” que a su contrincante. Al comenzar la contienda, el calceatense asestó una tremenda puñalada al de Grañón creyéndose estaría fuera de combate. Entonces una vieja de este último pueblo, familiar del herido, arrojó a los ojos del mozo de la Calzada un puñado de tierra, circunstancia que aprovechó el grañense (repuesto momentáneamente de la herida) para propinar a su contrario una mortal puñalada. Aún se oye decir que en Grañón, el Sr. Cura párroco, después del Santo Rosario, reza un Padre nuestro por el alma del mozo que ganó (no en buena lid como ha podido colegirse) el pago de la Cruz de los Valientes.

En el libro de Juan C. Bustó, *Glorias riojanas*, p. 52, consta que en el referido pueblo “hicieron voto de rezar en el rosario todos los días festivos un Padre nuestro y Avemaría por el alma de Martín García”. (BG 913)

Danza del Almudébar (Huesca)

En el Alto Aragón se invoca a nuestra ciudad. Veamos esta composición de un dance de Almudébar (Hueca) que figura en la obra de Ricardo del Arco y Garay, *Notas de folklore del Alto Aragón*, p. 347 (Madrid, 1943) que acusa un anhelo ante el amor ausente:

*Allá arriba, en Santo Domingo
de la Calzada, tengo mi amor,
y lo tengo enfermo ¡Jesús qué dolor!
Mucho lo siento de no tenerlo
más a la vista, porque lo quiero.* (BG 913)

El gallo y la gallina

*En Santo Domingo de la Calzada
cantó la gallina después de asada.*

Según la tradición, por intercesión del Santo, para probar la inocencia del hijo de un peregrino francés (de procedencia teutónica se-

gún otros autores) que en unión de sus padres se detuvo en la ciudad donde fue ahorcado injustamente, cantaron un gallo y una gallina asados que el corregidor con su familia se disponían a comer. En recuerdo de este portentoso milagro conserva el Cabildo vivos un gallo y una gallina blancos en un artístico gallinero situado frente al altar del Santo Patrono. De ello se conserva esta seguidilla:

El buen Santo Domingo / de la Calzada

Dio vida a una gallina / después de asada.

Vergara Martín, *Diccionario geográfico popular*. También conocemos estas coplas francesas que ante el sepulcro del Santo cantaban los peregrinos de Moisés:

Oh que nos fumes joyens / puand nous fumes a Saint – Dominique

*En entendant le coq chanter / en aussi la blanche gallina.*¹

Para Iribarren es una copla Occitana: *El porqué de los dichos*, p. 475:

El buen Santo Domingo / de la Calzada

dió vida a una gallina / después de asada.

En *RDTP*, CSIC, “Dictados tópicos de Santo Domingo de la Calzada”, Madrid, t. X, 1954, cuaderno 3º, p. 475, cita también esta copla de la obra del P. Martín Brugarola, seguidilla recogida por Vergara Martín: “Las tradiciones populares de Santo Domingo de la Calzada”, en *RDTP*, CSIC, Madrid, t. VI, 1950, cuaderno 4º, p. 460. (BG 872)

En medio la Plaza “el” Santo / ha nacido un arbolito

con la gallina y el gallo / y en medio el Santo Bendito.

Se canta con tiempo de jota muy conocida. El segundo y tercer versos comprende el cuartel inferior del escudo de la ciudad: una encina con una hoz incrustada en el centro del árbol y en sus costados, abajo, el gallo y la gallina que miran hacia el tronco de aquel. Recogida en la propia ciudad.

El Jardín

A Santo Domingo de la Calzada se le denomina “el jardín”.

Así la oímos calificar siendo muchado por la fertilidad de sus huertas, buenos paseos, frondoso arbolado, en particular el que existía (hoy ha sido reformado, quizá con acierto) en el llamado paseo de los Molinos. (BG 913)

El Santo como lo propio de la ciudad en comparación con otros lugares

*En Madrid están las Cortes, / y en Zaragoza el Pilar,
en Santo Domingo, madre / el Santo y la Catedral.*

Remitida por José María Barruso.

*Qué importa que Madrid sea / de España la capital,
si en Santo Domingo tienen / el Santo y la Catedral.*

Se aplica también a otros pueblos. Está recogida en la misma ciudad.

*En Zaragoza los maños, / cantan a la Pilarica,
y en Santo Domingo, madre / al Santo y la cachavita.*

Como ya es sabido, nuestro Patrono Santo Domingo de la Calzada, entre los atributos de su efigie, porta una cayada que sostiene en su parte superior con la mano izquierda. Dictada por mi hermano Benito. (BG 913)

*En Santo Domingo, el Santo, / en Ezcaray, San Lorenzo,
y en la villa de Ojacaastro, / las Reliquias a su tiempo.*

La fiesta de las Reliquias se celebraba en Ojacaastro el nueve de julio. Don José J. Bautista Merino, en su monografía *El folklore en el Valle de Ojacaastro*, p. 48, al examinar el Catastro mandado hacer por el Marqués de la Ensenada, llevado a cabo en los pueblos del Valle en 1752, apunta una partida del Ayuntamiento de Ojacaastro que dice así: “Por gasto y danza, fuegos, novillada, en Corpus. Nuestra Señora de septiembre, día de Gracias y Reliquias (nueve de julio), cuatrocientos reales”. Trátase de las reliquias de San Zenón, San Vidal y San Agrícola. (BG 913)

El Santo hacedor del puente

*En Vitoria nació el Santo / y bajó a Santo Domingo
a hacer un hermoso puente / en ese bonito río.*

Un breve ciclo de la vida de Santo Domingo de la Calzada, calificado por Joaquín de Entrambasaguas “el ingeniero del cielo” en el libro del mismo título (Biblioteca Nueva. Madrid, 1940) dedicado a la biografía del Santo. El río a que alude la copla es el Oja, llamado también Glera o Ilera. Copla remitida por Francisco Barrón.

El Santo y la jota

*Les quiero decir a ustedes / de algún pueblo de la Rioja:
tenemos Santo Domingo, / que saben bailar la jota.*

Dictó D. Francisco Barrón, de Castañares. (BG 913)

Pequeña variante relacionado Santo Domingo con la jota:

*Les quiero decir a ustedes / de algún pueblo de la Rioja
tenemos Santo Domingo / que sabe bailar la jota.* (BG 872)

Embutidos de Criales

*Para vino Cuzcurrita / para embutidos Criales
para buen jamón en Sancha / y alubias en Castañares.*

Criales es quien tenía fábrica de embutidos en Santo Domingo de la Calzada. Sancha era un productor de jamones de Casalarreina. (BG 872)

Fiestas del Santo

*Vamos a casa “el” prior / a que nos dé de beber
con aquella jarrita blanca, / ay qué rica nos ha “i” saber.*

Copla popular muy antigua que se canta en la ciudad entre los días 10 al 13 de mayo. Alude a la costumbre que aún subsiste de ir el 13 de mayo (fecha posterior a la fiesta principal), llamado el día el Santito, la Cofradía del Santo, por la mañana, con los gaiteros, danza-

dores, doncellas (que llevaron en la tarde del 11 el pan del Santo) y el estandarte de la Cofradía, a la casa del prior saliente, yendo a continuación a la del entrante donde son convidados todos los asistentes. Entretanto se organiza un baile en la calle misma en el que participan los danzadores y doncellas ya citados. (BG 913)

Muy popular es la siguiente copla:

*Santo Domingo de la Calzada,
que cantó la gallina / después de asada.*

1. *El Santo, arder en fiestas, / gente animada
Bien por Santo Domingo / de la Calzada.*
2. *El Santo—de alegría / te ves rendido
El Santo—grata fecha / que nunca olvido.*
3. *El Santo—es hoy el grito / más insistente,
Al Santo—alborozada / marcha la gente.* (BG 872)

Gozos de la Novena del Santo

Gozos del Santo:

*Pues en alas del amor / pasaste a más feliz muerte,
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
La Rioja, país fecundo, / te dio cuna y ocultó
tu niñez, con que mostró / no naciste para el mundo:
y es que quiso el Criador, / desde niño engrandecerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
A los cinco años te ves / zagal por valles y oteros,
aprendiendo en los corderos / la inocencia, cual Moisés:
por esta vía el amor / vino luego a poseerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Amante de la instrucción / a Valvanera te fuiste,
y con las letras bebiste / el alma a la religión,
desde aquí más tu candor / sólo con Dios se divierte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
De San Benito hijo amante / pretender ser, más tu Esposo*

no te quiere religioso, / sino ermitaño constante :
El reserva tu fervor / para otra empresa más fuerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Por divina inspiración / buscas maestro en el desierto,
que como otro Pablo advierto / te da la última lección :
y es que gusta el Redentor / solitario mantenerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Cinco años tu amor en prueba / estuvo en la soledad,
siendo tal tu austeridad / que asombraste a la Bureba :
al fin dispone el Señor / logre el mundo conocerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Con Gregorio a predicar / otro lustro te dedicas,
y como en obras predicas / no cesas de edificar :
te faltó aquél con dolor / y es preciso recogerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Amante fiel y expresivo / te admiro en otro desierto
a todo lo vivo muerto, / y sólo a lo eterno vivo.
de Pablo es este primor / que en ti de nuevo se advierte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
A Dios tu alma enamorada / casa le da, y sin igual
dispone al pobre hospital, / puente, camino y Calzada :
no es mucho que el Salvador / prosiga en enriquecerte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Silos y Hortegas amantes / te visitan escondido,
y como estás encendido / haces que vuelvan flamantes
comunicas tu calor / a cuantos llegan a verte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
Fiel depósito de trigo / tu sepulcro se veía,
dando a entender que hallaría / en ti remedio el mendigo :
al fin tirano el amor / consiguió en el esconderte.
“Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
La calumnia fementida / pudo ahorcar al peregrino,

*mas con impulso divino / tú le vuelves honra y vida :
 Gallo y Gallina a un tenor lo cantan, si bien se advierte.
 “Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
 Muertos, enfermos y sanos / a Dios alaban al ver
 que se ha empeñado en poner / todo remedio en tus manos :
 empeño es de su fervor / aspirar a engrandecerte.
 “Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.
 Pues en alas de amor / pasaste a más feliz suerte,
 “Sednos, Domingo, en la muerte / amoroso protector”.*

Recítanse en la Novena del Santo. En Ignacio Alonso Martínez, *Santo Domingo de la Calzada*, Haro, 1890. (BG 913)

La Rueda

*Venid, peregrinos / de lejanas tierras
 a ver a Domingo / colgando la Rueda.*

Alude a una rueda milagrosa. Al pasar un carro tirado por bueyes (que huían desmandados) por encima de un peregrino que dormía en el suelo y dejarlo maltrecho o muerto, salió, por intercesión del Santo, sano y salvo andando por su pie, previa invocación por aquel a la Santísima Virgen. El milagro se realizó el 13 de octubre de 1098. En recuerdo de este portento, en la tarde del 11 de mayo tiene lugar la procesión de la Rueda que preside el Excelentísimo Ayuntamiento. Así la describe don Ignacio Alonso Martínez en su librito *Santo Domingo de la Calzada* (Haro, 1890): “Sobre una pirámite polígona rodeada de hachas rizadas de cera, angelotes metálicos y paños de seda, va colocada horizontalmente una gran rueda plateada análoga en su forma a la de los carruajes ordinarios, sobre la cual se levanta una gran copa vegetal, profusamente engalanada de banderolas, talcos, obleas de diversos colores y otra multitud de objetos vistosos, y en esta disposición y precedida de la bandera de la ciudad, es llevada triunfalmente desde la Iglesia de San Francisco a la Catedral donde la ofrece el Ayuntamiento, y mientras la Capilla entona precioso villancico, se

coloca en forma de araña pendiente frente a la Santa Capilla, permaneciendo así el resto del mes de mayo”. (BG 913)

Mujeres de Santo Domingo de la Calzada

*Santo Domingo / de la Calzada,
ni soltera ni viuda / ni tampoco casada.*

Es decir que no son recomendables las mujeres de nuestra ciudad, según la cuarteta. (BG 913)

Paños de Santo Domingo

*No compres mula en Logroño / ni en Santo Domingo paño,
ni mujer en Labastida / ni amigos tengas en Haro.
La mula te saldrá falsa / el paño te saldrá malo,
La mujer te saldrá p... (puta) / y los amigos contrarios.*

En cuanto al paño de Santo Domingo de la Calzada no sabemos si era bueno o malo, quizá lo primero.

Variante: No compres mula en Bañares.

Variante: Ni seas huesped en Haro.

Variante: La mujer, fea y borracha. (BG 913)

Don E. Paúl y Almarza publicó en el periódico *La Rioja*, 10 de septiembre de 1931, una copla rebatiendo la composición anterior:

*Ríete de los cantares, / que de todo hay, bueno y malo,
en La Calzada, en Logroño, / en Labastida y en Haro.* (BG 913 y 872)

Búscala en Santo Domingo (la mujer). Cfr. Grañón. (BG 913)

Sobre la composición tan popular, conocida también en otras provincias con la única variación de los nombres de lugares, que comienza con “No compres mula en Logroño ...”², vemos que se muestra taci turno en el penúltimo verso al transcribir “la mujer te saldrá p...” con puntos suspensivos para evitar la palabra “puta”, que cualquier lugareño puede adivinar. Sobre ese verso vemos una ligera variación en la transcripción que hace José María Barruso de Santo Domingo de la

Calzada: “la mujer fea y borracha”. Volvemos a transcribir esta copla de esta manera para su recuerdo:

*No compres mula en Logroño, / ni en Santo Domingo paño,
ni mujer en La Bastida, / ni amigos tengas en Haro.
La mula te saldrá falsa, / y el paño te saldrá malo,
la mujer fea y borracha, / y los amigos contrarios.*

Ni que decir tiene que no hay que hacer mucho caso de estos consejos, pues en todos los sitios de todo hay, tanto bueno como malo. Concretamente en Santo Domingo, explica Don Bonifacio en *Berceo*, n.º 28, p. 365, que a principios del siglo XIX fabricaban paños en esta ciudad con lana que adquirían de la sierra de Cameros, lugar tan apreciado por el ganado lanar, y de Burgos, que nos hace suponer eran de buena calidad. (BG 872)

Río Oja

*A las orillas del Oja / las golondrinas cantaban,
y en sus trinos repetían: / «Qué es qué es la Calzada»
Estribillo: Cante la Calzada / con todos sus hijos
que viva mil veces (bis) / el Santo Bendito.*

En el último verso de la copla hay una expresión onomatopéyica, aunque no lograda. Recogida en la ciudad.

*El río que pasa el puente, / el puente Santo Domingo,
pasa por Castañares / el agua que ellos no han querido.*

Debe aludir a que en Castañares aprovechan mejor las aguas del río Glera o Ilera (Oja) que en Santo Domingo de la Calzada, localidades próximas. Copla remitida por Francisco Barrón, de Castañares. (BG 913)

Romance del rey don Pedro.

(Un clérigo de Azofra advierte a don Pedro del riesgo que le amenaza).

Teniendo el rey don Pedro / su real fortalecido

*En esa tierra de Nájera / en campo que Azofra es dicho,
Contra el conde don Henrrique / por mal querencia que ha
habido*

*Un día estando en su tierra / un clérigo allí ha venido,
Dice le quiere hablar / en puridad y escondido.
El rey don Pedro con él / en una pieza se ha metido,
El clérigo con esfuerzo / estas palabras le ha dicho:
“Rey don Pedro, rey don Pedro, / si supieses lo que sabido, (sic)
no estarías tan descansado / ni ternías de ti olvido.
Sabe que por revelación (sic) / del señor Santo Domingo
He sabido que estás tú / en grandísimo peligro,
Porque ese conde tu hermano / gran traición te ha urdido
Y si no te vengas dél / no puedes escapar vivo,
Porque el mesmo con sus manos / te dará cruel martirio:
Mira bien lo que te digo / y no lo echas en olvido,
Porque assina te verná / si no haces lo que digo,
Y es que con muy gran presteza / ordenes sea prendido
Y tenle en tus prisiones / hasta que haga paz contigo:
Mira bien que no le sueltes, / que no hagas con él partido,
No pares hasta hacer paces / o habelle destruído,
Mira que te verná mal / si no haces lo que dicho (sic),
Ten en mucho este consejo / ten en mucho este aviso,
Que no es menos que librarte / tornarte de muerto vivo,
Ya vees en el gran peligro / en que tú estabas metido,
No podías escapar / si no fueses socorrido,
No desprecies el aviso / que del cielo te ha venido”.
Don Pedro desque lo oyó / algo se hobo estremecido,
Mas con dissimulación / en muy poco lo ha tenido
Piensa el clérigo lo dice / por haber algún roído.
Después que un rato ha pensado / en lo que el clérigo ha dicho
Llama a sus altos hombres (sic) / los que allí han venido (sic)
Después de todos preguntados / estas palabras les dijo:*

*“¿Qué os parece, caballeros, / deste caso acontecido?
 Gran traición me estaba armada, / Dios vivo me ha socorrido;
 Oid lo que dice el clérigo, / oiréis un gran peligro,
 Mas yo creo ciertamente / que es ello todo fingido
 y que el clérigo lo dice / por armar algún roído.”
 Manda luego sin tardar / que cuente lo que ha sabido
 por revelación (sic) del señor Santo Domingo.
 Después que lo hubo contado / lo mandó llevar asido,
 Pensando mucho en el caso / por burla lo ha tenido,
 Mandó que sin dilación / el clérigo sea metido
 en una grande hoguera / lo ha mandado quemar vivo,
 porque el rey siempre creyó / que todo era fingido.*

No hemos dudado en incorporar este romance a nuestro trabajo no ya por aludir geográficamente al pueblo de Azofra (juntamente con Nájera) sino por asociar en su texto, en su mayor representación, al Abraham de la Rioja Santo Domingo de la Calzada. El romance lleva el n.º XXIX de la tercera parte de la *Silva de varios Romances (De historias)*, impreso en Zaragoza el año 1551. El texto lo hemos tomado de la *Antología de poetas líricos castellanos*, de Menéndez Pelayo, t. IX, p. 24, de sus *Obras Completas*, edición del Consejo Superior de Investigaciones Científicas. Cfr. 1945.

El contenido del romance tiene, a no dudarlo, visos de fidelidad. Veamos cuanto a este respecto nos dice el cronista de Santo Domingo e hijo adoptivo de esta ciudad D. Ignacio Alonso Martínez, de grata memoria, en su librito titulado *Santo Domingo de la Calzada. Recuerdos históricos*, 2.ª edición, Haro, 1889, Imprenta de Miguel Pasamar, p. 69: No puedo dejar de mencionar otro hecho portentoso de carácter profético, que refiere el célebre cronista y Canciller de Castilla don Pedro López de Ayala, testigo presencial de los sucesos acaecidos entre don Pedro I y don Enrique de Trastámara. Copiaremos sus palabras: “Estando el Rey en aquel lugar de Azofra, cerca de Nájera, llegó a él un clérigo de misa, que era natural de Sancto Domingo de la

Calzada, e dixole que quería falar con él aparte, e el Rey dixole que le placía de le oír. E el clérigo le dixo así: ‘Señor: Sancto Domingo de la Calzada me vino en sueños, e me dixo que viniese a vos, e que vos dixese que fuesedes cierto que si non vos guardadeses, que el Conde don Enrique vuestro hermano vos avía de matar por sus manos’. E el Rey desque esto oyó, fué muy espantado, e dixo al clérigo, que si avía alguno que le aconsejara decir esta razón, e el clérigo dixo que non, salvo Sancto Domingo que se lo mandara decir. El Rey pensó que lo decía por inducimiento de algunos, e mandó luego quemar al clérigo allí do estaba delante de sus tiendas”.³ Pero el anuncio profético se cumplió en Montiel. En Azofra se va anualmente en procesión al punto donde fué sacrificado el Sacerdote, rezando el clero y pueblo algunas preces por su alma. Lo he practicado y presenciado muchas veces. (BG 913)

Sancha la Bermeja de Bañares

*Aquí morirá Sancha la Bermeja
y con Santo Domingo quedará la dehesa.*

Se alude con esto a que las disputas de tiempo inmemorial tuvieron los de Santo Domingo con los de Bañares sobre la posesión de una dehesa, la resolvieron de igual modo que los de Belinchón y Tarancón (Cuenca), según la frase que acerca de este particular se ha conservado. Nótese, sin embargo, que aunque la excelente bebedora que venció en tan singular caso se llama lo mismo, si se ha de creer a los de Bañares, la cuestión se resolvió a su favor, puesto que entre ellos se decía: “Aquí morirá Sancha la Bermeja, mas de Bañares será la dehesa”. Vergara Martín, *Diccionario geográfico popular*.

Sea lo que fuere, el hecho es que los de Santo Domingo tuvieron un dehesa llamada Bañares (*RDTP*, CSIC, Madrid, t. X, 1954, cuaderno 3, en “Dictados tópicos de Santo Domingo de la Calzada”, p. 473).

Acaso sobre la posesión de la citada dehesa reciten en Santo Domingo esta cuarteta de seguidilla cuyo sentido, al comprender al

Santo Patrono, lo completa la que contestan los de Bañares:

*Todos los de Bañares / son unos brujos,
Que apedrearón al Santo / con “calambrujos”.⁴*

Variante de “apedrearón”: achinaron. Calambrujos por escaramujos, denominados por los niños “tapaculos” (por lo astrigente). Se obtienen de ellos los polvos “pica-pica”.

Contestan los de Bañares:

*Si lo apedreamos, / hicimos bien:
Que no se hubiese metido / en lo que no era d’él.*

Variante:

*Si lo achinamos, / muy bien lo hacemos,
Que no se meta el Santo / en terreno ajeno.⁵*

Variante de la primera copla:

*Todos los de Bañares / son de Fajola,
Que apedrearón al Santo / con una honda.*

En otro documento manuscrito de alguien que lo escribe y da a Don Bonifacio Gil vemos que esta copla se refiere no sólo a Bañares sino también a Hervías, ambos pueblos colindantes con Santo Domingo de la Calzada:

*Hervías y Bañares, / Corral de brujos,
Que achinaron al Santo, / con calambrujos.*

Aún corre por tradición en Santo Domingo de la Calzada este extremo, a propósito de las coplas anteriores: que vecinos de Bañares sobre jurisdicciones de territorio, y que para la ciudad de Santo Domingo se conformaba con lo que pudiera abarcar el pellejo de un buey hecho tiras. Otra versión expresa que Santo Domingo, que era viejo, pidió a San Formerio, joven, (entre la muerte de ambos median 834 años), Santo de Bañares que poseía mucho terreno, le cediera graciamente el que pudiera ocupar la piel de referencia. Mas el santo varón de la Calzada las hizo muy finas, originando la ocupación de mayor espacio de terreno del previsto. También corre otra versión: que el personal de un caserío llamado Fajola (¿Fayola, Ayuela?

creemos se trata del mismo lugar) avisó a los vecinos interesados en sus tierras, por lo cual salió unido todo el pueblo de Bañares para proceder a lo ya mencionado.

De cualquier modo no creemos exista testimonio histórico alguno que aluda a una u otra disputa. Sí consta en la Historia del glorioso *Santo Domingo de la Calzada* de Barruso, ya mencionada, p. 91, una grave cuestión con los vecinos de Ayuela, poblado desaparecido, quienes se insolentaron e incluso maltrataron de obra a Santo Domingo al pedir éste a aquéllos le permitiesen cortar la madera necesaria para la construcción del Santo Hospital, petición que fue denegada. Al proponerles el Santo que tan sólo le concediesen los árboles que pudiese cortar con una hoz de segar mieses, le fue otorgada no sin que algunos se riesen de tan ingenua demanda. Mas el Santo se dirigió al Señor en humilde plegaria para implorar su auxilio. Al ser atendido y dirigirse a la dehesa del pueblo vecino (aún se llama “La Dehesa cerrada” que se extendía al sur del “Rollo de San Lázaro”, a la derecha del camino de Santo Domingo a Cirueña, hoy dedicada al cultivo de cereales), para realizar sus deseos, por obra milagrosa cayeron bajo su hoz las encinas y robles necesarios para la construcción del referido centro benéfico. Alarmados los de Ayuela trataron de impedir aquella tala dirigiéndose al Santo en actitud violenta. Mas convencidos del hecho providencial, no sólo se apaciguaron sino que pidieron perdón a Domingo e incluso se ofrecieron a coadyuvar en su labor. Este hecho ha podido originar a través de la tradición la tergiversación del famoso suceso. Sobre las contiendas territoriales entre localidades vecinas, cabe mencionar la que tuvo la ciudad de Santo Domingo con la villa de Grañón. Véase a este respecto “Cruz de los Valientes”. (BG 913)

San Lorenzo y de la Virgen de Allende de Ezcaray

*Ya se llevan el Santo a la ermita / “tararita, tararita”;
ya se llevan al Santo al altar, / “tararí, tararí, tarará”.*

Se usa con la misma música de la dulzaina (que es una danza—

pasacalle) el 10 de agosto y 24 de septiembre, festividades de San Lorenzo y Virgen de Allende. También se canta en otros pueblos cercanos (como mero entretenimiento) con respecto a sus respectivos Patronos.

En Santo Domingo de la Calzada, con alguna modificación y con música distinta de gaita, se usa también, en especial para los ensayos de los danzadores, esto es, utilizando la melodía e incluso el texto. (BG 913)

Tabernas y borrachos

Una copla inventada por el calceatense Salvador Salinas y que cantaban los mozos de la ciudad a principios del siglo XX en las fiestas de Carnaval:

*En Santo Domingo / hay muchos borrachos,
y las taberneras / les llevan los cuartos;
echan agua al vino, / lo venden a “rial”,
y comen y beben / y sin trabajar.*⁶

En otra versión encontramos una pequeña variante (ver p. 5):

*En Santo Domingo / hay muchos borrachos,
y las taberneras / se llevan los cuartos,
los vasos de vino / los venden a real,
y comen y beben / y sin trabajar.* (BG 913)

Toros y fuegos artificiales en las fiestas del Santo

*Ya viene el Santo / y encima está,
buenas corridas / nos van a dar,
y buenos fuegos / también va a haber
en las traseras / de don José.*

Presintiendo los festejos que en honor de nuestro Patrono, Santo Domingo de la Calzada, se celebran el 12 de mayo, desde primeros de mes se comienza a cantar tan popular tonada que viene usándose desde finales del pasado siglo, aproximadamente desde 1885. Desde

luego, como expresa el texto, no faltan los festejos taurinos ni los consabidos fuegos de artificio. (BG 913)

Notas

- 1 Nos permitimos hacer constar aquí la transcripción de estos versos que muy acertadamente hace Ignacio Iñarrea Las Heras:

*Ah! que nous fûmes joyeux / Quand nous fûmes à S. Dominique,
En entendant le Coq chanter, / Et aussi la blanche Geline...
Nous soummes allez vers la Justice, / Où resta trente six jours l'Enfant ;
Que son Pere trouva en vie, / De Saint Jacques en revenant. (vv. 77-94)*

Nota del recopilador Ignacio Iñarrea Las Heras: Este canto *Autre Chanson des Pèlerins de Saint Jacques, o des Parisiens* (Otra Canción de los Peregrinos de Santiago, o de los Parisinos) ha sido tomado de Anónimo (1718: 9-15). Fue publicado después en Socard (1865: 81), en Nicolaï (1897: 16-20) y en Daux (1899: 37-40). Aparece recogido igualmente, aunque con diferencias más o menos notables, en Aurenche (1948: 163-167) y en Roy (1998: 413-416). La denominación *des Parisiens* le ha sido dada por Daux (1899: 38). José María Lacarra lo ha titulado en castellano *Canción de los Peregrinos de París* (vid. Vázquez de Parga, Lacarra y Uría Riu, 1949, vol. 2: 435). Otra traducción de esta misma estrofa en castellano se encuentra en García Mercadal (1999, vol. 4: 728, n. 2). Toda esta bibliografía está recogida por Ignacio Iñarrea Las Heras en *El milagro del gallo y la gallina en las literaturas francesa y francófona de inspiración jacobea*, 2004, Edita: Asociación de Amigos del Camino de Santiago en La Rioja, Logroño; en p. 134 la transcripción en francés y su traducción en castellano en la página siguiente, p. 135:

*¡Oh, qué contentos nos pusimos / Cuando estuvimos en Santo Domingo,
Al oír al gallo cantar / Y también a la blanca gallina!
Fuimos al cadalso, / En el que permaneció treinta y seis días el niño
A quien su padre encontró vivo, / Al regresar de Santiago.*

- 2 Bonifacio Gil la recoge en *Berceo*, n° 28, año VIII, 1953, Logroño p. 365
- 3 Pero López de Ayala, *Coronica del rey don Pedro*, Edición y estudio por Constance L. Wilkins y Heanon M. Wilkins, The Hispanic Seminary of Medieval Studies, Madison, 1985, pp. 114: *Capítulo ix. De algunas cosas que vn clerigo de Santo Domingo dixo al rey don Pedro:*

[E]stando el rey en aquel lugar de Açofra çerca de Najara, llego a

el vn clerigo de misa que era natural de Santo Domingo de la Calçada, e dixole que queria hablar con el aparte, e el rey dixole que le plazia de lo oyr. E el clerigo le dixo assi:

— Senor, Santo Domingo de la Calçada me vino en suennos, e me dixo que viniesse a vos, e que vos dixiesse que fuessedes cierto que sy vos non guardas-sedes, que el conde don Enrrique, vuestro hermano, vos auia de matar por sus manos.

E el rey fue muy espantado, e dixo al clerigo que si auia alguno que le auia aconsseiado a dezir esta razon, e el clerigo dixo que non, saluo Santo Domingo que gelamada-ra [B, 102 d] dezir esta razon. E el rey mandolo llamar ante todos los de su hueste, e dixo al clerigo que dixiesse esta razon delante dellos, segunnd gelo auia dicho a el aparte. E el clerigo dixo o segunnd que primero lo auia dicho. E el rey penso que lo dizia por induzimiento de algunos, e mando luego quemar al clerigo alli donde estauan sus tiendas.

- 4 Ver Bonifacio Gil García, “Dictados tópicos de Santo Domingo de la Calzada”, *RDTP*, CSIC, Madrid, t. X, 1954, cuaderno 3º, pp. 476–482. “Los de Santo Domingo tuvieron una dehesa llamada Bañares”, p. 473.
- 5 Bonifacio Gil García, BG 872, en Oscar Javier Mendoza García, *Dictados Tópicos de La Rioja (Geografía Popular) — Transcripción, presentación, notas aclaratorias y comentarios a manuscritos de Bonifacio Gil García. Anexo a otros tres artículos por él publicados —, The Journal of Humanities and Sciences*, Universidad de Takushoku, 2005, n° 13, pp. 112–113.
- 6 Ver Bonifacio Gil García, “Dictados tópicos de Santo Domingo de la Calzada”, *op. cit.*, p. 477.

〈論 説〉

ビジネス中国語誤訳例の分析

—— 構造把握の誤認の分析を中心に ——

関 口 美 幸

0. はじめに

筆者は、本学中国語学科3年生を対象とした「ビジネス中国語」科目を担当している。その授業で、日中ビジネスで常用する契約書の中文日訳を行っているが、学生の誤訳がかなり目立つ。その原因の一つはもちろんテクニカルタームにあるが、もう一つの大きな原因として、文構造の把握の間違いが挙げられる。契約書は、一般的な文章に比べ一文が長く構造も複雑である。文の意味を正しく理解し、正確な日本語に訳すには、文構造の把握が必須である。

本稿は、構造把握の間違いをパターン毎にまとめ、实例を通して学生に提示し、それにより学生により効果的に構造を把握させる助けとするためのものである。

今回使用する誤訳例は、平成18年度、19年度のビジネス中国語の後期の授業で使用した『合併契約書』と『労働契約書』の雛形を学生に翻訳させたものから抜粋した。学生には、毎回プリント（A4 1枚程度）を配布し、翌週にその日本語訳を提出させ、その次の週に返却すると同時に、よく見られた誤訳について解説する、という方法で授業を行った。

1. 誤訳の種類

便宜上、以下の通り分類するが、実際にはそれぞれの間違いが互いに密接に関連しあい、誤訳につながっていることを指摘しておきたい。なお、今回は構造の間違いに焦点を当てるため、構造把握の仕方と無関係の単語の誤訳については、正しい訳語に訂正したことを予めご了承ください。

又、本稿でいう「述語」は連用修飾・目的語の部分を含めたいわゆる「述部」を指し、「述語動詞」はその内の核になる主動詞を指すこととする。

1.1 文成分の関係性における間違い

(1) 主語・述語のとらえ方の間違い

① 甲乙方应各自负责完成以下各项事宜。

(甲乙は、各自以下の各事項を責任を持って完成させなければならない。)

【誤訳例】

・甲乙者各自責任は、以下の各事項で完成とする。

【誤訳の分析】

「应」の意味が分からずこれを無視した。また「负责」と「完成以下各项事宜」が連動文を構成していることに気が付かなかったため、「负责」を「責任」と理解して主語としてしまい、「完成」を述語動詞と考えてしまった。

② 合营公司的产品使用商标为_____。

(合併会社の製品に使用する商標は、_____とする。)

【誤訳例】

- ・ 合併会社の商品の商標使用は、 のためである。

【誤訳の分析】

「使用」「商標」を動詞・目的語構造ととらえてしまった。「為」を介詞としてとらえてしまった。

③ 合营公司的组织形式为有限责任公司。

（合併会社の組織形態は有限責任会社とする。）

【誤訳例】

- ・ 合併会社の組織は、有限責任会社によって形成される。

【誤訳の分析】

「为」が述語動詞であることに気付かず無視した。そのため、述語動詞がなくなってしまう、無理矢理「形式」を「形成する」と理解し、述語動詞とした。

④ 补助费标准按乙方在甲方服务的工龄计算：每满1年的，计发解除劳动合同当年本人1个月的平均工资；满半年不足1年的，按1年工龄计发；不满半年的，计发半个月的平均工资。

（補助金基準は、乙が甲において働いた勤続年数によって計算する。）

【誤訳例】

- ・ 補助金は乙の甲における勤続年数に基づいた基準とし、満一年ごとに労働契約解除時に一ヶ月分の給料を足す。満了には一年の半年が不足している場合は、一年勤めるごとに計算し、満了に半年満たない場合は半年の平均給料を支払う。

【誤訳の分析】

「計算」があまりにも後ろに偏っているため、これを述語動詞としてとらえることができなかった。そのため、ほかに述語動詞を探し、「标准」

を述語動詞としてとらえてしまった。

- ⑤ 乙方保证为合营公司提供的 的设计、制造技术、工艺流程、测试和检验等全部技术是完整的、准确的、可靠的，是符合合营公司经营目的要求的，保证能达到本合同要求的产品质量和生产能力；

（乙は、合弁会社に提供した の設計・製造技術・加工プロセス・テストと検査などの全ての技術が完全で、正確で、信頼でき、合弁会社の経営目的の要求を満たすことを保証し、本契約で要求する製品品質と生産能力に達することを保証する。）

【誤訳例】

- ・乙の保証は、合弁会社が提供した の設計・製造技術・加工プロセス・テストと検査などの全ての技術は完備されていて、正確であり、確かであり、合弁会社の経営目的の要求に一致するというものであり、本契約の要求する製品品質と生産能力に達することを保証する。

【誤訳の分析】

「保証」の目的語部分が長く「保証」が文の前方に偏りすぎているため、これを述語動詞であると認識できなかった。「為」を無視してしまった。

- ⑥ 合营公司在筹备、建设期间，在董事会下设立筹建处。

（合弁会社は、建設準備及び建設期間に、董事会の下に建設準備処を設置する。）

【誤訳例】

- ・合弁会社が建設準備した建設期間は、董事会で設立した建設準備部門が行う。

【誤訳の分析】

「在」の意味を理解せず、「合营公司在筹备、建设期间」を主語としてし

まった。「設立」「筹建处」を修飾・被修飾構造ととらえてしまった。

- ⑦ 合营公司所需原材料、燃料、配套件、运输工具和办公用品等，在条件相同情况下，尽先在中国购买。

（合弁会社が必要とする原材料・燃料・補助部品・輸送手段及び事務用品などは、同じ条件の下では、できるだけ先ず中国で購入する。）

【誤訳例 1】

- ・合弁会社は原材料・燃料・補助部品・輸送手段・事務用品の運送などを必要とし、条件に合致する場合は、先ずできるだけ中国で購入する。

【誤訳の分析】

「等」の後に「，」があるため、複文だと思ってしまった。そのため、「合营公司所需原材料、燃料、配套件、运输工具和办公用品等」内で述語動詞を探してしまい、「需」を述語動詞として理解し、「合营公司所需原材料、燃料、配套件、运输工具和办公用品等」が文全体の主語であることに気付かなかった。「所」は意味が分からないため、無視した。

【誤訳例 2】

- ・合弁会社は、原材料・燃料・関連部品・運送手段及び事務用品などが必要で、条件のある状況で、できるだけ先ず中国で購入する。

【誤訳の分析】

「所」という文章語を理解できず無視した。「合营公司所需原材料，燃料，配套件，运输工具和办公用品等」の後ろに「，」があるので、これを複文の節と理解してしまい、全体として単文の主語になっていることに気付かなかった。

- ⑧ 总经理的职责是执行董事会会议的各项决议，组织领导合营公司的日常经营管理工作。

（総経理の職責は、董事会会議の各決議を執行し、合弁会社の日常経営管理事務の指導を組織することである。）

【誤訳例】

- ・ 総経理の職責は、董事会会議の各決議を執行し、組織は合弁会社の日常を指導する。

【誤訳の分析】

「,」があったため、単文を複文としてしまった。「组织」の日本語訳の一つ「組織」が名詞であるため、これを名詞とし、節の主語としてしまった。

(2) 動詞・目的語のとらえ方の間違い

⑨ 如乙方同时又是技术转让方，则应负责合营公司在规定的期限内按设计能力稳定地生产合格产品。

（乙が同時に技術譲渡者である場合は、合弁会社が規定の期限内に設計能力に基づき安定的に合格製品を生産することに責任を負わなければならない。）

【誤訳例】

- ・ 例えば乙方には同時にまた技術譲渡したら、合弁会社にならって規定の期限内に設計に基づいて、能力を生産合格商品に安定させなければならない。

【誤訳の分析】

「如」を「例えば」と理解した。「方」の意味が分からなかったため、「是」が述語動詞で、その目的語が「技术转让方」であることに思い至らなかった。「负责」の意味が分からなかった。介詞「按」の目的語が「设计」だけだと思ってしまった。「生产」の日本語訳の一つは「生産」で名詞であるため、中国語でも名詞だと思ってしまい、「生产」を述語動詞と

して認識できなかった。そのため、「穩定」を述語動詞としてしまった。

- ⑩ 甲方責任：办理为设立合营公司向中国有关主管部门申请批准、登记注册、领取营业执照等事宜。

（甲の責任：合弁会社を設立するために、中国の関係主管部門に対し、認可申請・登記登録・営業許可証受領などの事項の手続きを行う。）

【誤訳例 1】

- ・処理するために中国に関する主管部門に許可・登記・営業許可証の受領などを申請する。

【誤訳の分析】

目的語の修飾語が長く、述語動詞が一番先に来ているため、動詞・目的語の関係がとらえづらい。そのため「办理为」を「処理するために」と理解してしまい、「设立」を無視し、真ん中あたりにある「申请」を述語動詞だと考えてしまった。

【誤訳例 2】

- ・合弁会社の中国に向けての設立のため、主管部門の許可、登記、営業許可証の受領などに関する事項。

【誤訳の分析】

目的語の修飾語が長く、述語動詞が一番先に来ているため、動詞・目的語の関係がとらえづらい。そのため、述語動詞「办理」を無視してしまった。「为」が「中国」まで係ると理解した。介詞「向」が目的語をとり、後ろの「申请」の連用修飾語となることを理解できなかった。

- ⑪ 中国 公司和 国 公司，根据《中华人民共和国中外合资经营企业法》和中国的其它有关法规，本着平等互利的原则，通过友好协商，同意在中华人民共和国 省 市，共同举办合资经营企业，特订本合同。

（友好協議を通じて、中華人民共和国 省 市で共同で合弁経営会社を設立することに同意し、ここに本契約を締結する。）

【誤訳例】

- ・中国 会社及び 国 会社は、『中華人民共和国中外合弁経営企業法』及び中国のその他の関係法規に基づき、平等互恵の原則に則り、有効な協議によって、中華人民共和国 省 市で同意し、共同投資により、合弁経営企業を興し本契約を結ぶ。

【誤訳の分析】

「市」の後に「，」があったため、「共同举办合资经营企业，特订本合同」も「同意」の目的語であることに気付かなかった。

- ⑫ 协助合营公司在中国境内购置或租赁设备、材料、原料、办公用品、交通工具、通讯设施等。

（合弁会社が中国国内で設備・材料・原料・事務用品・交通手段・通信設備などを購入又は賃借することに協力する。）

【誤訳例】

- ・合弁会社による中国国内での買い入れや設備・材料・原料・事務用品・交通手段・通信施設などの賃借を協力する。

【誤訳の分析】

「购置」「租赁」という二つの動詞がどちらも文の述語動詞であり、それらが等位関係にあり、共通の目的語を取ることに思い至らなかった。

- ⑬ 如乙方认为需要聘请其他国家的审计师对年度财务进行审查，甲方应予以同意。

（乙がその他の国の会計監査士を招いて年度財務に対して審査をする必要があると認めた場合は、甲はこれに同意しなければならない。）

【誤訳例】

- ・もし、乙が年度財務の監査を行う上で他の国の会計監査士を必要とし招聘した場合、甲は同意しなければならない。

【誤訳の分析】

動詞が「认为」、「需要」、「聘请」と多く、しかも連続しているので、その間の関係を把握するのが難しい。そのため、「认为」を無視し、「需要」と「聘请」を支配・被支配の関係（動詞・目的語構造）ではなく、等位関係ととらえてしまった。また、「聘请其他国家的审计师」と「进行审查」が連動構造を作っていることに気付かなかった。

⑭ 合营公司有权继续使用和研究发展该引进技术。

（合弁会社は、当該導入技術を継続的に使用し、研究して発展させる権利を有する。）

【誤訳例】

- ・合弁会社は継続して使用する権利や研究・発展のため技術を導入するべきである。

【誤訳の分析】

「有」を用いた連動構造を理解できていないため、「有权」を無視してしまった。述語動詞「继续使用」と「研究发展」が「和」でつながっているため、「继续使用和研究发展」と「该引进技术」が動詞・目的語の関係にあることに気付かなかった。そのため、「引进」を述語動詞と判断し、存在しない「のため」を追加してしまった。

⑮ 合营公司委托乙方在国外市场选购设备时，应邀请甲方派人参加。

（合弁会社は、乙に国外市場で設備を購入することを委託する際、甲に人を派遣して参加させることを依頼しなければならない。）

【誤訳例】

- ・合弁会社は、乙が国外市場で自由選択購買設備を委託したとき、甲が派遣した人を招き、参加すべきである。

【誤訳の分析】

「合营公司委托乙方在国外市场选购设备」と「邀请甲方派人参加」がいずれも兼語文であることを理解していない。

- ⑩ 违反操作规程，损坏设备、工具，浪费原材料、能源，造成经济损失的；

（操作規程に違反し，設備や工具を損ない，原材料やエネルギーを浪費し，経済損失をもたらした場合）

【誤訳例】

- ・操作規程を違反し，損傷した設備，工具，原材料，エネルギーの無駄遣いにより，経済的損失をもたらした場合。

【誤訳の分析】

「,」「、」の違いを理解できていない。「损坏」「设备」を修飾・被修飾関係ととらえてしまった。

- ⑪ 合营公司生产经营范围是：生产 产品；对销售后的产品进行维修服务；研究和发展新产品。

（合弁会社の生産経営範囲は， 製品の生産，販売後の製品に対して補修サービスを行うこと及び新製品の研究と発展である。）

【誤訳例】

- ・合弁会社の生産の経営範囲は，生産した 製品；販売後の製品の進行，補修のサービス，新しい製品の研究と発展する。

【誤訳の分析】

「生产」の後ろが開いていたため「生产」「产品」を動詞・目的語構造と

理解できずに、修飾語・被修飾語関係と理解した。「対」を無視し、「销售后的产品」を「进行」の主語とした。

(3) 修飾語・被修飾語のとらえ方の間違い

⑱ 甲乙方以各自认缴的出资额对合营公司的债务承担责任。

（甲乙は、各自が引き受けた出資額により、合弁会社の債務に責任を負う。）

【誤訳例】

- ・甲乙は、各自出資額を納めることを以て、合弁会社の負債に対する責任を負う。

【誤訳の分析】

「认缴」と「出资额」の関係を動詞・目的語の関係ととらえてしまった。「的」の役割を理解していない。

⑲ 甲乙方合资经营的目的是本着加强经济合作和技术交流的愿望，采用先进而适用的技术和科学的经营管理方法，提高产品质量，发展新产品，并在质量、价格等方面具有国际市场上的竞争能力，提高经济效益，使投资各方获得满意的经济利益。

（経済協力と技術交流を強化するという希望に基づいて）

【誤訳例】

- ・甲乙双方の合弁経営の目的は、経済協力と技術交流の願望の強化に基づき、

【誤訳の分析】

「加强经济合作和技术交流」全体が「願望」を修飾していることに気付かなかった。

⑳ 双方认为需要约定的其他事项。

（双方が約定する必要があると認めるその他の事項）

【誤訳例】

- ・双方その他の事項についても約定が必要だと考える。

【誤訳の分析】

文には述語が必ずあるという思いこみにより、「认为」を述語動詞とし、「需要约定的其他事项」を「认为」の目的語としてとらえている。

(4) 介詞のとらえ方の間違い

㉑ 合营公司职工的雇用、辞退、工资、劳动保险、生活福利和奖惩等事項，按照《中华人民共和国中外合资经营企业劳动管理规定》及其实施办法，经董事会研究制定方案，由合营公司和合营公司的工会组织集体或个别地订立劳动合同加以规定。

（合弁会社の従業員の雇用・退職・賃金・労働保険・福利厚生及び懲罰などの事項は、『中華人民共和国中外合弁経営企業労働管理規定』及びその実施弁法に基づき、董事会での検討を経て草案を制定し、合弁会社と合弁会社の労働組合組織が集団又は個別に労働契約を締結し、規定を加える。）

【誤訳例】

- ・合弁会社の従業員の雇用・退職・賃金・労働保険・福利厚生及び懲罰などの事項は、『中華人民共和国中外合弁経営企業労働管理規定』に基づき、その実施方法は、董事会の制定規則の考慮を経て、合弁会社と合弁会社の労働組合組織又は他に締結した労働契約が制定する。

【誤訳の分析】

「及」があったので、介詞「按照」の目的語が「及」の前までだと思っ

てしまった。「研究」「制定」の日本語訳の一つが「研究」「制定」と名詞なので、「研究」「制定」も名詞だと思ってしまい、「研究」は無視してしまい、「制定」は目的語の一部だと判断してしまった。そうするとこの部分の述語動詞がなくなってしまうので、介詞「经」を述語動詞だと考えてしまった。「集体」を無視し、「个别」の意味が正確に把握できず「他に」と訳した。「订立劳动合同」を動詞・目的語の関係ではなく、修飾・被修飾の関係だと思ってしまった。「加以」を無視し、「规定」を「制定する」と誤解してしまった。

- ②② 按照本合同第六条第 1 款第 4 项解除劳动合同的，甲方发给乙方个月平均实发工资的医疗补助费。

（本契約第 6 条第 1 項第 4 号に基づき労働契約を解除する場合は、）

【誤訳例】

- ・本契約第 6 条第 1 項第 4 号の労働契約解除に基づくと、甲は ヶ月の実際に支給していた医療補助費の平均を乙に渡さなければならない。

【誤訳の分析】

「按照」の日本語訳の一つ「基づく」が動詞なので、「按照」も動詞だと思ってしまい、これを述語動詞とした。

- ②③ 任何一方解除劳动合同或是否续订劳动合同，应提前 30 日通知对方，并按有关程序解除或续订合同。

（かつ、関係手続に従い、契約を解除又は継続する。）

【誤訳例】

- ・いかなる場合でも一方が労働契約を解除又は労働契約を継続させることを拒否したにせよ、相手に対して 30 日間の予定の繰り上げを知らせなければならず、また関係する解除又は継続契約に基づく。

【誤訳の分析】

「**按**」の日本語訳の一つ「**基づく**」が動詞なので、「**按**」も動詞だと思っ
てしまい、これを述語動詞とした。そのため、本来の述語動詞「**解除**」が
邪魔になったので、これを名詞として、前の「**有关**」とつなげ、「**程序**」
を無視した。

- ②④ 如乙方未按本合同及技术转让协议的规定提供设备和技术，或发现有
欺骗或隐瞒之行为，乙方应负责赔偿合营公司的直接损失。

（乙が本契約及び技術譲渡協議の規定に従い設備と技術を提供しな
い場合、）

【誤訳例】

- ・ 乙は本契約及び技術譲渡協議の規定の設備と技術に基づかない場合、

【誤訳の分析】

「**按**」の日本語訳の一つ「**基づく**」が動詞なので、「**按**」も動詞だと思っ
てしまい、これを述語動詞とした。それにより邪魔になった「**提供**」を無
視した。

- ②⑤ 甲方必须根据国家有关规定和乙方岗位工作需要发给劳动保护用品。

（甲は、国の規定と乙の職場の業務の必要に基づき、労働保護用品
を支給しなければならない。）

【誤訳例 1】

- ・ 甲は国の関連規定と乙の職場の業務に必要な労働保護用品の支給に
基づかなければならない。

【誤訳の分析】

「**根据**」の日本語訳の一つ「**基づく**」が動詞なので、「**根据**」も動詞だと思
ってしまい、これを述語動詞とした。それにより本来の述語動詞「**发**」
の目的語を「**劳动保护用品**」だけだと思ってしまった。

【誤訳例 2】

- ・ 甲は国家によれば規定に関係し、乙の職場は労働保護用品を支給しなければならない。

【誤訳の分析】

介詞「根据」の直後の単語「国家」だけを目的語と考えてしまった。そのため、その後の「有关规定」に動詞が必要となり「有关」を動詞としてとらえてしまった。「和」以降を複文の節と考え、「乙方」を主語とした。

②⑥ 注：在具体合同中要根据具体情况写

（注：具体的契約の中で具体的状況に基づき記入する）

【誤訳例】

- ・ 注：具体的契約は具体的状況を書かなくてはならない

【誤訳の分析】

主語は必ずあるという先入観によって、「在」を無視し、「具体合同」を主語としてとらえた。「根据」を無視した。

②⑦ 合营公司注册资本由甲乙双方按其出资比例分 期缴付。

（合弁会社の登録資本は甲乙がその出資比率に従い 回に分けて納める。）

【誤訳例 1】

- ・ 合弁会社の登録資本は、甲によって乙が出資比率の 回に分けて納める。

【誤訳の分析】

「由」と「按」の意味が似ているため、「按」を無視した。「方」の意味が分からなかった。

【誤訳例 2】

- ・ 合弁会社の登録資本は、甲乙側の出資比率に基づき、 の期日に

納付し、

【誤訳の分析】

「由」と「按」の意味が似ているため、「由」を無視した。

- ⑳ 合营公司内销产品可由中国物资部门、商业部门包销或代销，或由合营公司直接销售。

（合弁会社の国内販売製品は、中国物資部門・商業部門が一手販売する若しくは代理販売する、又は合弁会社が直接販売する。）

【誤訳例】

- ・合弁会社の国内販売製品は、中国物資部門によって、商業部門が一手に販売をするか又は代理販売をする、あるいは合弁会社が直接販売する。

【誤訳の分析】

「、」が並列を意味することを理解できていない。介詞「由」とその目的語「中国物资部门、商业部门」が介詞構造をつくり、後ろの述語動詞「包销或代销」を連用修飾していることを理解していない。

- ㉑ 甲乙双方以各自认缴的出资额对合营公司的债务承担责任。

（甲乙は、各自が引き受けた出資額によって、合弁会社の債務に対して責任を負う。）

【誤訳例 1】

- ・甲乙は、各自合弁会社に対する出資額の債務を納める責任を持つ。

【誤訳の分析】

「以」を知らなかったため、無視し、後は訳した単語を適当に並べた。

【誤訳例 2】

- ・甲乙は、各自をもって合弁会社の債務請負責任に対する納めた出資額を知らせる。

【誤訳の分析】

「以」の目的語が「各自」だけだと思った。「债务承担责任」を名詞だと思った。「承担」を「請負」と名詞に訳してしまったので、述語動詞がなくなり、「知らせる」という架空の訳語を作ってしまった。

- ③⑩ 以实物、工业产权作为出资时，甲乙双方应另行订立合同，作为本合同的组成部分。

（現物・工業財産権を出資とする際には、）

【誤訳例】

- ・实物を以て工業財産権を出資する時，甲乙双方の別の契約の設立を引き受ける。

【誤訳の分析】

標点符号「。」が並列を表すことが分かっていないため、「实物」と「工业产权」を並列関係であると理解できなかった。「以～作为」の意味が分からなかったのをこれを無視し、「工业产权出资」を動詞・目的語構造としてとらえてしまった。

- ③⑪ 甲方濒临破产处于法定重整（整顿）期间需要裁减人员的；

（甲が破産に瀕し、法定再建（整顿）期間に人員削減が必要な場合）

【誤訳例】

- ・甲が破産に瀕し、法定による再生期間が必要とされ、人員を削減する場合。

【誤訳の分析】

「处于」という文語的表現を理解できなかったため、「法定重整（整顿）期间」を「需要」の主語としてとらえてしまった。

- ③⑫ 注：在乙方负责向合营公司转让技术的合营合同中才有此条款。

(注：合併会社に技術譲渡を行うことに乙が責任を負う合併契約においてのみこの条項を有する。)

【誤訳例】

- ・乙は合併会社の譲渡技術の合同経営契約の中のいくつかの条項に対して責任を負う。

【誤訳の分析】

介詞構造が「在乙方负责向合营公司转让技术的合营合同中」と長く、述語動詞「有」が文の後ろにあるため、これを述語動詞とは認識しづらく、前方にある「负责」を述語動詞だととらえてしまった。

- ③③ 甲乙方合资经营的目的是本着加强经济合作和技术交流的愿望，采用先进而适用的技术和科学的经营管理方法，提高产品质量，发展新产品，并在质量、价格等方面 具有国际市场上的竞争能力，提高经济效益，使投资各方获得满意的经济利益。

(経済協力と技術交流を強化するという希望に基づいて、)

【誤訳例】

- ・経済協力を強化することに基づき，技術交流を願ひ，

【誤訳の分析】

「经济合作」と「技术交流」の間に「和」があるため、「技术交流」を「加强」の目的語としてとらえづらく、「经济合作」で区切ってしまった。そうすると残った「技术交流的愿望」の述語動詞がなくなってしまうので、「愿望」を述語動詞とした。

1.2 複文における間違い

(1) 条件を表す従属節と結果を表す主節のとらえ方の間違い

- ③④ 由于一方不履行合同、章程规定的义务，或严重违反合同、章程规定，

造成合营公司无法经营或无法达到合同规定的经营目的，视作违约方片面终止合同，对方除有权向违约一方索赔外，并有权按合同规定报原审批机构批准终止合同。

（一方が契約・定款に規定する義務を履行しない，又は契約・定款の規定に著しく違反したことにより，合弁会社が経営できない又は契約に規定する経営目的に達することができなくなった場合は，違約者が一方的に契約を中止したと見なし，相手方は違約者に対して賠償を請求する権利を有する以外に，契約の規定に基づき，元の審査認可機関に報告して認可を受け，契約を終了させる権利を有する。）

【誤訳例】

- ・ 一方によって，規約で規定する義務が果たせない場合，若しくは重大な契約，規約違反がある場合，合弁会社は経営する手段を失う，若しくは契約規定の経営目的に達する術を失い，規定に背いた側は契約を一方的にやめるものと判断し，もう一方は権限を除き違反した側に賠償請求し，さらに権限は契約規定に基づき，元の審査機関の許可を報告し契約を取りやめる。

【誤訳の分析】

「，」がある箇所では条件を表す従属節文と結果を表す主節に分け，ある箇所では並列関係を表しているため，どこまでが条件節かの見極めが難しい。そのため，条件節が「经营目的」までであることに気付かなかった。「由于」を介詞としてだけしか見ておらず，接続詞として見ていなかった。「有」を用いた連動構造を理解していないため，「有权」を「権限」と名詞に訳してしまった。

㊥ 注：若有两个以上合营者，依次称丙丁 方。

（注：2 者以上の合弁者がいる場合は，順次丙，丁と称する。）

【誤訳例】

- ・注：以上2名を契約経営者とし、順次丁、方とする

【誤訳の分析】

「若」という文章語を理解できず、「有两个以上合营者」が条件節を作っていることに気付かなかった。

- ③⑥ 任何一方违反合同规定，解除合同，给对方造成经济损失的，对方根据其责任和造成的后果，追究对方直接经济责任。

（如何なる一方も契約の規定に違反し、契約を解除し、相手方に経済的損失を与えた場合は、相手方は、その責任及びもたらされた結果に基づき、相手方の直接的経済責任を追及する権利を有する。）

【誤訳例 1】

- ・いかなる一方も契約規定に違反した場合、契約を解除、相手方に経済損失を請求、相手方はその引き起こされた結果に基づき、先方がもつ権利はその責任ともたらした後の結果に基づき、先方の直接の経済責任を追及する。

【誤訳の分析】

「的」が条件節を表す重要なマークであることを理解できず、「任何一方违反合同规定」だけを複文の条件を表す従属節と考え、その後を結果を表す主節とした。

【誤訳例 2】

- ・いかなる場合でもどちらか一方の契約規定違反、契約解除、先方に経済損失をもたらし、相手は責任と悪い結果をもたらしたことに對する相手方に直接の経済責任を追及する。

【誤訳の分析】

「的」が条件節を表す重要なマークであることを理解できず、条件・結果の複文であることが理解できなかった。

- ③⑦ 劳动争议发生后，当事人可以向当地劳动争议调解部门申请调解，调解不成，当事人一方要求仲裁的，可以向劳动争议仲裁委员会申请仲裁，当事人一方也可以直接向劳动争议仲裁委员会申请仲裁。

（労働争議発生後，当事者は，当該地の労働争議調停部門に調停を申請することができる。調停が不成立で，当事者の一方が仲裁を要求した場合は，労働争議仲裁委員会に仲裁を申立てることができる。また，当事者の一方は直接労働争議仲裁委員会に仲裁を申立てることもできる。）

【誤訳例】

- ・労働争議発生後，当事者は当該地労働争議調停部門に提議し仲裁する。仲裁できず当事者が一方の要求の仲裁をし，労働争議を仲裁委員会にて仲裁してもらう。当事者の一方も直接，労働争議仲裁委員会に仲裁を申請することができる。

【誤訳の分析】

「的」が条件節を表す重要なマークであることを理解しておらず，条件を表す従属節と結果を表す主節を分けていない。

2. 間違いの傾向

2.1 単語に由来するもの

- ・文章語など知らない単語を無視する又は意味を取り間違えることにより，構造が把握できなくなる。例えば，「为」「所」「如」「处于」「方」など（例文②，③，⑦，⑨，⑩）。
- ・日本語の品詞を中国語に当てはめて考える。例えば，「发展」「组织」「生产」などは，それぞれ日本語で「発展」「組織」「生産」と名詞に翻訳できるため，中国語でも名詞だと考え，それによって文成分を間違える。また，介詞「按」「按照」「根据」の日本語訳に「基づく」と

いう動詞があるので、「按」「按照」「根据」を動詞だと考えて、述語動詞としてとらえてしまう（例文⑧，⑨，⑳，㉑，㉒，㉓，㉔，㉕，㉖）。

2.2 成分に由来するもの

- ・文には主語、述語が必ず存在するという思いこみにより、文の構造をとらえ間違える（例文㉗，㉘）。
- ・一つの文成分が修飾語などによって非常に長い場合、主語は文頭であり、述語動詞は文の中心あたりにあるという思いこみにより、文の構造をとらえ間違える（例文④，⑤，⑩，㉙）。
- ・述語動詞の直前の単語を主語とを考えてしまう、動詞又は介詞の直後の単語だけを目的語とを考えてしまうことから、文の構造をとらえ間違える（例文㉚，㉛，㉜，㉝）。
- ・標点符号の理解不足から文の構造をとらえ間違える（例文⑦，⑧，⑪，⑫，㉞，㉟）。
- ・複数の単語が並列関係をつくり、一つの成分となっている場合、それを一つの成分と認識することが難しく、並列関係を結んでいる「、」「和」「或」のところで、成分を分解して理解してしまう（例文⑬，⑭，㉟）。
- ・連動文、兼語文に対する理解不足のため、文の構造をとらえ間違える（例文①，⑬，⑭，⑮）。
- ・介詞構造に対する理解不足のため、文の構造をとらえ間違える（例文⑥，⑩，㉡，㉢，㉣）。

2.3 複文に由来するもの

- ・条件を表す従属節と結果を表す主節の区切りを理解できない（例文㉡，㉢，㉣）。

3. ま と め

3.1 間違いに対する対策

単語に由来する間違いの対策としては、間違いやすい単語の用法について予め説明することと、辞書の活用が挙げられる。辞書を引くときには、言葉の意味を調べるだけでなく、その用法、品詞、例文なども熟読するよう指導することが大切である。

文の成分に由来する間違いを防ぐためには、文の成分を把握し、成分同士の関係を正しく理解することが不可欠である。特に文の中心となる述語動詞を見つけることが最も重要になると思われる。そのことは、述語動詞を見つけられなかった例が非常に多いことから容易に分かるであろう。筆者は、述語動詞を見つけるための有効な手段として、階層分析を提案したい。階層分析の第一段階は、主語と述語に分ける（主語と述語がある場合）ことであり、第二段階は、述語を連用修飾の部分と動詞・目的語構造の部分に分けることである。ここまでできれば、動詞・目的語構造の部分から述語動詞を探し出すことはさほど難しくはない。翻訳をする際、まず階層分析を行って文の成分とその関係性を明らかにしたのち、翻訳作業に取りかかれば、文の成分に由来する間違いはかなり防げる。

次に、複文についてだが、まず、条件を表す従属節と結果を表す主節の区切りを示す「的」について説明を集中的に行う。「的」がない場合は、文脈で判断するしかないで、文脈をとらえる力も重要である。

3.2 翻訳に対する提案

翻訳の作業にパソコン又はワープロを使用することは非常に有効だと思われる。なぜなら、日本語では、主語は文頭、述語動詞は文末、目的語は述語動詞の直前にあるのが一般的であるため、まずこれを翻訳し、残りの

修飾語を間に入れるように翻訳すれば、ほぼ正しい構造で翻訳できるからである。こうした作業は手書きよりもパソコンやワープロの方がやりやすい。

また、翻訳した後の見直し作業も非常に重要である。訳文が日本語として整合性がとれていない場合は、まず文構造の把握の間違いを疑うべきである。

そして、何より学生の意識を改革することが最も重要である。単語の意味さえ分かれば、あとは適当に並べれば翻訳できるといった間違った意識を改革し、翻訳における文構造の重要性を理解させることが間違いを防ぐ第一歩であると考ええる。

参考文献

- ・沙銀華 2000 『中国における合弁契約書作成完全マニュアル』創土社
- ・遠藤紹徳 1989 『中一日翻訳表現文法』バベル・プレス
- ・相原茂, 石田知子, 戸沼市子 1996 初版 2001 第8版 『why? にこたえるはじめての中国語の文法書』同学社
- ・呂叔湘 1983 『中国語語法分析問題』光生館
- ・陈岩 1996 《实用汉日经济翻译教程》北京大学出版社
- ・吴竞存, 侯学超 1982 《现代汉语句法分析》北京大学出版社

(原稿受付 2008 年 6 月 4 日)

〈研究ノート〉

ヒンディー語の諸方言研究書に 収載された昔話の意義

— 言語・方言の生きた資料として、
また昔話の正確な記録として —

坂 田 貞 二

目 次

- [Ⅰ] 本稿の目的, 筆者によるこれまでの昔話の翻訳
- [Ⅱ] 本稿で新たに翻訳・紹介する昔話
— ヒンディー語の諸方言研究書から —
- [Ⅲ] ヒンディー語とその諸方言研究の歴史と成果
 - A インド諸語の歴史のなかでヒンディー語の生成と展開を研究した文献
 - B ヒンディー語の諸方言の生成と展開を研究した文献
- [Ⅳ] ヒンディー語の諸方言研究の系譜
- [Ⅴ] ヒンディー語の諸方言研究文献に収められた昔話の意義
- [昔話資料] ヒンディー語の諸方言研究の文献に収められた昔話 11 話の
試訳

[Ⅰ] 本稿の目的, 筆者によるこれまでの昔話の翻訳

本稿は、ヒンディー語の諸方言研究書に収載された昔話を対象として取りあげ、それらの昔話を持つ二つの意義、すなわち言語・方言研究資料と

しての意義と、昔話の記録としての意義を確認するものである。本稿は併せて、ヒンディー語の諸方言で記録された昔話 11 話の試訳を収める。

筆者はこれまで、ヒンディー語地域で記録された昔話を研究し、翻訳・紹介してきた。筆者が関与して公刊された翻訳の主なものを列挙すると、つぎようになる。

- (1) 翻訳・解説：『インドの民話』『インド・スリランカ・パキスタン・ネパール』〈グラフィックカラー 世界の民話 11〉研秀出版，1980。
筆者は、総ページ数 140 のなかの pp. 10-14 でインドの民話の背景を解説し、pp. 30-60 でインドの民話 15 を翻訳。ここでの筆者の典拠は、カーリー・ボーリー方言地域のサトワイー村で自分が採録した話と既刊文献である。
- (2) 翻訳・解説：『北インドの昔語り』平河出版社，1981。総ページ数 235。筆者が 1973 年にカーリー・ボーリー方言地域のサトワイー村に住み込んで採録した昔話より、文芸・伝承の点から注目すべき 10 話を選んで邦訳。
- (3) 共著：『インドの笑話』（田中於菟弥氏と共著）春秋社，1983。総ページ数 252。田中氏が古典インド説話集から、筆者が現代の文献と自らの採録から笑話を選んで翻訳し、出典・採録地と各話について詳細な解説を付した。二人の分担はほぼ半々で、筆者の翻訳は 60 話。ここでの筆者の典拠は、サトワイー村でカーリー・ボーリー方言により聴いた話、ワーラーナシー市で共通ヒンディー語により聴いた話、お

本稿が引用・参照するヒンディー語文献の書誌は、おおむね Kyoto-Harvard 方式に基づくローマ字転写によって示す。下記の通りである。

長母音＝母音字の大文字で（U は u の長母音で、ウー）。

反り舌音＝子音字の大文字で（歯裏音 n と区別して反り舌音は N で）。

硬口蓋歯茎摩擦音（日本語のシュ）＝小文字の z で。

鼻音化音（鼻と口の両方に息が抜ける音）＝大文字の M で。

軟口蓋鼻音（日本語のンガ）＝大文字の G で。

よび市販の笑話集である。

- (4) 分担訳：『インドの昔話 上, 下』（前田式子, 辛島 昇, 西岡直樹氏と分担）春秋社, 1984。総ページ数 525。筆者は、インドの諸地域の昔話・頓智話を上・下 2 巻に収める企画・編集をしたうえで、まえがき、およびカーリー・ボーリー方言地域のサトワーイー村で採録した話 7 編の翻訳（上の pp. i - iii および pp. 2-113）を担当。
- (5) 翻訳と解説：『インドのむかし話 — 天にのぼるベールの木ほか』〈大人と子供のための世界のむかし話②〉偕成社, 1989。総ページ数 184。北インドのジャラルプル・マイダーン村でヒンディー語のボージュプリー方言で語られた昔話を筆者が採録し、その中から 10 編を邦訳。
- (6) 編・訳：『インド・ネパール・スリランカの民話』（8 名の分担訳。標題の国々の 8 言語による民話を、日本人専門家が分担して訳出したなかで、筆者は総ページ数 208 のうち 26 ページで 4 話の翻訳・解説を担当。筆者のここでの典拠は、カーリー・ボーリー方言地域のサトワーイー村、マトゥラー市（共通ヒンディー語による）で聴いた話、および既刊の文献である。
- (7) 昔話の採録・訳注：『ヒンディー語民話集』大学書林, 1999。1981 年に北インドの中都市マトゥラーで、一家族 5 名が共通ヒンディー語によって語った民話（昔話）を筆者が採録し、テープおこし・原文（語り）の整理のうえ、訳注をつけた。14 話の原文＋訳＋注など、総ページ数 211。

以上は単行本・叢書として刊行されたものに限るが、これらで筆者が翻訳した昔話は 120 話に上る。

ただし筆者の採録がカヴァーし、その成果を上記のような市販書で発表した昔話・民話は、カーリー・ボーリー方言地域のサトワーイー村とボージュプリー方言地域のジャラルプル・マイダーン村の 2 村、およびマトゥラー

市とワーラーナスィー市の2都市で語られたもののみである。つまり筆者がまとめた形で公刊したのは、2村落と2都市、合計で四つの点における語りだけである。

上記のほかに筆者は、ブラジュ・バーシャー方言地域の1村、アワディー方言地域の1村、およびラージャスターンの方言地域の1村と1都市においても昔話を採録したが、その成果を上掲のような市販の本ではこれまで発表していない。

〔Ⅱ〕 本稿で新たに翻訳・紹介する昔話

— ヒンディー語の諸方言研究書から —

筆者がこれまで翻訳・紹介してきた話は、自分が村落や町の家身に身を寄せて聴きとったものを中心としている。これらは、語りを録音していて、言語・方言の研究資料としての意義を持つ。また昔話研究の資料としても、諸階層の老若男女から聞きとった本格昔話・笑い話・動物昔話を包括し、すべての話に語り手にかんする情報を明記している点で、一定の意義を持つ。

そのうえで筆者は、自分の記録で手薄な笑い話・動物昔話のいくつかを後述のグリヤスンによる言語・方言調査報告書や昔話・笑話集から採って、自分の採録の不足を補うよう努めてきた。しかしながら翻訳した120話を見渡すと、筆者の関心を反映して、若者が旅に出て冒険のうえ妻と財を得る、あるいは気丈な王女が自分で運命を切り拓いて幸いをつかむというような本格昔話が多い。咄嗟の機転・頓智で危機を逃れる頓智話、短いながら示唆に富む動物昔話が、そこに少ないことに気づく。本稿は、これまで筆者があまり取りあげなかったそのような話を翻訳して、紹介する昔話全体のバランスをいくらかでもよくするよう努めるものである。

本稿で訳出する昔話には、もう一つの意義がある。筆者がこれまでに翻

訳を公刊してきた昔話は、2 村落と 2 都市という限られた点からのものである。ヒンディー語の諸方言は、しかし、大きな広がりをもつ「面」において話されている。本稿はしたがって筆者が日本の読者に示した 4 点を、大きな面に広げることになる。

頓智話や動物昔話は、比較的に短く完結することから、ヒンディー語とその諸方言の研究書・調査報告書の資料・付録として掲載されることが多い。このことに注目して、ここに比較的に短い昔話 11 話を、これまでの筆者の紹介と重ならないよう選んで翻訳する。それに先立って、個々の話を掲載する研究書・調査報告書について、言語・方言の研究書としての意義を確認する。

なお本稿では、資料をヒンディー語とその諸方言の研究書・調査報告書に限る。そのため、ヒンディー語の諸方言で記録された昔話集は、下掲のように語りを忠実に記録したものであっても資料源に含めない。

zivsahAy caturvedI (ed.), *hamArI lok-kathAeM — hindi ke vibhinn janpadoM kI lok-kathAoM kA saMgrah*, dillI: sAhitya prakAzan, 1958. この、チャトゥルヴェーディー編『わたしたちの民話：ヒンディー語諸地域の民話集』は、122 ページに 11 方言地域からそれぞれの専門家が集めた 11 話を、方言と共通ヒンディー語を対照して掲げている。語り手の記録はないが、おそらく語り手は寄稿者またはその身辺の人であろう。

〔Ⅲ〕 ヒンディー語とその諸方言研究の歴史と成果

この章では、はじめに、インド諸語の歴史のなかでヒンディー語の生成と展開を研究した文献を概観し、ついで、ヒンディー語の諸方言の生成と展開を研究した文献を概観する。

A インド諸語の歴史のなかでヒンディー語の生成と展開を 研究した文献

インド諸語の歴史のなかでのヒンディー語の生成と展開を研究した主要な文献に、つぎのものがある。それらについて以下に、刊行順に簡単な紹介をする。

John Beames, *A Comparative Grammar of Modern Aryan Languages of India*, 3 Vols. (London, 1872, 1875, 1879) は、ヒンディー語を含むインド・アーリア語の 7 言語の詳細な比較を豊富な用例によって行う。

S. H. Kellogg, *A Grammar of the Hindi Language* (3rd ed. reprinted, Routledge and Kegan Paul, 1955; 1st, 1876) は、ヒンディー語の諸方言を記述・比較していて、宣教師がバイブルをヒンディー語の諸方言に翻訳する手助けになった。

G. A. Grierson (ed.), *Linguistic Survey of India*, Vols. I-IX (Calcutta, 1903-28; rep. Delhi, 1968) は、いまのインドとそれを囲む地域を包括した言語調査報告書であり、個々の言語・方言の概略を記述したうえでそれらの specimens (見本) を収めている。specimens は主要な言語・方言について、①共通のものとして『新約聖書』のルカ伝 15: 11-32 の「放蕩息子」の翻訳を掲げ、それに加えて②個々の言語・方言で伝わる昔話や民謡など、③基本語彙・基本文のリストの 3 種類から成る [Grierson I-1 1928: 19-21]。①と③の共通部分が言語研究の資料として、また②の個別資料は言語資料および民間伝承の資料として大きな意義をもつ。

なお、グリヤソンの調査から 100 年ほどたった最近、インド政府の人的資源省により、その直轄研究機関 Central Institute of

Indian Languages を中心に新たに Linguistic Survey of India を実施する計画が承認された〔奈良毅〈研究動向〉「インドにおける『危機言語』に関する研究」『南アジア研究』19号, 2007: 113〕。

dhIrendra varmA, *hindI bhASa kA itihAs* (6th ed. ilahAbAd: hindustAnI ekeDemI, 1961; 1st, 1933) は、先行研究を総覧のうえ、自分の研究を加味しながらヒンディー語の歴史を概観している。

Jules Bloch, *L'ind-aryen du veda aux temps modernes* (Paris, 1934) は、インド・アーリア諸言語のヴェーダ時代から現代までの展開を、インド亜大陸全域で通観している。

udaynArAyaN tivArI, *hindI bhASa kA udgam aur vikAs* (prayAg: bhArtI bhaNDAr, 1961: 1st, 1955) は、インド独立後にヒンディー語が国の公用語と定められたことを背景に、先行研究を総合し、ヒンディー語の歴史を概観しつつその諸方言の形成・展開にも言及している。

Suniti Kumar Chatterji, *Indo-Aryan and Hindi* (Calcutta, 1959) は、インド・アーリア語の歴史のなかで、ヒンディー語の展開の様相を詳述している。

これらのうちで、本稿が求める昔話を specimens として掲載しているのは、G. A. Grierson (ed.), *Linguistic Survey of India* のみである。

B ヒンディー語の諸方言の生成と展開を研究した文献

ヒンディー語の諸方言の生成・展開を研究した文献には、つぎのものがある。それらについては、文献全体の構成、方言の事例として収載された昔話などについて、刊行年順にやや詳しく記述する。また、それらにおける昔話ほかの表記法方式を、部分コピーによって示す場合がある。

G. A. Grierson (ed.), *Linguistic Survey of India* IX, Indo-Aryan Family, Central Group, Part I Specimens of Western Hindi and Panjabi, Calcutta, 1916 (rep. Delhi, 1968. グリヤソン『インド言語調査』)。

この巻は A の「インド諸語のなかでのヒンディー語の生成」の 3 番目で概略を示した大規模な調査報告書のなかの、西部ヒンディー語を取りあげた部分である。西部ヒンディー語は、今日の共通ヒンディー語の基盤をなす言語である。なお、広義のヒンディー語とされるほかの関連言語・方言は、この調査報告書の V-1, X-2 などに取りあげられている。

全 823 ページのこの巻 - 部のなかで、ヒンディー語に 606 ページが充てられ、残りがパンジャービー語の部分になっている。

巻頭で西部ヒンディー語の概要を説明し、これが話される地域の歴史年表と先行研究文献のリストを掲げている。

各論の本文は、西部ヒンディー語のなかで文学的な伝統が豊かなブラジュ・バーシャーの例では、Skelton Grammar (文法の骨子) を記述したうえで、諸下位方言が話される地域とその話者人口を示している。そののちに、言語・方言の用例として、『新約聖書』の「放蕩息子」の翻訳をナーガリー文字表記のヒンディー語で掲げ、そのローマ字転写と英語の逐語訳も示している。

この共通用例に続いて、文献の抜粋、記述文、手紙文、伝説、昔話などの原文がナーガリー文字（ときにペルシア文字）により示され、そのローマ字転写と英語の逐語訳、英訳が添えられている。

本稿では、この巻 - 部からブンデーリー方言で語られた(1)「書記に遣り込められた閻魔さま」(pp. 445-448) を訳出する。そして、「あるとき、象が死にました。象は地獄の王さまの閻魔さまのところに行きました」とはじまるその話の冒頭部分をナーガリー文字表記の原文、そのローマ字転写と英語の逐語訳で、翻訳に挿入する (図 2)。

Baburam Saksena, *Evolution of Awadhi*, 2nd edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1971 (1st edition 1937, サクセナー『アワディー方言の展開』)。

この書は 562 ページから成り、アワディー方言の音韻・歴史的展開を詳述したあとに、140 ページにわたる specimens (見本) を、古い文献からの抄出と現代の昔話・民謡などから掲載している。見本・用例の部分を実際音声字母で表記して、正確な記述を目指している。それには英訳も併記している。

本稿では、(2)「ひどい目にあった七人の泥棒」(pp. 442-445) を訳出し、「あるところに、お金持ちの商人がいました」とはじまる冒頭部分を、国際音声字母による原文と英訳で、翻訳に挿入する (図 3)。

dhIrendra varmA, *braj bhASA*, illAhAbAd: hindustAnI ekeDemI, 1954 (ヴァルマー『ブラジュ地方の方言』)。

この書は 162 ページからなり、中世ヒンディー語文学の主要な媒体であったブラジュ・バーシャー方言について、その文化的な背景、文学的な伝統を展望したうえで、現代の音と形を記述し、さらに 18 地域で記録した昔話や民謡を 18 ページに収めている。見本・用例はすべて、標準的なナーガリー文字で表記されている。

なおこの書は、1935 年にパリ大学にフランス語で提出された学位論文のヒンディー語版であると、序文に述べられている [varmA 1954: vii]。

本稿には、(3)「神さまを敬うお嫁さん」(p. 134) および(4)「自分の運勢を切り開いた末の王女さま」(pp. 137-138) を訳出し、(3)「神さまを敬うお嫁さん」の「商人がいました。商人には、男の子が七人いました。上の六人は、お嫁さんをもらいました。いちばん下の七番目の子は、まだです」とはじまる冒頭部分の原文を、翻訳に挿入する (図 4)。

uday nArAyaN tivArI. *bhojpurI bhASA aur sAhitya*, paTnA: bihAr rASTra bhASA pariSad, 1954 (ティワリー『ボージュプリー語

とその文学』)。

この書は 388 ページから成り、インド・ヨーロッパ語族のなかでボージュプリー語（著者はこれを方言ではなく「言語」と捉えている）を位置づけ、この言語による文学的な伝統を通観し、言語の音と形の記述をしたうえで、見本・用例として民謡、古文書、昔話などを 50 ページにわたって収めている。見本・用例は、自ら集めたものをグリヤソン『インド言語調査』所収のもので補っている。表記は、ナーガリー文字に補助記号をつけて行い、国際音声字母のナーガリー文字版を提唱している。民謡、古文書、昔話などには、それに共通ヒンディー語訳を添えている。

本稿には、(5)「土と葉っぱのけんか」(p. 335) および(6)「運のよい床屋さん」(pp. 340, 341)を訳出し、(5)「土と葉っぱのけんか」の「土のかたまりが、一つありました。木の葉が、一枚ありました。土と木の葉は、ふだんから仲がよくありません」とはじまる冒頭部分の原文と共通ヒンディー語訳を翻訳に挿入する（図 5）。

rAmswarUp caturvedI, AgrA jile kI boll, illAhAbAd: hindustAnI
ekeDemI, 1961 (チャトゥルヴェーディー『アーグラール県の方言』)。

この書は 172 ページから成り、構成と表記において上掲のティワーリーによる『ボージュプリー語とその文学』を踏襲している。ブラジュ・パーシャー方言による民謡、昔話などの見本・用例を 15 収めている。国際音声字母のナーガリー文字版によるが、共通ヒンディー語訳は載せていない。

本稿には、(7)「仲良しの鹿と鳥と山犬」(p. 111)を訳出する。

hardev bAhrl, grAmIN hindI boliyAM, illAhAbAd: kitAb mahal,
1966 (バーフリー『村のヒンディー語方言』)。

この書は 245 ページのなかにヒンディー語の 18 方言を包摂し、各方言の音と形を概観したうえで、見本・用例を叙述文、昔話などから選んで収めている。本書は本文と見本・用例の両面で、グリヤソンの『インド言語調査』や宣教師たちの蓄積に大幅に依拠している。したがって独自性は希

薄だが、コンパクトな本でヒンディー語の 18 方言を見渡す意義をもつ。表記は、ナーガリー文字を基本とし、一部の方言について補助記号を付けている。

本稿には、バーンガルー方言による(8)の「お兄さんを生きかえらせた健気な弟」(pp. 66, 67)を訳出する。

nAnak cand, hariyANavI bhASA kA udgam tathA vikAs,
Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute, 1968
(チャンド『ハリヤーナー語の起源と展開』)。

324 ページのこの書は、この方言が話される地域の文化的な背景を概観し、音韻と形態を記述したうえで、18 ページの見本・用例に昔話と民謡を含めている。

表記はナーガリー文字に補助記号をつけて行い、国際音声字母のナーガリー文字版を意識しているらしい。

本稿では、(9)「蜂蜜を舐めた雄の山犬、蜂に刺された雌の山犬」(pp. 304, 305)を訳出する。

Jagdeva Singh, *A Descriptive Grammar of Bangru*, Kurukshetra:
Kurukshetra University, 1970 (シンフ『バーンガルー方言の記述研究』)。

この書は 268 ページから成り、音韻・形態の記述をしたうえで、73 ページにわたる Text を添え、原文をアメリカ言語学の音声記号によって示し、その英訳を添えている。Text の最初の昔話 “The Jackal and the Chit” において本文での記述を詳細に展開し、言語研究とテキストの昔話研究を見事に連動させている。

本稿では、(10)「銀貨のうんちをたれる狼」(pp. 198, 199)を訳出する。

zivkumAr khaNDelvAl, bAGgarU bolI kA bhASAzAstrIya adhyayan,
dillI: vANI prakAzan, 1980 (カンデールワール『バーンガルー方言の言語学的研究』)。

この書は 248 ページから成り、音と形態を記述したうえで、7 ページで昔話 10 話を掲げている。表記はナーガリー文字による。本稿では、(11)「ずるい兄と実直な弟」(pp. 236, 237)を訳出する。

以上の 11 話は、ヒンディー語の諸方言で語り伝えられてきた昔話である。それらが語られた方言名とその中心ないしは近辺の都市名を（図 1）の地図にカタカナで記す。

なお、上記の研究成果のうちでつぎの 3 点は、広い対象地域を訪ねて見本・用例を記録している。すなわち、ヴァルマーの『ブラジュ地方の方言』は、18 に地域を分けて昔話だけで 22 話を収めている。ティワリーの『ボージュプリー語とその文学』（1954）は、8 地域から 9 話の昔話を自ら集めたほか、グリヤソンの『インド言語調査』からも各地の昔話を補っている。チャトゥルヴェーディーの『アーグラール県の方言』（1961）は、9 地域から 19 の昔話を集めている。方言と昔話の資料が豊富な点で、意義が大きい。

〔IV〕 ヒンディー語の諸方言研究の系譜

ヒンディー語の諸方言研究の成果を〔Ⅲ〕の B のようにたどると、ある大きな研究センターが大きく機能していたことが明らかになる。

グリヤソンによる『インド言語調査』（1903-28）は、印欧語比較言語学の開拓者ウィリアム・ジョーンズ、聖書翻訳で現代語研究を推進した宣教師ウィリアム・カレーらの研究を継承し、1886 年のウイーン Oriental Congress（東洋学会議）がインド政府に「言語調査をするように」と要請したことを受けてなされた。

サクセナーによる『アワディー方言の展開』（1937）は、ロンドンに留学してダニエル・ジョーンズほかに学んだ著者が、アッラーハーバード

大学に提出した論文を、グリヤソンやジュール・ブロックらが指導・審査のうえ 1931 年に学位を認定したものである。

ヴァルマーの『ブラジュ地方の方言』(1954) は、パリ大学に留学した著者がジュール・ブロックの指導を受け、1935 年に学位論文として受理されたものを基盤に置いている。

ここまでのヒンディー語研究草創期には、外国人学者の指導のもとに、インドの研究者が自分の出身地域の方言を研究してきた。

ティワーリーの『ボージュプリー語とその文学』(1954) は、サクセナー、ヴァルマーに加えてベンガル語学者 S. K. チャテルジーの指導のもとに 1945 年にアッラーハーバード大学から学位を授与された英文論文を展開したものである。こうしてインド人学者の指導下に、インドの研究者による成果が公刊されるようになった。

チャトゥルヴェーディーの『アーグラール県の方言』(1961) は、サクセナー、ヴァルマー、ティワーリーの指導を受けて、1957 年にアッラーハーバード大学から学位を授与されたものである。

これらの研究の系譜を確認すると、ヒンディー語とその諸方言の研究の多くがアッラーハーバード大学を中心になされてきたことが明らかになる。

『バーンガルー方言の記述研究』(1970) は、シンフが 1956 年にプーナのデカン・カレッジでアメリカの記述言語学を広めた H. A. Gleason に教えを受け、そののちペンシルヴァニア大学で Henry M. Hoenigswald の指導を受けた成果である。ヒンディー語圏の外でなされた研究として、注目に値する。デカン・カレッジは、インドの言語学研究のセンターとして、内外の研究者が共同作業をする場として機能してきている。

村のヒンディー語方言のバーフリー、ハリヤーナー語のチャンド、バーンガルー方言のカンデルワールが、どこでだれから言語研究の指導を受けたかは、序文ほかではわからない。

主要な研究成果の序文ほかで明らかになったのは、およそこういうこと

であろう。すなわち、イギリス・フランスで指導を受けた研究者がヒンディー語研究を創始し、アッラーハーバード大学を中心に次代の人たちが研究を展開させた。一方で1950年代にはアメリカ言語学の手法がデカン・カレッジを中心に採りいれられるようになってきた。

〔V〕 ヒンディー語の諸方言研究文献に収められた昔話の意義

本稿では、9点の研究書・調査報告書から11の昔話を訳出する。これらは、東西1,500キロあまり、南北1,000キロあまりの広大なヒンディー語地域のほぼ全域をカバーしている。筆者はこれまで、ヒンディー語地域の何カ所かで昔話を採録してきたが、まとまった形で公刊された成果は2村落と2都市という四つの点での語りに限定されている。

本稿で新たに11話を訳出することで筆者は、これまで公刊した自分の成果に一定の意義があることを認める一方で、インドの先人たちが中心になって自分の生活空間の方言を研究し、その資料として昔話ほかを正確に記録し公刊した成果の一端を、日本の読者に伝えることになる。

なおここで、言語・方言の研究資料として記録された昔話の特徴を確認しておきたい。積極面では、言語事実の記録を主眼になされた昔話採録は、多くの場合に昔話を正確に呈示している。一般向け・子ども向けの昔話が「教育的」な配慮でしばしば書きかえられる現状で、言語・方言の研究資料としての昔話は、語り本来の姿を大筋で保っていると言える。

しかしながら、言語・方言の研究のために記録された昔話は、語りの流れを失うこともある。本稿で訳出した昔話では、(4)の「自分の運勢を切り開いた末の王女さま」の冒頭で4人いたとされる王女が、語りのなかでは3人しか登場しない。これは、語り手の錯誤によるのであろう。また(8)の「お兄さんを生きかえらせた健気な弟」で、お兄さんが連れていった獅子の子がそのあと活躍していない。これは、語りの部分的な欠落と推定され

る（詳しくは、その話の末尾の「筆者注」を参照）。

昔話の語りは通常、聞き手が相槌を打ち、語り手の記憶違いを聞き手が補うなかで進行する。ところが、録音機が不調で使えないときに筆者が語りを聞きながら筆記したときに、語り手が苛立って「書かなくてもよいから、ありがたい話に耳を傾けろ」と筆者に注意した。

本稿がテキストとして依拠した書物の大多数は、テープ・レコーダーを使えない条件のもとで言語・方言の見本・用例を集めたと思われる。依拠した書物のなかでテープ・レコーダーに言及しているのは、1970年刊のシンフによる『バーンガルー方言の記述研究』1点のみである。その序の「資料収集」の項に、「昔話をできるだけ正確に書きとめるように努め、ときにテープ録音もした」と記されている。1968年に資料収集をはじめたシンフにして、「ときにテープ録音もした」わけである。

言語・方言の研究資料として記録された昔話にこのような制約があったことを、まずここで確認しておきたい。そのうえで、これらの昔話が全体として広い地域をカバーすること、話が意図的に歪められることがなかったであろうことをも確認しておきたい。

〔昔話資料〕 ヒンディー語の諸方言研究の文献に収められた 昔話 11 話の試訳

以下に、ヒンディー語の言語・方言研究書に掲載された11の昔話を翻訳して掲げる。これらは、読みやすい日本語に書きなおすまへの試訳である。筆者がこれまで訳して公刊した話と重ならないように選んだ。

筆者はこれまで、本格昔話を中心に翻訳・紹介してきた。それを補う意図から、ここに掲げるのは動物昔話、頓智話の類が多くなっている。それぞれの話は短いものが多い。

なお昔話は通常、題をもたない。以下に掲げるヒンディー語の諸方言の

昔話では、サクセナー、ティワーリー、スィンフによる研究書に題がついているが、ほかの文献の昔話には題がついていない。それらには筆者が便宜上、仮題をつけた。また、題のあとの（ ）内に、それが語られた方言名を記す。

ここに訳出する昔話のなかには、語りの部分的な欠落、語り手の錯誤によるらしい矛盾がときに見受けられる。録音機を使えない 1930 年代の調査記録では、音韻を正確に記録することに努める調査者によって語りの流れが遮られたために、語りに部分的な欠落や錯誤が生じたものと推測できる。語りの欠落と推定される場合に、本稿では〔 〕内に筆者の推定に基づく補足を記入した。語りの矛盾と思われる部分については、訳文のあとに「筆者注」を記した。なお、訳文中で〈 〉内は、日本の読者の理解のために訳者（坂田）が付けた読み下し注である。

昔話資料目次

- (1) 「書記に遣り込められた閻魔さま」
- (2) 「ひどい目にあった七人の泥棒」
- (3) 「神さまを敬うお嫁さん」
- (4) 「自分の運勢を切り開いた末の王女さま」
- (5) 「土と葉っぱのけんか」
- (6) 「運のよい床屋さん」
- (7) 「仲良しの鹿と烏と山犬」
- (8) 「お兄さんを生きかえらせた健気な弟」
- (9) 「蜂蜜を舐めた雄の山犬、蜂に刺された雌の山犬」
- (10) 「銀貨のうんちをたれる狼」
- (11) 「ずるい兄と実直な弟」
 - (注 1) 話の末尾の（ ）内は、話の語り手に関する情報。
 - (注 2) 話のなかの〔 〕内は、語りの欠落と思われる部分の筆者による補足。
 - (注 3) 訳文中の〈 〉内は、読者の理解を援けるための筆者による読み下し注。

(1) 「書記に遣り込められた閻魔さま」

(ブンデーリー方言)

出典：G. A. Grierson (ed.), *Linguistic Survey of India IX, Indo-Aryan Family, Central Group, Part I Specimens of Western Hindi and Panjabi* (Calcutta, 1916) の pp. 445-448.

あるとき、象が死にました。象は〈地獄の王さまの〉閻魔さまのところに行きました。閻魔さまは象に、「おまえのように大きいものが、小さな人間にどうして使われていたのだ」と訊ねました。

BUNDELI.

(STATE, ORCHHA.)

एक बेरै एक हाँथी मर गवो तो। जब ऊँको जी जमराज-के गवो तो
उन-नेँ पूँछी के तेँ इतनो बड़ो है और आदमी जो इतनो इलको है ऊँके
बस-में काये रात ।

Ek	bérai	ék	hāthī	mar-gawō-tō.	Jab	ū-kau	jī	Jam-rāj-kai
One	time	one	elephant	died-had.	When	his	soul	Jamrāj-to
gawō,	tau	un-māi	pūchhī	kai,	'taī	it'naū	baṛau	hai aur ād'mī
went,	then	him-by	it-was-asked	that,	'thou	so	large	art and man
jō	it'naū	hal'kau	hai,	ū-kē	bas-māi	kāyē	rāt.'	
who	so	small	is,	his	subjection-in	why	linest.'	

図2 (1)「書記に遣り込められた閻魔さま」の話の冒頭部分

ナーガリー文字表記の原文(上), そのローマ字転写と英語の逐語訳(下)

象はこう答えました、「閻魔さまは死後のことを考えていればよいのです。生きもののことは話してもわからないでしょう」

そう言われて閻魔さまは、自分が生きものの世界のことを知らないことに気づき、手下たちに「生きている人間を連れてくるように」と言いつけました。手下たちは出かけていき、〈神さまや王さまの〉命令を書き記す仕事をしている男を見つけました。男は、紙や筆に囲まれて寝台で寝ていました。

書記は、閻魔さまの手下たちに地獄に連れてこられて目を覚ますと、仕事のときに着る服を羽織りました。そして宇宙を統べるヴィシュヌ神から

の命令書を、こう書きました、「閻魔はお役ご免にして、地獄を取りしきる仕事は書記のシヴラージに任せる。」〈シヴラージというのは、ヴィシュヌ神の手伝いをするシヴァ神さまという意味ですが、それが書記の名前でもあります。〉

閻魔さまのまえに呼びだされた書記役は、偽の命令書を見せました。閻魔さまはそれを読んで、自分の仕事をシヴラージに任せ、ヴィシュヌ神のところに行って訊ねました、「お役ご免にされるなんて、わたしがどのような間違いをしたのでしょうか。」

そのあいだに書記のシヴラージは、地上の世界から友だちを大勢呼んでご馳走しました。みんな大喜びで帰っていきました。

ヴィシュヌ神さまは、閻魔さまを連れてシヴラージのところに来ました。そして、「おまえは生きているのに地獄に連れてこられたけれど、うまく閻魔を遣りこめたのう」と誉めて、シヴラージを生きている人間の世界に戻しました。

それからヴィシュヌ神さまは、「閻魔よ、生きているもののことがこれで少しはわかったであろう」と言ったうえで、閻魔さまに地獄の仕事を任せて、ご自分は天界に戻られました。

（語り手に関する記録はない。）

(2) 「ひどい目にあった七人の泥棒」（アワディー方言）

出典：Baburam Saksena, *Evolution of Awadhi* (2nd edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1971; 1st edition 1937) の pp. 442-445。

あるところに、お金持ちの商人がいました。その家と店にお金や品物がたくさんあるのを嗅ぎつけて、七人組の泥棒がときどき商人の家の裏にやってきます。その気配を察した商人は、おかみさんに訊ねました、「このあいだ渡した銀貨だが、どこに置いてあるのだね？」

(c) cwa:ran ki kathar

jarkaa:fi raβAŋ. taunkə: pichəwarə: roxəwarə:
arwa:ti raβAŋ. tau phiri jark diŋ phiri arjə: tau sa:fi
kaβin ki “djarkha:u jiz ruβa:ja: diŋə: raβan taun
kaβi: dβarə:.”

(c) The story of the thieves

There lived a banker.¹ Thieves used to resort to the
back side of his (house) daily. Then again one day they
came. The banker said: “ See, the money that I had given
to you, where have you placed it? ”

図3 (2)「ひどい目にあった七人の泥棒」の冒頭部分
原文の国際音声字母表記(上), その英訳(下)

「ざくざくと山ほどあるあの銀貨ね。あれなら、壁が凹んだところに隠してあるわよ、だれにもわからないようにね」

ところが、壁の凹んだところには、スズメバチの巣があります。

七人組の泥棒は、商人とおかみさんの問答を盗み聞きしていました。おかみさんの言葉をそのまま信じました。

その晩、七人組の泥棒がやってきました。はじめの泥棒が、壁の凹んだところに手を入れました。大きなスズメバチに、ズッキーンと刺されました。痛くてたまらず、慌てて逃げていきました。

「あいつは、銀貨を盗って逃げたな。おれだって銀貨をいただくぞ」、とつぎの泥棒が手を入れました。ズッキーンとやられました。七人が七人、こうしてスズメバチに刺されました。

泥棒たちはなんの獲物もなく、自分たちの隠れ家に戻りました。

つぎの晩に、泥棒たちは「こんどこそ値打物を盗ってやるぞ」、と商人の家の裏にこっそりやってきました。

商人がおかみさんに訊ねました。「ステンレスの食器、ほら、丈夫でピカピカに光っている食器だがね、あれをこのあいだたくさん渡したよね。

どこに置いてあるのだい？」

「あんた、気をつけなさいよ。暗くなってだれが聞いているかわからないときに、大事な物の隠し場所なんか聞くのではないわよ。あのピカピカに光っている食器なら、みんな、庭に掘った穴に隠してあるわよ」

七人組の泥棒は、それを聞いていました。夜が更け、商人とおかみさんが休んだところを見計らって、七人組は庭の穴のところに行きました。

はじめの一人が、穴に入りました。なかなか出てきません。穴には、どろどろの砂糖きびの搾りかすがいっぱいです。そこにはまると、身体が沈んで息もできません。

そうと知らない二番目の泥棒は、「あいつめ、食器を独り占めしようと、全部集めているのだな」、と思いました。「おれだって盗るぞ」、と穴に飛びこみました。砂糖きびの搾りかすにはまって、身体が沈んでいきます。

こうして、七人組の泥棒はみんな、息ができなくなって死んでしまいました。

（スィータープル県の村で、ジャガンナートが語った話）

(3) 「神さまを敬うお嫁さん」（ブラジュ方言）

出典：dhIrendra VarmA, *braj bhASA* (illAhAbAd: hindustAnI ekeDemI, 1954) の p. 134。

商人がいました。商人には、男の子が七人いました。上の六人は、お嫁さんをもらいました。いちばん下の七番目の子は、まだです。

もう一人、商人がいました。その商人には、女の子が一人いました。娘が年頃になったときに、商人は坊さんを招いて首飾りを渡しました。そしてこう言いました、「この首飾りを買ってくれた人の息子さんに、うちの娘を嫁がせたいのです。買ってくれたら、それで嫁入りの約束ができたと思ってください。どうか、この首飾りを買ってくれる人を探してください」

एक सेठ हौ। बाके सात लरका ए। बा में से छैन के ब्याह है गए। एक को नई भयो।
एक दूसरे सेठ के एक लड़की ही। बा सेठ नै अपने पंडित कूं बुलायौ। उसकूं एक
हार दै दियो, और बासै कई कि जो कोई या हार क्रीं मोल लै लेय बाई के लड़िका कूं
या हार कु टीके में दे अइयौ।

図4 (3)「神さまを敬うお嫁さん」の冒頭部分
ナーガリー文字による原文

坊さんは、あちこち歩いて、七人の息子をもつ商人の店に行きました。
坊さんは、「この首飾りを買ってくれた人の息子さんに、わたしの知り合
いの商人の娘を嫁がせることになっています」と、話しました。商人は、
首飾りの値を訊ねました。そして番頭さんに、「お金を渡して、首飾りを
受けとりなさい」と言いました。

そこで坊さんは、こう訊ねました、「首飾りを買ってくれたのは、息子
さんがいて、まだお嫁さんをもらっていないからですね」

商人は答えました、「はい、いちばん下の息子がまだなのです」

そう聞いて坊さんは、いちばん下の息子さんに首飾りをつけました。そ
してこう言いました、「じつはわたしは、この首飾りを売りにきたのでは
なく、わたしの知り合いの商人の娘さんにお婿さんを探しにきたのです」

そうと知った商人はたいそう喜んで、坊さんにお金をたくさん渡しまし
た。

坊さんが預かってきたお金で、婚礼の支度が整いました。盛大な結婚式
が執りおこなわれました。

盛大な式が無事に終わって、お嫁さんは嫁ぎさきに行きました。けれど
お嫁さんは、ご飯をすすめられてもなにも食べようとしません。お嫁さん
は、いつも神さまにお供物を上げ、神さまを拝んでからご飯を食べるの
です。その神さまというのは、顔が象で身体が人間のガネーシャ神で
す。〈拝む人が不幸にならないよう、拝む人が豊かで幸せになるように護っ
てくれる神さまです。〉

それでお嫁さんは、家の人たちが「お食べなさいな」とすすめてくれて

も、ご飯をたべなかったのです。お嫁さんは、そのことを誰にも話さませんでした。[そして、ガネーシャ神にそっとお供物を上げ、ていねいに拝んでから、ご飯を食べました。おかげで商人の家は、ガネーシャ神のお恵みで、いよいよ栄えました。]

（カラウリー地方で、ジャイニーという商人から）

(4) 「自分の運勢を切り開いた末の王女さま」 （ブラジュ方言）

出典：dhIrendra VarmA, *braj bhASA* (illAhAbAd: hindustAnI ekeDemI, 1954) の pp. 137, 138.

むかし、ある王さまに王女が四人いました。王さまは自分が老いてきたときに、王女たちを呼んで順番にたずねました。

「おまえはだれのお陰で、こうして暮らしているのだね」

上の王女さまが答えました、「王さまのおかげです」

つぎの王女さまも、「王さまのおかげです」と、答えました。

末の王女さまの番になりました。末の王女さまは、こう答えました。

「王さま、わたしは、だれのお陰でもなく、自分の運勢で暮らしています」

その言葉を聞いて、王さまはたいへん怒りました。そしてこう思いました、「自分の運勢で暮らしているというなら、この王女がこのさきどういう暮らしをするか、見てやろう」と。

それからしばらくして、王さまは上の王女を、とても大きな国の王子に嫁がせました。お金や品物をたくさん持たせました。

つぎの王女にも、同じようにしてやりました。

末の王女を王さまは、癪病の男に嫁がせました。王女は、これも自分の運勢だわと思って、男に心から尽くしました。おかげでその男は、じきに癪病がすっかり治り、頑丈な身体、立派な若者になりました。男の運が開けてきて、せっせと働くうちに豊かになりました。

いっぽう、上とつぎの王女は、嫁いだ相手の王子が亡くなって、二人とも食べるものにも困るようになりました。

あるとき、王さまは思い立って、国の方々を見て歩きはじめました。

ある町に着くと、大きく立派な屋敷が目に入りました。

「小さな町なのに、なんと立派な屋敷があるのだろう、いったいだれの屋敷だろう」と、不思議に思っまわりの人たちに訊ねました。その屋敷が、末の王女の嫁ぎさきとわかりました。

王さまは、そっと屋敷に入っていました。

王女はすぐに、王さまだとわかりました。久しぶりに王さまに会えて、大喜びです。若者と王女は、王さまを心からもてなしました。

王さまは、自分が恥ずかしくなって、この王女はたしかに、自分の運勢で暮らしていると、感心しました。

「わしが間違っていた、許してくれ。おまえはほんとうに立派だ」と言って、王さまは王女をほめました。

(ピーリービート地方で語られた話。語り手に関する記述はない)

筆者注：冒頭で四人いるとされた王女は、話のなかでは三人だけである。よくある語り手の錯誤を、著者がそのまま記録したのであろう。

(5) 「土と葉っぱのけんか」(ボージュプリー語/方言)

出典：udaynArAyaN tivArI, *bhojpurI bhASA aur sAhity* (paTnA: bihAr rASTtra bhASA pariSad) の p. 335。

土のかたまりが、一つありました。木の葉が、一枚ありました。土と木の葉は、ふだんから仲がよくありません。

あるとき、土のかたまりと木の葉で、けんかになりました。

土のかたまりが言います、「おれは、土だから重くて、強いぞ」

木の葉も負けてはいません、「あたしだって、風に乗って空を飛べるから、強いのよ」

[ग] डेला पत्ता

एक् रहे डेला एक् रहे पत्ता । दुनों में भयल भगरा । डेलवा कहे हम
बड़ा, पतवा कहे हम बड़ा । त च दुनो सुलह कइलें ।

डेला और पत्ता

एक था डेला (और) एक था पत्ता । दोनों में हुआ झगड़ा । डेला कहता था मैं बड़ा,
पत्ता कहता था मैं बड़ा । तब उन दोनों ने सुलह (मेल) किया ।

図5 (5)「土と葉っぱのけんか」の冒頭部分

ナーガリー文字に補助記号をつけた原文（上），そのヒンディー訳（下）

そこで土のかたまりが言いました、「風でおまえが飛ぼうとしたって、
おれがおまえに乗かるから、おまえなんか飛べないぞ」

木の葉が言い返しました、「大雨が降ったら、あなたはとけて流れて消
えてしまうのよ」

木の葉は、こうも言いました、「雨のときにねえ、土のかたまりさん、
あたしがあなたのうえにいて、とけないようにしてあげているのが、わか
らないの？」

土のかたまりと木の葉が、このようにけんかしていたときに、急に嵐が
きました。

木の葉は、あつと言う間に風に吹き飛ばされて、消えてしまいました。

土のかたまりは、雨に流されて、なくなりました。

土のかたまりと木の葉は、けんかをしていたので、身を滅ぼしました。

みなさんは、こんなことにならないようにね。

（バナーラス近郊の村で、シータル・ティワリーが語った話）

(6) 「運のよい床屋さん」(ボージュプリー語/方言)

出典：udaynArAyaN tivArI, *bhojpurI bhASA aur sAhitya* (paTnA:
bihAr rAStra bhASA pariSad, 1954) の pp. 339, 340.

床屋さんがいました。〈床屋さんはお客さんの家に呼ばれていき、髪の

毛や髭をきれいに整えるのが仕事です。〉

床屋さんは腕がよかったので、ある日、王さまに呼ばれて、王さまの髪の毛をきれいにしました。王さまは、髪の毛がさっぱりして気持ちがよくなったので、こうおっしゃいました、「おまえに広い畑^(注)をやろう」

床屋さんは、〈髪の毛や髭をきれいにするのが仕事ですが、畑を持っていません。王さまから畑をもらって〉大喜びです。すぐに、鋤をかついで畑に行きました。

床屋さんは種を蒔けるように、畑を鋤でていねいに耕しました。半分くらい耕したでしょうか、泥棒が七人やってきました。

泥棒たちは言いました、「この畑には、おれたちのつぼが七つ埋まっているはずだ。つぼには銀貨がいっぱい入っている」

床屋さんは男たちに、こう答えました。「わしが耕した半分からは、なんにも出てこなかったよ。あとの半分を掘るのなら、この鋤を使いな」

泥棒たちは大急ぎで、残りの半分を掘りました。けれどなんにも出てきません。泥棒たちは、あきらめました。そして、捕まてはいけないと、大慌てで逃げて行きました。

半分は自分で耕し、半分は銀貨のつぼを掘りにきた泥棒たちが土を柔らかくした畑に、床屋さんは小麦を播きました。

春になって、小麦が長く伸びて、稔ってきました。床屋さんにはわかっていました、「あの泥棒たちがまた来て、小麦を盗っていくぞ」、と。

床屋さんは、小麦が伸びた畑の真ん中にベッドを置いて、寝ていました。夜中に泥棒たちがきて、畑の外側から麦を刈りはじめました。

小麦がもうじき刈りおわりそうになるのを待っていて、床屋さんは、「泥棒だ一、泥棒だ一、小麦泥棒だ一」、と大声をあげました。泥棒たちは、逃げていきました。

「小麦の刈りとりは大仕事だが、わしはそれをしないですんだ」、と喜びました。「納屋に運んで、小麦を大きな甕に入れよう。それをおかみさん

に見せてやるぞ」, と思いました。

泥棒たちが、納屋の小麦を盗りにくるのも、わかっていました。床屋さんは納屋にベッドを置き、よく研いだ剃刀を持って横になりました。

泥棒たちが来ました。泥棒の一人が仲間に言いました、「おまえ、この大きな甕に小麦が入っているかどうか、なかを見てこい」と。

そう言われた泥棒は、「ようし、見てくるぞ」、と大きな甕に入ろうとしました。

床屋さんは、泥棒の鼻をスバッと切り落としました。泥棒は七人が七人みんな、鼻を切りおとされました。つぎの朝、七人の泥棒はみんな死んでいました。

ちょうどそこへ、火葬屋がやってきました。

「死人が一人出たところだ、片付けてくれるな。お礼はやるから」、と床屋さんは言いました。

火葬屋が死体を片付けてきたと言うので、床屋さんは、「じつは、ほかにも片付けてもらいたい死体がある」、と残りの泥棒六人の死体を片付けさせました。

火葬屋は死体をつぎつぎに片付けましたが、七人目になると「片付けるのは面倒だ」と思って、いい加減に投げすてました。それが、下の道を歩いていた人に当たりました。その人は、「いい加減な火葬屋め」、と怒って追いかけてきました。

火葬屋は、「これは大変だ」と逃げていきました。

床屋さんは火葬屋にお礼をやらずにすみました。

（ミールジャール県の村で、

シヴムールティ・ティワリーが語った話）

（注） 広い畑：1 ビーガー（約 2,500 平方メートル、約 2 反 5 畝）をこう訳した。耕す土地をほとんど持たないナーイーにとっては、「広い畑」と感じられよう。

(7) 「仲良しの鹿と鳥と山犬」

(アーグラ県のブラジュ方言)

出典：rAmswarUp caturvedI, *AgrA jile kI boli* (illAhAbAd: hindustAnI ekeDemI, 1961) の p. 111。

ある森で、仲良しさんが暮らしていました。鹿と鳥と鋭い牙をもつ山犬です。

鹿と鳥と山犬はとても仲がよく、パンが一枚しかないとき、分けて食べていました。仲良しさんは、みんな揃わないと心配で、夜も寝られません。それぞれが食べ物を採しに行き、夕方になっても誰かが戻ってこないとき、呼びに行くのでした。

あるとき、鹿が村の百姓に捕まってしまう。革の袋に押しこめられて、逃げられません。百姓は、つぎの朝に鹿を食うつもりです。

夜になっても鹿が戻らないので、ふたりは心配になりました。

鳥が空を飛んで、友だちはどこにいるのかなあ、と探しました。

革の袋に押しこめられているのが、わかりました。

鳥は戻って、山犬にそれを知らせました。

[鳥の案内で、山犬は百姓の家に着きました。山犬は、鋭い牙で革の袋を破って、鹿を助けだしました。こうしてみんながいっしょになって、森で仲良く暮らしつづけました。]

(カルカウリー地方の村で、

十五歳のバイロー・シンフが語った話)

(8) 「お兄さんを生きかえらせた健気な弟」

(バーンガルー方言)

出典：hardev bAhrI, *grAmIN hindI boliyAM* (illAhAbAd: kitAb mahal, 1966) の pp. 66, 67。

お兄さんと弟がいました。とても仲良しでした。二人は顔立ちがそっくり

りで、見分けるのがむずかしいほどです。

ある日、お兄さんが弟に言いました、「ぼくはよその国に行くよ。おまえは家にのこるのだ」

すると弟が言いました、「にいちゃんがいないと、ぼくは淋しいよ」

「困ったなあ。でもいっしょに連れて行くわけにはいかないのだ。この花をあげるから、花をにいちゃんと思って待っていておくれ。そしてもしこの花がしぼんだら、にいちゃんが死んだと思っておくれ」

こう言って、お兄さんは旅に出ました。どんどん進んでいくうちに、深い森に着きました。森では、雌の獅子がうずくまって泣いていました。獅子が言いました、「ねえ可愛いいぼうや、足に刺がささって痛くてたまらないの。お願いだから抜いてちょうだいな」

お兄さんは疑いました、獅子はぼくをだまして捕まえるのではないかな、と。

そばに行ってよく見ると、たしかに刺がささっています。刺を抜こうとしました。そのとき獅子が言いました、「あたしは刺が痛くて足をバタバタさせるかもしれないわ。あたしの足の爪が坊やにぶつかったら、坊やは死んでしまうわよ。だから、あたしの足をなわでしばっておいてね」

足をしばってから、刺を抜きました。獅子は喜んで言いました、「あたしには子どもが二頭いるのよ。お礼に一頭を上げるから連れて行ってちょうだい」

お兄さんは獅子の子を連れて、進みました。そのさきに、坊さんの小屋がありました。坊さんの目がさめました。坊さんは人の気配がすると目がさめますが、そうでないときはずっと眠っているのです。

坊さんはお兄さんに言いました、「しばらくこの小屋で休んで、ゆっくりするがよい。二日したらおまえを弟子にしてやろう」

「はい、お坊さん」とお兄さんは言いましたが、坊さんが偽の坊さんだとは知りません。

坊さんは大きな釜に油をいっぱい入れて、グラグラと煮立てました。そして言いました、「よいか。この大きな釜の周りを七回めぐるのだ。わしはそのあいだ、おまじないを唱えるからな。そのあとで、おまえを弟子にしてやる」

「はい、お坊さん」と言って、お兄さんは大きな釜の周りをめぐりはじめました。七回目のときに坊さんは、お兄さんをつかまえて油がグラグラ煮立っている釜に投げこみました。火がよくとおってから坊さんは、ムシャムシャと食い、骨を奥の部屋に置きました。

そのとき、家にいる弟の花があっというまにしばみしました。

お兄さんはどうしたのだろうと心配になって、弟は馬に乗ってお兄さんを探しに出ました。途中であの雌の獅子に遭いました。獅子は、弟がお兄さんそっくりですから、お兄さんに見ましがえました。あたしがあげた獅子の子が逃げてしまったのだでしょうと思って、もう一頭の子を渡しました。

弟は、お兄さんがこの道を進んでいったのだとわかりました。獅子の子どもを連れて、坊さんの小屋のところに着きました。

坊さんは人の気配で目がさめました。「ここでゆっくり休むがよい。おまえをあした弟子にしてやろう」と、弟を小屋に入れました。弟は、「はい、お坊さん」と答えて小屋に入りました。

さて、お兄さんの骨を置いてある部屋には、死んだ者を生きかえらせる薬の壺もあります。坊さんは、おなかが空くと骨に生きかえりの薬をかけ、まえに殺した人を生きかえらせてまた食っているのです。

奥の部屋の鍵が落ちていました。弟は奥になにがあるのだろうと、戸を開けてみました。はじめの部屋には、なんと部屋じゅうに骨がちらばっています。つぎの部屋には頭がころがっています。三つ目の部屋には骨と壺があります。

壺になが入っているのだろう、と弟は指を入れました。指に水がつきました。指を振って水を切りました。すると、水がかかった骨から人間が

現れました。弟はこわくなりました。けれどその人は、「こわがることはない。これはみんな、あの偽の坊さんがしたことだ」と言っ、こう教えてくれました。

「あの坊さんが、弟子にしてやるから油の釜を七回めぐれと言ったら、坊さんが釜をめぐったらばくも坊さんについてめぐります、と言うのだ。坊さんがめぐりはじめたら、うしろから捕まえて釜に投げこんでやれ」

弟は教わったとおりにしました。偽の坊さんは死にました。いちばん奥の部屋を開けました。壺を持って、散らばっている骨に水をふりかけました。つぎつぎに人が生きかえります。お兄さんも生きかえりました。

お兄さんと弟は、しっかりと抱きあいました。

そこにいた人たちが、お兄さんと弟に頼みました、「わたしたちみんなを生きかえらせてくれたのですから、お兄さんと弟さんはこの国の王さまになってください。わたしたちは、二人の王さまに尽します。土地も、象も、馬も、宝物もみんな、王さまのものです」

その日からお兄さんと弟は、国を治めてみんなを幸せにしました。

こうして時がたったときに、獅子の子たちが言いました、「もう安心してしょう、家に帰ってください。この国は、ここの人たちとわたしたち獅子二頭で守りますから」

（デリーの北 100 キロほどのカルナール市の近くの村で

記録された話。語り手に関する情報は、記されていない。）

筆者注：この話では、獅子の子たちが果たした役割が語られていないように思われる。はじめの獅子の子は、お兄さんに道を案内し、お兄さんが坊さんに捕まったときは隠れて一部始終を見ていた。そして、2 番目の獅子の子が弟ときたときに、そのことを教えた——もとはこういうことも語られていたが、伝承の過程でそれが欠落した可能性がある。

娘の語りでは欠落していた伏線が、母親の語りによって完全に語られた事例をわたしは見ている（坂田の論文「母から娘へ——北インドにおける昔話伝承の一事例」『拓殖大学論集』114 号、1978 年 1 月）。

(9) 「蜂蜜を舐めた雄の山犬，蜂に刺された雌の山犬」
(ハリヤーナー語/方言)

出典：nAnak cand, *hariyANavI bhASA kA udgam tathA vikAs*
(Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute,
1968) の pp. 304, 305。

雄と雌の山犬がいました。荒地に住んでいました。

ある日，雄の山犬はお腹が空いたので，食べ物を探しに行きました。草むらに蜂の巣がありましたので，たっぷりと蜜を舐めました。

家に帰って雌の山犬に言いました，「おれはきょう，うまい蜂蜜をたっぷり舐めてきたぜ」

雌は思いました，「自分だけたっぷり舐めてきたのね」

つぎの日，雄は雌を連れて草むらに行きました。雌は蜂蜜を舐めようと，蜂の巣に口をつけました。舌を伸ばしたとたんに，ズッキーンと蜂に刺されました。「おまえさんが言ううまいのって，こんなに痛いじゃないの」と，文句を言いました。

(語り手に関する情報は，記されていない。)

(10) 「銀貨のうんちをたれる狼」(バーンガルー方言)

出典：Jagdeva Singh, *A Descriptive Grammar of Bangru* (Kurukshetra: Kulukshetra University, 1970) の pp. 198, 199。

村の商人が，いつものように空き地にうんちをしに行きました。〈少しまえまで，村の家にトイレがありませんでした。〉

雌の狼が，草むらでちょうどうんちをたれたところでした。草むらが小さくて隠れきれないので，狼は後ずさりして身を隠そうとしました。ところが後脚が草むらから出て，隠れていることが商人に見つかってしまいました。

商人は草むらからなにかが出てきたのを見て，よく見もせずに後脚を掴みました。それが狼と知って驚き，草むらに押しこもうとしました。狼は

後ずさりします、商人は押しこめようとします。もみあっているうちに、商人の腰布がゆるんできて、そこに挟んでおいた銀貨が落ちました。

そこへ、土地の大地主がやってきました。「なにをしてるのだね」と訊ねました。

「ご覧のとおり、わたしは銀貨が要るときはいつもこいつから取るのです、こいつは銀貨をたれますからね。きょうは銀貨が足りたから、これで帰ります」と言いながら、商人は狼を草むらに押しこんで帰りかけました。

「待て、待て。こいつはわしの土地に住んでいるのだから、こいつがたれた物はわしの物だ。おまえに持ってはゆかせぬぞ」

「地主さんがこんなことで怒るのはみっともないですよ。こいつはまだまだ銀貨をたれますから、たくさん取ればよいでしょう」と、商人は後脚を地主に持たせ、そのあいだに銀貨を拾い集めました。

地主が後脚を掴むと、ウオーというすさまじい吠え声が出てそれが狼とわかりました。地主は商人に、「わしを騙したな」と怒りました。

商人は「騙してなんかいませんよ。そいつはまだまだ銀貨をたれますよ」と言いながら、帰ってしまいました。

（語り手に関する情報は、記されていない。）

(11) 「ずるい兄と実直な弟」（バーンガル方言）

出典：zivkumAr khaNDelvAl, baNgarU bolI kA bhASAzAstrIya
adhyayan (dillI: vANI prakazan, 1980) の pp. 236, 237。

兄弟二人がいました。一人はずるく、もう一人は実直でした。

二人は、全財産を分けることにしました。けれど二つだけは分けずに、共同で持っていました。一つは毛布、もう一つは水牛です。ずるい方が訊きました、「水牛は、前のほうが欲しいか、後ろのほうが欲しいか」

実直なほうは、「好きなほうを取りなよ」と、任せました。

するとこんどは、「おまえは毛布を昼のあいだに使うか、夜に使うか」

と訊きます。

実直なほうは、「かみさんに訊いてから返事するよ」と、答えました。

おかみさんに訊ねると、「あんたねえ、水牛は前のほうをもらい、毛布は昼のあいだに使うといいわよ。毛布は夜はいらないからね」と、言いました。

実直なほうは草を刈ってきては水牛に食べさせ、ずるいほうは乳をすっかり搾って、夜になると毛布をかけて寝ました。

ある日、村の近くに苦行僧が来ました。実直なほうは坊さんに、「わたしは困っています」と相談しました。

「それはどういうことじゃ、わけを話してごらん」

「兄弟で二つのものを持っています。毛布は昼のあいだに使い、水牛は前のほうを取りました。ずるいほうが乳をみんな搾り、わたしは少しも乳を取れません。毛布も寒い夜に使えません」

「では、こうするがよい。毛布は日が沈むころに水牛を繋ぐ杭にかけ、もう一人が乳を搾りはじめたら、水牛の角を棍棒で殴るのだ。そうすれば、おまえがしていることが間違っているか、正しいかがわかろうというものじゃ」

〈ずるいほうは、乳を搾っているときにまえが見えない水牛にひどく蹴られて、自分のしていることがいけないとわかりました。〉

それから二人が交代で乳を搾り、毛布は一晩交代で使うようになりました。

（語り手に関する情報は、記されていない。）

《注》

引用・参考文献の詳細はすべて本文に記したので、ここにそれらを記すことは省略する。

〈調査報告〉

文検英語科出身教師の調査

— 第 10 回合格者までを対象に —

長谷川 文 子
茂 住 實 男

は じ め に

本調査の目的は、文検英語科合格者各人について学歴あるいは学習歴、教員としての履歴、著作などに関する諸情報を収集・整理し、今後の中高等学校英語科教員の研究のための基礎資料の 1 つを作ることにある。ここにいう文検とは、戦前に文部省が行った検定試験のひとつ、「師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略称である。

文検は、数多くの実力ある教師を中等教育機関に送り込んだが、一方では難関で知られる試験でもあった。その文検のうち英語科については以前調査を行う機会があり、試験合格者のほぼ全て 1,100 余名を明らかにすることができた⁽¹⁾。彼ら一人一人の英語教師としての指導ぶりなどを調べていくことで、当時の英語教育の実態に少しでも迫ることができるであろうと考え、この度その作業の基礎となる上述の資料作りを思い立った。

そうした資料は、文検英語科出身の英語教師の指導ぶりなどだけでなく、彼らの英語学力や技能、また文検合格後のキャリアアップの如何などを明らかにするうえに、益するところが少なくないはずである。ただ本調査は緒に就いたばかりであり、そこまでを期待することはできない。今回はと

りあえず第10回合格者までを掲げることにし、諸賢にご教示をお願いすることにした。

I

明治から昭和戦前期においては、師範学校、中学校、高等女学校など中等学校の教員になる途は、中等学校教員の養成を直接目的とする高等師範学校に進学して教員免許状を取得するか、あるいは文部省の行う検定試験を受験して教員免許状を取得するかであった。そして検定試験には、文部省に指定あるいは許可された一部の官・公・私立高等教育機関の卒業生に施行された無試験検定と、文部省が直接検定を行う試験検定すなわち文検とがあった。そのほかに無資格教員任用の規程を定めることも、また臨時教員養成所を設けることもあったが、それらはもとより中等学校の増加などに伴う有資格教員の供給困難への暫定的な対処策であった。

1884（明治17）年8月13日に「中学校師範学校教員免許規程」（文部省達第8号）が定められ、学歴を持たない者には品行・学力などを検定のうえ、中学校および師範学校（のちに高等女学校も加わる。）の教員免許状を授与するという、いわゆる文検が法制化された。同規程に、

第一条 中学師範学科若クハ大学科ノ卒業証書ヲ有セスシテ中学校師範学校ノ教員タラント欲スル者ニハ品行学力等検定ノ上文部省ヨリ免許状ヲ授与スルモノトス⁽²⁾

とあり、上述の試験検定のほかに、中等学校教員の養成を目的としていた中学師範学科の卒業証書を有する者、および大学の卒業証書を有する者には中学校教員、師範学校教員の資格を与えていたことも知られる。

中学師範学科というのは1875（明治8）年8月に、小学校教員養成を目

的に設けられていた東京師範学校内に設置されたもので、わが国の中等教員養成の端緒となるものである。同学科は翌 1876 年 4 月に 60 名の生徒を入学させて開校した。わが国における近代的学校制度の出発点「学制」は 1872（明治 5）年に実施されたが、文部省の統計によれば、その翌年の中学校数は 20 校（生徒数 1,767 名）、師範学校数は 3 校（同 161 名）であった。しかし 2 年後の 1875（明治 8）年にはそれぞれ 116 校（同 5,620 名）、90 校（同 7,696 名）と急増しており、中学校・師範学校教員の需要も急速に高まったことが知られる⁽³⁾。そうした背景のもとに中学師範学科の設置があったのである。

「中学校師範学校教員免許規程」が定められた翌年の 3 月から 4 月にかけて、第 1 回の検定試験が実施された。『文部省第十三年報』（明治十八年分）によると、1885（明治 18）年「三月十六日ヨリ四月十七日マテ中学校、師範学校教員学力試験ヲ施行ス受験者百四十二名ニシテ其中及第スルモノ百六名落第スルモノ三十六名ナリ」⁽⁴⁾とある。受験者総数が少なく、また学科目ごとの受験者数、合格者数も不明であり、したがって同規程第 2 条に掲げられた 36 科目⁽⁵⁾すべてにおいて、検定試験が実施されたかどうかとも判然としない。試験の倍率も学科目ごとにはわからないが、全体的には低いものであった。応募者が少なかったことの原因の 1 つに、同規程が定められてから応募の締め切り・試験の実施までが半年余りしかなかったこと、つまり周知の期間が短かったことが考えられる。

試験後 3 か月ほど経って、『官報』（第 616 号）に、「第一回中学校師範学校教員免許学力試験ニ於テ中学校師範学校ノ一学科若クハ数学科ノ教員免許状ヲ授与シタル人名左ノ如シ」として、免許状を授与された者 110 名が授与科目名と共に掲げられた⁽⁶⁾。『文部省第十三年報』の試験及第者 106 名と『官報』の免許状授与者 110 名の数字が合わないが、現在のところこれ以上は分らない⁽⁷⁾。

1886（明治 19）年 4 月 10 日、高等師範学校の設置が盛り込まれた師範

学校令（勅令第 13 号）が制定された。文検受験生が目指した中等学校教員の程度を推し測るために簡単に触れておきたい。同令は第 1 条で「師範学校ハ教員トナルヘキモノヲ養成スル所トス」と定め、第 2, 3 条で師範学校を高等と尋常の 2 等に分け、高等師範学校は文部大臣の管理下に置き（官立）、東京に 1 校設置するものとし、尋常師範学校は府県に各 1 校を設置するものと定めた。師範学校令の制定に伴い、これまで中等学校教員と小学校教員の養成を行っていた東京師範学校は、4 月 29 日高等師範学校と改められ、文部大臣の管理に属し、もっぱら中等学校教員の養成を行うこととなった。

そして同年 10 月に定められた「高等師範学校ノ学科及其程度」（文部省令第 17 号、10 月 14 日）、「高等師範学校生徒募集規則」（文部省令第 18 号、10 月 14 日）によって、高等師範学校に男子師範学科と女子師範学科を設け、前者には理化学科、博物学科、文学科を置いた。また入学資格は、男生徒は尋常師範学校を卒業した者、女生徒は師範学校の 2 年課程を修了した者とし、修業年限については、男子師範学科は 3 学科とも 3 年とし、女子師範学科は 4 年と定めた。英語の「程度左ノ如シ」として男子師範学科は 3 学科とも「講読 作文 翻訳」とし、時間配当は第 1 年 6 時間、第 2 年 5 時間、第 3 年 3 時間と定められた。女子師範学科はそれぞれ「読法 文法 翻訳 作文」、第 1 年 6 時間、第 2 年 4 時間、第 3 年 3 時間、第 4 年 3 時間であった⁽⁸⁾。なお高等師範学校の女子部は 1890（明治 23）年に独立して女子高等師範学校となった（勅令第 42 号、3 月 25 日）。

II

文検英語科の受験生の学力について少し触れておきたい。当初文検は規定にしたがって第 4 回（1888 年）までは毎年行われてきたが、1889（明治 22）年の省令第 4 号「尋常師範学校尋常中学校及高等女学校教員免許

規則中改正」によって「毎年1回」の文言が削除されたことなどもあり、同年と翌1890（明治23）年には実施されなかった。先行研究によれば、その理由は文検受験者の学力不足にあったようである⁽⁹⁾。

教員検定委員長渡辺洪基帝国大学総長は、文検第4回試験に関して各試験委員に試験結果についての所見を求め、それらを集約する形で文部大臣への報告書を作成したとされる。渡辺はそのなかで、①各試験委員が受験者の学力不足を訴えていること、そして②検定試験は手間や費用の割に得るところが少なく、③このままでは無駄な制度のようにも見える、と述べている。また、④受験に失敗した無資格教員の彼らに依存せざるを得ない中等学校の教員事情も指摘している。さらにまた渡辺は⑤受験者が勉強をしたくとも、そのための良き書物、良き師、適切な学習場所のないことを指摘している⁽¹⁰⁾。

文検受験者の真骨頂は独学にあるが、学ぶべき良書を欠いては、独学は成り立たない。文検が始まって間もないこの時期は、わが国では近代的学問の研究と教育は、まだ欧米人教師などの指導を仰がなければならない時期でもあり、渡辺や試験委員、あるいは受験者が望むような独学に適した良書が、日本人の手によって著されるには、もう少し時間が必要であった。英語科においても事情は同様であった。

さらに1890年8月に出版の『教育時論』には、「辻次官浜尾局長より演説せられたる主意によれば、従来文部省にて行ふたる教員検定試験は、毫も好結果を見ざれば、此試験を中止して、云々」という記事が紹介されている⁽¹¹⁾。文部省の辻新次次官および浜尾新局長が、文検の結果がまったく好ましくないのをこれを中止すると演説した、というのである。

英語科受験生についてはどうであろうか。文検初期の英語科試験委員を務め、また後には検定委員長も務めた外山正一（1848～1900）は、英語科受験者の学力レベルについて次のように述べている。

教員検定試験の受験者は、及第の上は、中学校若くは師範学校等の教員たるべき者である、故に、此試験を受る者は、固より相当の準備教育のある者であらうと云ふことは、何人も想像する所であらう、然るに、受験者の多数は、正当なる準備教育としては、全く受けし事なきが如きものである、英語の一学科に就て証明しやうと思ふのである、受験者の中には曾て「ペン」杯を手に持ちし事無きが如くに見ゆる者も、往々あるのである、又曾て書取杯を為しゝ事も無き様な者も往々あるのである、されば、試験の一科たる書取には尋常平易の文章を徐ろに朗読するのを書取るのであるが、受験者の中には、其文章の意味を解することも出来ず、又、用語の多数を正しく綴り得ぬ如き者が随分多いのである、二十九年の試験に於ては、書取の文章は「ジャパンメール」新聞より取つたのである、其文章たる少々六ヶ敷き語は僅に一語か二語で、其他は、日常平易の語計であつたのである、而して、其文章に於ける総べての語の数は、僅に九十五であつた、而して其九十五語には the, at, last, to, have, been, of, more, than, a, being, by, every, thing, was, were, done, up, after, their, short 等の如き語が三十八九あつたのである、然るに、多数受験者の綴りの誤は、実に驚くべき者であつた、四五十の誤りを為した者は、少からぬのである。^{ママ}中には六十、七十誤綴を為した者もある、一番多いのは七十三の誤綴であつた、誤綴の平均が十二と六分であつた、実に驚き入つたる手際であつた、そこで、神田氏は同一の文章を、高等商業学校の予科生及本科一年生、二年生、三年生に書取らして見られたる所、其方が却て遙に結果が良いのであつた、予科生でも、遙に優て居つた、即ち、誤綴の平均数が十と五分であつて、最多数の誤綴が二十であつた、本科一年生は、平均が十であつて、最多数が二十であつた、第二年生は、平均が九であつて、最多数が、十六であつた、されば、検定試験受験者の多数は、高等商業学校の予科生徒程の学力も無い者であつた、斯

る輩が試験に遣て来るのであるから、百人中九十人が落第しても、試験が厳しいからである杯と云ふ話では決して無いのである、今日は、実に教員が乏しいに因て、斯る書取に於て、数多の誤りを為す如き者でも、已むを得ず、及第させなければならぬのである、(「検定試験受験者の学力」)⁽¹²⁾

以上は時期は少し降るが、文検第9回試験（1896（明治29）年5月実施）の例を引きながら、英語科受験者の英語学力の低いことを述べている部分である。先ず外山は、受験者の多数が英語の正当なる準備教育を受けてきていない、ときびしく指摘している。正則の英語教育を受けてきていないとの指摘と受け止められるが、ただこの点については受験者のために、当時の英語教育事情を少し説明しておく必要があろう。当時は「読むこと」に力点を置く英語教育の方が主流で、外山が求める「聞き、話すこと」に重きを置きながら、「読み、書くこと」もあわせて指導するような、発音重視のいわゆる正則英語教育を行う学校、あるいはそういう指導のできる英語教師は極めて少なかった。したがって「聞くこと」「聞き取ること」の指導法の1つである「書取」を経験したことのない受験者が「往々ある」というのは、やむを得ないことであった。外山は英単語綴りの誤りを取り上げてきびしく論じているが、おそらく受験者は試験委員による流ちょうな英語発音を聞き取ることができなかったであろう。書取（Dictation）の第一段階は先ず聞き取ることなのに、である。

ところで外山は受験者の英語学力について、書取を例に挙げて細かく述べているが、おそらくこの科目が数字を挙げて具体的に受験者の学力を論じやすかったからであろう。英文和訳など他の科目についても具体例を挙げてはいないが、「彼等の英文和訳の如きも、和文英訳の如きも、文法の如きも、何れも書取の手際に匹敵したものである、」⁽¹³⁾と述べて、受験者の英語学力の低いことを嘆いている。

また外山は『英語教授法』（1897 年）においても、「文部省の検定試験に来る者でも、ゑらい六ヶ敷書物を沢山読んだと云ひながら、スウェントンの万国史位が本当に解らぬ者が実に多し。スウェントンの万国史が本当に解る位の者ならば、立派に及第が出来る」⁽¹⁴⁾と述べて、文検英語科の試験問題はけっして難しくはないこと、受験生に不完全な英語力しかないとを指摘している。

渡辺洪基教員検定委員長、辻新次文部次官、外山らによる上述の発言を考え合わせると、文検が2年間実施されなかった理由の1つに、やはり文検受験者の学力不足があった、あるいは学力不足が引き金になった、と言ってよいようである。

当初の文検英語科は述べてきたように不評であったが、例えば第16回試験（1902 年、明治 35）では、英語教員になるつもりはないが、学力を公の場で証明しようとの目的で受験して合格した者が現れている⁽¹⁵⁾。また当時文検英語科試験委員として出題、採点、口述試験を担当していた神田乃武（1857～1923）は、第18回試験（1904 年、明治 37）が終わった後の談話で次のように述べて、文検英語科出身英語教師の評判の良さを伝えている。

今日文部省に於て行ふ、英語教員検定試験は中々に念を入れて其実力を試験する、それ故或る特種の学校を卒業し、無試験で検定を得た者より、此文部省の検定を経た教員の方が余程全国の中学校で受けが善いやうである、（下略）⁽¹⁶⁾

英語科について言えば、文検は第16～18回頃にはすでに学力を証明する権威ある試験になっていた、ということであろう。

Ⅲ

文検初期においては受験生の学力不足が深刻な問題であったが、もとより受験生すべてに学力がなかったわけではない。英語科でも合格者に栗野健次郎（第2回）、川田正激（第4回）などがいたことが示すように、個々には優秀な者がいた。

文検出身の教師には様々な経歴の持ち主がいたが、一例として特約生教育学科に籍を置いたという学歴の持ち主を取り上げ、簡単に紹介しておきたい。

文検第1回が1885（明治18）年3月から4月にかけて実施され、3か月ほど経って免許状授与者が『官報』に掲載されたことはすでに述べたが⁽¹⁷⁾、その英語科合格者5名の中に木村牧がいた。第2回（1886年4月～5月に実施）には本荘太一郎と菅沼岩蔵、そして第5回（1891年9月～11月に実施）に飯塚八百太がいた。木村は英語のほかに算術と地理に合格しており、また第2回では経済にも合格している。本荘は動物、植物、心理、教育学に、菅沼は算術、代数、三角法に、それぞれ英語と同時に合格している。飯塚も英語と同時に倫理と歴史に合格している。

彼らはいずれも帝国大学文科大学に設けられた特約生教育学科に入学したのだが、同教育学科が設けられていた期間は1889（明治22）年4月から1890（明治23）年7月までであるから、木村、本荘、菅沼の3人は文検に合格したのち、3年ほど経っての入学ということになる。飯塚については同教育学科入学前の文検との関わりは判然としないが、彼が文検に合格したのは同科が閉鎖されて1年後のことである。木村、本荘、菅沼は同教育学科を修了しているが、飯塚は、理由は分からないが、入学後わずか10日余りで退学している⁽¹⁸⁾。

特約生教育学科（the Pedagogic Course）というのは、高等中学校教

員および尋常中学校教員の養成を目的として、1889年に帝国大学文科大学に開設されたもので、前々年に文科大学教育学教師として招聘されたハウスクネヒト（Emil Hausknecht, 1853～1927）の建議によるといわれる⁽¹⁹⁾。

「特約生教育学科規則」（『官報』第1682号、1889年2月9日）に、「第一 特約生教育学科ハ高等尋常両中学校教諭タルヘキモノヲ養成スルタメ設立スルモノニシテ已ニ諸科学ノ学修ヲ了リシモノヲシテ尚ホ教育学及教授ヲ研修セシムルモノトス」⁽²⁰⁾とあり、特約生教育学科は中等学校教員養成のため、専門とする学科を修めた者に教育学および教授法を研修させることを目的としていた。

入学資格は次のようであった。①文科大学・理科大学卒業の者、または大学で2科目以上の撰科を修めた者。以上の者は無試験で入学を許可、②文検合格者で尋常師範学校教員または尋常中学校教員の者。英語の試験を課す、③上記①②以外の者。英語および撰科2科目（倫理学、和文学、漢文学、地理学、史学、数学、物理学、化学、生理学、動物学、植物学、金石学及地質学、画学の13科目の内から）の試験を課す。

②③の者に課す英語の試験は、ジエボン氏著論理学（サイエンス、プライメル）、ペーントル氏教育史、ペイン氏「エジュケーション、アス、エ、サイエンス」の内から出題し、理解、解釈、翻訳、パラフレーズの力を問うというものであった。この3冊はそれぞれ次の英書であると思われる。

- ・Jevons, William Stanley : *Logic* * Science primers シリーズ
- ・Painter, Franklin Verzelius Newton : *A History of Education*
- ・Bain, Alexander : *Education as a Science*

（いずれも国立国会図書館所蔵）

それらの英語学力試験に加えて、さらに英語を「聞く力」および「話す力」を試験することになっていた。そうした英語技能は、ハウスクネヒトを始めお雇い教師の授業を受けるには、当然必要なものであった。英文の

理解力と作文力を要求されるパラフレーズや、お雇い教師の生の英語を聞き取り、それに応対するといった英語技能を問う試験は、かなり程度の高いものであったと言えよう。

撰科2科目についての試験の程度であるが、高等師範学校の学科を修了したのと同じの学力としている。高等師範学校を卒業すれば中学校教諭が約束されていることを考えれば、これも程度の高い試験であった。

木村は特約生教育学科に入学する前には県立静岡中学校教諭であり、本荘は東京府尋常師範学校教諭であったから、入学試験は英語だけであったと思われる。また菅沼は、本荘と同じときに文検に合格し教員免許を授与されており、おそらく入学前には本荘同様に教鞭を執っていたことであろうし、したがって入学試験科目も英語だけであったと思われるが、現時点では推測の域を出ない。飯塚については同教育学科入試以前の教職歴は、その有無を含めてわからない。しかし程度の高い英語の理解力と表現力を要求される試験、そして高等師範学校修了程度の撰科2科目の試験に合格していることから、飯塚の学力は相当のものであった、と見るべきである。

特約生は教育学科のほかに、13科目の内から2科目を撰修することになっていた。また2科目の内の1つに代えて、英語かドイツ語を選択することもできた。木村ら3人はいずれも英語を選択していたが⁽²¹⁾、その場合の英語は、上述した英語力に加えて、「高等中学本科一部ノ学科（法科文科ヲ専修スルモノ）卒業者ト同一ノ学力ヲ有シ且ツ英語ノ談話自在ナルヲ要ス」⁽²²⁾。とあり、一層レベルの高い英語の学力と能力を要求されていたことが知られる。また特約生は修業の終わりに最終試験として教育学科試験、撰修学科試験が課されていたが、大学で2科目以上の撰科を修了していない特約生には、別途英語試験が課されていた⁽²³⁾。

1890（明治23）年6月にハウスクネヒトの延長した契約も満了となり、また彼が翌7月に離日したこと、そして同月に修了生を送り出したことで、特約生教育学科はその幕を閉じた。本荘は首席で卒業したという⁽²⁴⁾。

特約生教育学科のごく一面を概観しただけであるが、お雇い教師ハウスクネヒトによって発議されたこの学科は、単なる教員養成というより、現職教員や、教員資格を有する者、あるいはそれと同程度の学力ある者に対して、①教育学、②教授法および実地授業、③撰修科目の再教育、④英語（あるいはドイツ語）を研修させようというのであった。特約生教育学科を修了した木村、本荘、菅沼は専門の英語の学力と技能についてはもとより、教師としての素養もさらに高められたと言えよう。入学直後に退学した飯塚にしても、推測される試験のレベルから推して、やはり相応の学力があったと判断される。上述したように飯塚は退学2年後の第5回文検英語科に合格しているが、同時に倫理科と歴史科にも合格している。特約生教育学科を受験したときには撰修科目13科目の内から、倫理学と史学を受験したのではないかと推測する。

ところで菅沼岩蔵は、1894（明治27）年に『初等英文典』（*Primary English Grammar For Japanese Students*, 三省堂）を出版した。肩書きはTeacher of the Language in Shizuoka Jinjo Chugakko となっているから、特約生教育学科修了直後に就職した中学校にこの時期も引き続き在職していたことが知られる。菅沼は同書緒言に、

予久シク英語ノ教授ニ従事シ文法ノ授業ニ際スル毎ニ常ニ其ノ良書
ナクシテ徒ラニ生徒ヲ苦ムルヲ嘆セリ明治廿二年ノ頃始メテ Com-
fort 氏ノ German Course ナル書ヲ読ミ英語ヲ以テ独乙文法ヲ教フル
ヲ見ルニ至リテ大ニ悟ル所アリ以為ラク英文法ノ教授宜シク英米人
ノ著書ヲ用フ可カラズ宜シク邦文ヲ以テ其ノ教科書ヲ編纂スベシト
云々⁽²⁵⁾

と記して、コンフォートのドイツ文法書に示唆を得て著した、と述べている。

じつはコンフォートのドイツ文法書というのは、ハウスクネヒトが帝国大学文科大学の1, 2年生に教えていた教科書で、彼の「申報」には「コンフォルト氏著独乙文典（第一章ヨリ第二十五章マテ）ヲ教科書トセリ」とか、「コムホルト、ジャーマン、コース（一章ヨリ三十五章マデ）」などと記されている⁽²⁶⁾。ハウスクネヒトは特約生教育学科の教科書については、文科大学のように言及していないが、彼は特約生に教育学だけではなく、英語授業法や実地演習、また英語も教えていたから、同書を教科書として用いたか、あるいは参考書として紹介した可能性は十分に考えられる。また菅沼は別の著書『文字文章改良論』（1895年、嵩山房）で、付録としてMÄRCHEN（Child's Stories）と題する10頁程の英文を掲げるに当たり、「此篇ハ Dr.Hausknecht ノ想像力ニ就テノ講義中ノ一節ノ大要ニシテ予ガ文科大学ニ在リタル際筆記セルモノナリ其文章中ニ誤謬アラバ是レ筆者ノ誤謬ナリト心得ラレンコトヲ読者ニ乞フ」⁽²⁷⁾と言っているが、そうしたところから窺える菅沼とハウスクネヒトとの（師弟）関係を考えれば、菅沼の『初等英文典』執筆にはハウスクネヒトの影響があった、あるいはきっかけを与えられたと考えていいかと思う。なお同書巻末の広告欄に『初等英文典』の広告があり、そこに「明治二十八年二月二十六日文部省検定済尋常中学校尋常師範学校外国語科用書」とある。

《注》

- (1) 茂住實男「文検英語科合格者一覧（回、氏名、族籍、願書進達地方庁）」（『語学研究』2002年9月、拓殖大学言語文化研究所）。
- (2) 教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史』（2）、龍吟社、1938年、525～526頁。
- (3) 『日本近代教育史事典』1971年、平凡社、統計欄。
- (4) 『文部省第十三年報』（明治十八年分）、9頁。なお第2回目については『文部省第十四年報』（明治十九年分）に「本年四月一日ヨリ五月四日マテ中学校、師範学校教員免許学力試験ヲ举行シ五月廿日及第ノ者百二十二名ニ免許状ヲ授与ス（下略）」（9頁）とあるだけで、受験者数などは不明。

- (5) 前掲『明治以降教育制度発達史』(2), 526 頁。

第二条 学力ハ左ノ一学科若クハ数学科ニ就テ検定スルモノトス

但該学科ノ授業法ヲモ併セテ検定スルモノトス

修身 和文 漢文 英語 仏語 独語 算術 代数 幾何 三角法
代数幾何 重学 測量 天文 生理 動物 植物 金石 地質 物理
化学 地理 歴史 経済 本邦法令 心理 論理 教育学 習字
図画 記簿 唱歌 体操 農業 工業 商業

- (6) 『官報』(第 616 号, 1885 年 7 月 21 日), 286~287 頁。

- (7) 茂住實男「文検英語科の制度と試験」(日本學術振興会研究成果報告書
課題番号 16520351)「戦前中等学校英語科教員に期待された英語学力・英語
知識に関する史的 연구」2007 年 5 月)。本報告書をこの部分に限らず, 引用
あるいは参考にしたところがある。

- (8) 教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史』(3), 龍吟社, 1938 年,
508~518 頁。師範学校令関係については 496~498 頁。

- (9) 寺崎昌男・「文検」研究会『「文検」の研究』学文社, 1997 年, 21~23 頁
参照。

- (10) 同上書より, 渡辺洪基委員長より文部大臣へ提出された第 4 回文検につい
ての報告の概要を再引しておく。

本年の尋常師範学校, 尋常中学校, 高等女学校, 教員学力検定試験の成績非常に悪しかりしを以て, 渡辺帝国大学総長は, 先づ試験委員をして各自の所見を報告せしめ, 之を集攬して, 及落多寡の理由と, 改良の方法とを, 文部大臣へ申報せりといふ。其要旨各委員概して受験者に相当の学力なきを訴ふるもの多く, 試験も労費多く, 功益少く, 徒設の観あるのみならず, 其等の受験者は, 孰れも現に教務に従事せるものなれば, 其落第者も依然教員として置かざるを得ずして, 此検定試験は, 却て此等諸学校の程度を低せしむるの恐れあり。今日中等学校の設置も, 徒に国力を消磨するに過ぎざる議を免れざれば, 深くその原由を極めて, 厚く救済の術を施さざるべからずと云ふにあり。然して, 多数落第の原因種々なれども, 受験者必要の学科を修むるの方法, 及び要領を領知せざるも其一つなりと雖ども, 要するに, 国語, 漢文に於て良書の著記なく, 従ひて解釈に苦む者多く, 又洋語の原書を講読するを得ざるも, 良師なく, 学習する所なきこと, これ各学科に関する通患なりとて, 各委員より擬定したる方法の条款は左の如しと。(以下は略すが, 受験者に勉強させ, 学力をつけさせる方法などが提案されている。)(『教育持論』130)

- (11) 同上，22 頁より再引。
- (12) 外山正一『、山存稿』丸善，1909 年，691～692 頁。
- (13) 同上書，694 頁。
- (14) 同上書，201 頁。
- (15) 『青年』8-9，英語青年社，1902 年，17 頁。寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」試験問題の研究』2003 年，学文社，37 頁。
- (16) 『青年』13-2，英語青年社，1905 年，37 頁。同上『「文検」試験問題の研究』37-38 頁。
- (17) 注(6)を参照。
- (18) 寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる『御雇教師ハウスクネヒトの研究』1991 年，東京大学出版会，61 頁。
- (19) 前掲『明治以降教育制度発達史』(3)，387 頁。同上『御雇教師ハウスクネヒトの研究』1991 年，東京大学出版会，55～58 参照。
- (20) 『官報』第 1682 号（1889（明治 22）年 2 月 9 日，91 頁）。「特約生教育学科規則」は全 20 項から成っているが，そのうち本文記述に係わる条文を掲げておく（91～92 頁）。

第三 文学士理学士又ハ文科大学理科大学ニ於テ二科目以上ノ撰科ヲ完了セルモノニシテ特約生教育学科修業ヲ願フモノハ試験ヲ用キス入学ヲ許スヘシ

第四 文部省学力検定試験ニ及第シタル尋常師範学校教員及尋常中学校教員ニシテ特約生志願ノ者ハ第六項ニ掲クル英語ノ入学試験ヲ施スヘシ

第五 第三項第四項ニ掲クルモノニ非スシテ特約生志願ノモノハ第六項ノ英語入学試験ヲ施シ且左記ノ十三科目中二科目ノ試験ヲ施スヘシ
一 倫理学 二 和文学 三 漢文学 四 地理学 五 史学 六 数学 七 物理学 八 化学 九 生理学 十 動物学 十一 植物学 十二 金石学及地質学 十三 画学

第六 第四項及第五項ニ該当スル志願者ノ英語ノ学力ハ左ニ掲クル三書中何レノ章句モ之レヲ理解解釈翻訳及注解スルノ力アルヲ要ス

一 ジエボン氏著論理学（サイエンス，プライメル）

二 ペーントル氏教育史

三 ベイン氏「エジュケーション，アス，エ，サイエンス」

右ノ外英語ノ談話ヲ解シ且自ラ英語ヲ以テ談話シ得ルヲ要ス

第七 第五項ニ該当スル志願者ノ試験ヲ要スルニ学科ハ高等師範学校ノ学科ヲ修了シタルモノト同一ノ学力アルヲ要ス

第八 特約生ハ修学中教育学科講授ノ外二科目ヲ撰修セシムルモノトス
即チ第三項ニ該当スル者ハ大学課程トシテ学修シタル学科中二科目
ヲ撰択セシメ第四項第五項ニ該当スル者ハ第五項ニ掲クル十三科目
中二科目ヲ撰択セシム又第五項ニ掲クル十三科目ノ外^マ選修科トシテ
英語若クハ独逸語ヲ撰ムコトヲ得

第九 第四項及第五項ニ該当スル志願者ニシテ二科目中ノ一トシテ英語
ヲ撰ムモノハ第六項ノ学力ヲ要スルノ外^マ高等中学本科一部ノ学科
(法科文科ヲ専修スルモノ) 卒業者ト同一ノ学力ヲ有シ且ツ英語ノ
談話自在ナルヲ要ス

第十二 特約生ハ修業ノ終ニ於テ最終試験ヲ施ス其試験ノ方法左ノ如シ

一 教育学科試験

二 撰修学科試験

文士士理学士及文科大学理科大学ニ於テ二科目以上ノ撰科ヲ完了セル
者ニ非ラサル特約生ハ右ノ外左ノ一科ヲ加フ

三 英語試験

第十五 第十二項第三款ノ英語試験ハ英語及作文ノ二課稍熟練シタルノ
成績ヲ表スルヲ要ス

「特約生教育学科規則」は同上『明治以降教育制度発達史』(3)にも掲げて
あるが、字句が若干異なる(387~390頁)。

- (21) 前掲『御雇教師ハウスクネヒトの研究』65頁。
- (22) 注(20)に引用の「第九」。
- (23) 注(20)に引用の「第十二」。
- (24) 前掲『御雇教師ハウスクネヒトの研究』69頁。
- (25) 菅沼岩蔵『初等英文典』1894年、三省堂、国立国会図書館所蔵。
- (26) 前掲『御雇教師ハウスクネヒトの研究』200頁。
- (27) 菅沼岩蔵『文字文章改良論』1895年、嵩山房、付録1頁目、国立国会図書館所蔵。

* 本報告は、平成18年度言語文化研究所共同研究助成金を得て行った研究成果の一部である。本報告は、①本文、②文検英語科合格者学歴・教職歴等、③文検英語科年表から成っているが、①と②は長谷川と茂住の共同作業であり、③は茂住が作成した。なお①②は共同作業、共同執筆につき本人担当部分抽出は不可能である。(長谷川文子・茂住實男)

文検英語科合格者に関する情報

凡例 第10回までの文検英語科合格者の、①生没年、②最終学歴・卒年、③本試験合格回（合格年月日）、④勤務先、⑤著作、⑥特記事項、⑦出典・参考書、について情報を掲げた。

- ・氏名の後の（ ）内は標目よみである。
- ・③について：第9回までは『官報』では検定試験合格者ではなく、免許状授与者として発表されているが、ここでは合格者扱いとした。
- ・⑥特記事項の欄には、④～⑦以外の情報を掲げた。また情報がほとんどない合格者については、英語教育に直接関係ないような記事であってもこの欄に掲げた。

青木欣四郎（あおき-きんしろう）、
岩手県士族

◎第1回（1885年7月21日）（①）。
①福井県武生中学校教諭。ついで1901年4月創立の岩手県立福岡中学校（現県立福岡高等学校）初代校長（②）。⑦算術免許状も所有（①）。本人写真（③）。⑧①『官報』616, 1885年7月21日。②<http://www.2iwated.jp/fuk-h/gakkougaiyou/enkaku.htm>。③<http://www.geocities.jp/michinokumeet/kikou/kikou21-05.htm>

赤井直吉（あかい-なおきち）、北海
道庁平民

◎第7回（1894年7月19日）（①）。
①「一・遠友夜学校ノ前身 明治二十三年五月札幌独立基督教會有志ノ賛助ヲ得テ（中略）同教會日曜学校ヲ開始シ（中略）赤井直吉諸氏亦援助セラレタリ。（中略）二・遠友夜学校創始時代 明治二十七年一月農法學博士新渡戸稲造氏有吉者ト相謀リテ遠友會ナルモノヲ組織シ貧民兒童並ニ晩學ノ

子弟ノ為メ普通教育ノ道ヲ開カントシ前日曜學校生徒中ノ有志者ヲ收容シ以テ現今ノ夜學校ヲ開始セリ（中略）普通學科ニ於テハ大島金太郎・赤井直吉・吉田硯造・新海諸氏ヲ主トシテニ当リ斯クテ二十七年十二月第一回奨励會ヲ舉行シ其成績ヲ發表セリ」（②）。⑧①『官報』3316, 1894年7月19日。②<http://homepage3.nifty.com/katodb/doc/text/57.html>

浅川広湖（あさがわ-こうこ）、神奈
川県士族

①～1916（②）。②沼津兵学校資業生九期（②）。◎第5回（1891年12月14日）（①）。①静岡教會第2代牧師（1879年⑤、③④）。1907年静岡中学校教師（②）。⑦英語はおやめになったけれどほかの学課は一生懸命勉強なさった。その時分おじい様の先輩には浅川広湖という人があった。イビイさんが甲府へ来た時一緒について来た人で英語も達者だったし、西洋の学問も一通りでできていた（③）。旧名万次郎。

明治7年にカナダ・メソジスト派の宣教師カクランから洗礼を受け、以後牧師として沼津教会や静岡教会で布教に従事。さらに甲府教会の牧師にもなり、宣教師イビーとともに山梨県下を布教。大正5年没（⑥、写真有り）。㉔①『官報』2538, 1891年12月14日。②前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』第二編, 1993年。③<http://csx.jp/~amizako/yuukiojiisama.txt>。④http://www4.airnet.ne.jp/soutai/01_soutai/18-05_numadu_heigakkou.htm。⑤<http://www.h2.dion.ne.jp/~s-church/html/history/history.htm>。⑥<http://daigikan.daa.jp/sigyousei.html>

栗野健次郎（あわの-けんじろう），新潟県士族
㉔A1864～1936（①）。㉔B1876年5月新潟英語学校入学，後身の新潟学校（英語学部か）を1880年卒業（③）。1884年頃東京府中学校入学（④）。㉔C第2回（1886年6月16日）（②）。㉔D1886年5月東京府中学校，1887年1月第一高等中学校教員嘱託，1889年10月第一高等中学校教諭1890年10月教授。1892年8月第二高等中学校へ転任。1903年7月英語学研究のため2か年間英仏独へ留学を命ぜられ，1年延期して1906年6月帰国。1925年第二高等学校退官，同年名誉教授，引き続き1932年まで同高講師（以上㉔③）。㉔E「教員検定試験の第一回に一人合格し，其の成績最優等とあつ神田男は東京府一中より氏を一高に抜擢したのである。

氏は豊島定氏の令兄」（⑤）。豊島定も第7回文検合格者。㉔㉔①西田耕三『評伝 栗野健次郎』（1997年，耕風社）。㉔②『官報』886, 1886年6月16日。㉔③『英語青年』76-2, 1936年10月15日。㉔④『英語青年』76-4, 1936年11月15日。㉔⑤『英語青年』49-11, 1923年9月1日

飯塚八百太（いづか-やおた），愛媛県士族

㉔B特約生教育学科（1889年4月22日退学。帝国大学文科大学に付設）（①）。㉔C第5回（1891年12月14日）（②）。㉔D岐阜県師範学校教諭（1901年現在）（③）。㉔E『岐阜縣地理唱歌』（岐阜縣師範学校教諭飯塚八百太閔，岐阜高等女学校助教諭伊藤栄治著，1901年，玉成堂）。㉔F倫理，歴史の免許状も所有（②）。㉔㉔①『東京大学百年史 通史一』1984年，東京大学。㉔②『官報』2538, 1891年12月14日。㉔③『岐阜縣地理唱歌』（岐阜縣師範学校教諭飯塚八百太閔，岐阜高等女学校助教諭伊藤栄治著，1901年，玉成堂）

市川文明（いちかわ-ふみあき），茨城県平民

㉔C第10回（1897年7月9日）（①），
* 予備試験の記録不詳。㉔㉔①『官報』4205, 1897年7月9日

市原重吉（いちばら-じゅうきち），高知県士族

㉔C第10回（1897年7月9日）（①）
* 予備試験の記録不詳。㉔D1921年京都・平安中学校に転任（②）。㉔㉔①『官報』4205, 1897年7月9日。㉔②『英語

青年』（45-3, 1921年5月1日）

乾鞆藏（いぬい-しゅうぞう）、大阪府平民

◎第5回（1891年12月14日）（①）。

①府立大阪尋常中学校教諭（1893年2月現在）（②）、大阪府立北野中学校教諭（③④⑤⑥）。◎①『官報』2538, 1891年12月14日。②『府立大阪尋常中学校一覧』1893年12月。③『大阪府立北野中学校一覧 自明治四十年／至明治四十一年』, ④『大阪府立北野中学校一覧 自明治四十一年／至明治四十二年』, ⑤『大阪府立北野中学校一覧 自明治四十二年／至明治四十三年』, ⑥『大阪府立北野中学校一覧』（明治四十四年）

浦口文治（うらぐち-ぶんじ）、兵庫県士族

①1872～1944（②）。②1890年同志社普通科卒業（②）。ハーバード大学留学（1913～1915年）、M. A.（②）。◎第10回（1897年7月9日）（①）＊予備試験の記録不詳。①同志社卒業後は宣教師などの通訳をしながら英語や神学を学ぶ。また神戸の女子神学校で神学を教えたり、東北学院付属図書館に勤務したりしている。1897年9月函館中学校教師、1899年熊本県中学済々黌に転じ7年間教えた後に、新潟の長岡中学校へ移って教頭、1906年長岡を辞し上京、日本女子大学校と慶応義塾大学で講師。1908年台湾総督府国語学校教諭、1913～1918年同志社大学教授、1918～1929年東京高等商業学校教授（のちの東京商科大学）

など歴任。（②）。⑤『ジャン・ラスキン』1925年、同文館。『グループ メソッド』1927年、文化生活研究会。

『グループ式訳し方』1928年、同文館など。⑥東京高商への就職は神田乃武の斡旋によるもので、文検の成績が抜群であったことが役に立った（②）。

◎①『官報』4205, 1897年7月9日。②手塚竜麿「浦口文治の生涯と業績」（『英学史研究』10, 1977年）。浦口文治 http://209.85.175.104/search?q=cac+heig16WTCryw6IJ:www.nogami.gr.jp/rekisi/sanda_sizoku/21_uraguchi/uraguchi.html+%E6%B5%A6%E5%8F%A3%E6%96%87%E6%B2%BB&hl=ja&ct=clnk&cd=1

大島常枝（おおしま-じょうし）、島根県士族

◎第10回（1897年7月9日）（①）＊予備試験の記録不詳。①京都府立第一中学校教諭（1896年3月～1902年2月）（②）。②歴史科・日本史科・万国史の免許状も所有（①）。◎①『官報』4205, 1897年7月9日。②『京都府立第一中学校一覧』1904年7月。＊京都府立総合資料館では製本した本誌の表紙に「京都府立第一中学校校則」としている。

大滝八郎（おおたき-はちろう）、山形県士族

◎第8回（1895年7月11日）（①）。①大滝新十郎（第3代米沢市長）の末弟。15歳くらいで知人の宣教師を頼りに渡米。1899年神田乃武の斡旋で中国に渡り、上海税関や大連海関等で

税務司として勤務。1914年3月～4月の帰国中は高等商業学校の英語会や神田乃武の英語会等に参加(②)。㉔①『官報』3609, 1895年7月11日。②「大滝八郎日記」など(松野良寅氏蔵)岡島献太郎(おかじま-けんたろう), 東京府平民

㉔第7回(1894年7月19日)(①)。㉔京都府立第一中学校教諭(1896年6月～1898年5月)(②)。「石川啄木故郷の青春」によれば, 1901年には盛岡中学校にいたという(③)。㉔『和英訳文教科書』1895年, 岡島献太郎。神田乃武の英文序文あり。『中学英語教本』1897年, 岡島献太郎。著者肩書きに京都府尋常中学校教諭とある。『新式和文英訳教科書』1900年, 炭本専吉, 服部国太郎, 1895年初版。㉔「石川啄木故郷の青春」の1901年の項に「事件突発の四カ月前(明治三十三年十月十三日)の校友会大会には, 武芸部長に郷土出身の高田小一郎先生を, 文芸部長には他県から来た岡島献太郎先生を推したのだった。」とある(③)。㉔①『官報』3316, 1894年7月19日。②『京都府立第一中学校一覧』1904年7月。*京都府立総合資料館では製本した本誌の表紙に「京都府立第一中学校校則」としている。③<http://www.asahi-net.or.jp/~HM9K-AJM/musasinobunngakusannpo/isikawatakuboku/furusatonoseisyunn/takubokufurusatonoseisyunn.htm>

荻村錦太(おぎむら-きんた), 愛知県土族

㉔1870～1916(②)。㉔1892年国民英学会訳読科に入学, 次いで正科, さらに文学科に入学(卒業年は不明)(②)。㉔第8回(1895年7月11日)(①)。㉔第五高等学校講師(1895年8月～1896年7月), 学習院教授(1896年7月～1915年8月), その後女子高等師範学校, 東京高等工業学校, 中央大学英语教育に係わる(以上(②))。㉔1882年小学校卒業以降, 英語および普通学を独学, さらに内外人について英文学研究を行う。独学者であったが, 発音が得意であった(②)。㉔①『官報』3609, 1895年7月11日。②大村・高梨・出来『英語教育史資料 5』1980年, 東京法令出版

奥太一郎(おく-たいいちろう), 東京府平民

㉔1870～(②)。㉔同志社英語普通科卒業(1888年), 帝国大学文科大学選科生(1893～1896年, 哲学を修める)(②)。㉔第9回(1896年6月12日)(①)。㉔1888年群馬県碓氷郡私立碓氷英学校教頭(英語, 数学など担当), 1890年4月新潟市私立北越学館教授(英語などを担当), 1892年4月仙台市私立東北学院教授, 1896年6月岡山県津山尋常中学校教諭, 1898年4月第五高等学校講師, 10月教授, 1914年2月活水女学校教頭(英語, 修身, 教育学を担当), 1919年4月活水女子専門学校教授兼務, 1920年9月九州学院教師, 1923年日本女子大学教授(②)。㉔津山尋常中学校教諭の奥を第五高等学校に推挙したのは当時五高教

授であった夏目漱石（②）。奥の写真あり（1900年。夏目漱石と一緒に）（③）
㉔①『官報』3885, 1896年6月12日。
②田中啓介『熊本英学史』1985年, 本邦書籍。
③<http://209.85.175.104/search?q=cache:bauNkNMESr8J:www10.ocn.ne.jp/~fujisawa/soseki.html+%E5%A5%A5%E5%A4%AA%E4%B8%80%E9%83%8E&hl=ja&ct=clnk&cd=20&gl=jp>。隈慶秀「英語授業視察復命書と奥太一郎」（『英学史論叢』9, 2006年）

川合貞一（かわいーていいち），岐阜県平民

㉔第8回（1895年7月11日）（①）。
㉔慶応義塾に関係ある川合貞一（1870～1955）ならば㉔③参照。
㉔①『官報』3609, 1895年7月11日。
②<http://www.keio.ac.jp/staind/198.htm>
③http://koara-a.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=P20070501-11100569

川田正激（かわだーまさずみ），高知県士族

㉔1863～1935（①）。㉔明治義塾。㉔第4回（1888年8月4日）（②）。㉔第三高等中学校教諭（1888年現在）（③），1889年第一高等中学校に転じ，1891年には高知県立中学海南学校で教えた（①），1898年9月静岡県立静岡中学校校長（職名中学校長，受持学科修身，英語と記されている）（④）。1904～1909年宮城県立仙台第一中学校長，1909～1932年東京府立第一中学校長，1929年東京府立高等学校開校・初

代校長（兼務）。㉔『英語熟語詳解』1898年，成美堂。『欧米教育雑感』1914年，東京府立第一中学校校友会，『教へる人学ぶ人』1917年，磯部甲陽堂。㉔東京府立中学校英語教員会会長（①）。㉔①大村・高梨・出来『英語教育史資料 5』1980年，東京法令出版。
②『官報』1530, 1888年8月4日。③『第三高等中学校一覧 始明治二十一年九月／終明治二十二年八月』。④『静岡県立静岡中学校一覧』1901年10月

神崎直三（かんざきーなおぞう），埼玉県平民

㉔第7回（1894年7月19日）（①）。
㉔1896年11月～1898年東京専門学校（後の早稲田大学）教師（②）。㉔②には担当英語（文法，作文，時事文，発音）とある。杉山茂丸は明治1898年金子堅太郎が用意した通訳の神崎直三を随行させて云々（③）。㉔①『官報』3316, 1894年7月19日。②『早稲田大学百年史』第1巻，1978年。③<http://2006530.blog69.fc2.com/blog-entry-407.html>

木村牧（きむらーまき），青森県士族
㉔特約生教育学科（1890年7月修了。帝国大学文科大学に付設）（①）㉔第1回（1885年7月21日）（④）㉔県立静岡中学校教諭（1886年7月31日～1889年4月18日）（②）。高等師範学校附属校（特約生教育学科修了直後）（①），1891年当時島根県尋常中学校長か（③）。1903年当時福島県立会津中学校勤務（「福島県会津中学校」の

肩書きで国民英学会主催のスワン氏英語夏期講習会に出席している。スワン氏とは F. Gouin の高弟で、当時東京高等商業学校教師 Howard Swan のこと (⑤)。⑥算術、地理免許状も所有 (④)。⑦①『東京大学百年史 通史一』1984 年、東京大学。②『静岡県立静岡中学校一覧』1901 年 10 月。③<http://www.sumiyoshijinja.net/sunimiyoshi-19-11.htm>。④『官報』616, 1885 年 7 月 21 日。⑤松村幹男『明治期英語教育研究』1997 年、辞游社。

隈部富良 (くまべーとみよし), 長野県士族

①1864～。②1875～1879 年慶應義塾医学部で英語および英文医書を研究。1880 年大阪専門学校中退、以後 1885 年まで同人社、青山学院等で英語を修める (②)。③第 8 回 (1895 年 7 月 11 日) (①)。④1886 年丹波篠山鳳鳴義塾英語科担任、のち京都西本願寺文学寮、妙心寺大教校、熊本九州学院、第五高等学校、大阪府立第二尋常中学校、神奈川県立尋常中学校で教鞭を執り、1899 年東京府尋常中学校教諭となる。1901 年静岡県立静岡中学校教諭に転じさらに大阪市立大阪高等商業学校へ移る。1915～1920 年東京府立第一中学校教諭、1920～1921 年および 1924～1927 年同校嘱託 (②③)。⑤『新撰英文難句集』1902 年、三省堂。『中等英文難句集』1907 年、武蔵屋。Choice extracts for commercial student (1911 年, Morimoto Kaibunkwan)。『英文詳解』1915 年、隈部富良 (大阪府)。

⑥「隈部富良先生の思い出」(山田潤二) (②)。④に「英語、教授嘱託、隈部富良 (東京府士族)」とある。「長野県士族」ではないが、同一人物と思われる。⑦①『官報』3609, 1895 年 7 月 11 日。②『日比谷高校百年史 中巻』1979 年。③『東京府第一中学校一覧』(1900 年 6 月調べ, 1900 年 9 月。1899 年 4 月英語教諭として就任とある。東京府尋常中学校は 1900 年 2 月に東京府第一中学校と改称、さらに 1901 年 6 月に東京府立第一中学校と改められた)。④『自明治四十年四月／至明治四十一年三月 大阪府立市岡中学校一覧』

黒川正 (くろかわ-ただし), 静岡県士族

①1856～1916 年没 (③④)。②沼津兵学校、慶應義塾卒 (1880 年) (③)。③第 4 回 (1888 年 8 月 4 日) (①)。④1875 年静岡師範学校教員 (③), 1880 年掛川中学校訓導 (③), 静岡県立静岡中学校教諭 (1886 年 7 月 31 日～1896 年 8 月 3 日。1895 年度末調べでは教諭兼舎監) (②), 東京中央幼年学校教官 (③④)。⑦①『官報』1530, 1888 年 8 月 4 日。②『静岡県立静岡中学校一覧』1901 年 10 月。③前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』第二編, 1993 年④<http://209.85.175.104/search?q=cache:zyT8JtIstYEEJ:www.asahi-net.or.jp/~kw2y-uesg/jiin/reneiji/reneiji.htm+%E9%BB%92%E5%B7%9D%E6%AD%A3%E3%80%80%E6%98%8E%E6%B2%BB&h>

l=ja&ct=clnk&cd=3

佐竹義久（さたけ-よしひさ），新潟県土族

◎第2回（1886年6月16日）(①)。

⑤算術免許状も所有（①）。⑥①『官報』886, 1886年6月16日

重見経誠（しげみ-けいせい），山口県土族

◎第5回（1891年12月14日）(①)。

⑥『電気学術之進歩』(T.C. Mendenhall 著。木村駿吉と共訳述，1893年，内田芳兵衛発行)。『慣習之心理と其効用』(P. Radestock 原著。1894年，普及舎)。⑦大隈参議宛「日台事件につき所信を述ぶ」(②) ⑥①『官報』2538, 1891年12月14日。②http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i14/i14_a5012/index.html

清水泰次郎（しみず-たいじろう），大阪府平民

①1859～1926。②1871年3月より1876年11月まで文部省直轄英語学校で英語英文学等を学ぶ（②）。◎第6回（1893年5月24日）(①)。④1873～1884年の間，私塾教師，家庭教師。1885年照暗女学院（後の平安女学院）教頭兼英学教員，1886～1900年同志社学校教授及び評議員，1900年以降第五高等学校（以上②）や山口高等学校大学予科（同予科廃止（1906年7月）まで同校教授）(③)。早稲田の予科で英語を教えることになった（④）。1923年以降は一切の教職を退き，文部省中等教科書検定係嘱託のみとなる（②）。⑤*National English Readers*

(No. 1-4), 1901年，Hamamoto Meishodo（浜本明昇堂）。*Sir Roger de Coverley*, 1902年，原著 Joseph Addison 他，Hamamoto Meishodo。⑦第五高等学校へは英国留学で休職する夏目金之助の後任として1900年8月10日に講師就任，翌年教授となり1902年10月まで在職（『漱石研究年表』）。「氏は余人に其の名を知られないが英語は実に巧いもので日本人であれ位英語を話し，あれ位英文を書く人は少なからうとの評判である。Japan Mail に T. T. S という名でよく寄書して居るのは実に此清水氏である。」(③)。⑥①『官報』2968, 1893年5月24日。②本井康博「清水泰次郎について」(『英学史研究』20, 1987年)。③『英語青年』15-12, 1906年9月15日。④『英語青年』33-8, 1915年7月15日

菅沼岩蔵（すがぬま-いわぞう），静岡県平民

⑧特約生教育学科（1890年7月修了。帝国大学文科大学に付設）(①)。◎第2回（1886年6月16日）(②)。④静岡県尋常師範学校・同県尋常中学校（特約生教育学科修了直後）(①)。静岡県立静岡中学校教諭（1890年7月9日～1897年4月7日）(③)，東京府第一中学校教諭（1897年4月就任。教員免許学科として英語，算術，代数，三角，倫理，漢文，教育が記載されている（1900年6月調べ））(④)，三重県立第一中学校教諭（高等官待遇）（1903年11月27日就任（1906年5月末調べ））(⑤)。⑤『初等英文典』1894

年，三省堂。『文字文章改良論』1895年，嵩山房。算術，代数，三角法の免許状も所有(②)。㉔①『東京大学百年史 通史一』1984年，東京大学。

②『官報』886, 1886年6月16日。③『静岡県立静岡中学校一覧』1901年10月。④『東京府第一中学校一覧』1900年9月。⑤『三重県立第一中学校一覧』1906年7月

杉森此馬（すぎもり-このま），福岡県士族

㉔1858～1936(②)。㉔福岡県立柳河師範学校全科を経て，東京築地の一致英和学校（明治学院の前身）英語高等普通科全科卒業（1884年）(②)。㉔第7回（1894年7月19日）(①)。㉔一致英和学校助教授（1885年，英語，地理担当），同校が明治学院となり（1886年），1887年同学院幹事兼任，1890年教授（植物も担当）。1894年同学院退職，福岡県立尋常中学修猷館教諭。1896年茨城県尋常中学校教諭，翌年校長事務取扱。同年山口高等学校教授（英語科），翌1898年第四高等学校教授。1902年広島高等師範学校教授，兼教務課長。1913年旅順工科大学教授，1923年旅順工科大学予科教授（1925年3月退職，帰国）(以上②)。㉔Talks on Pronunciation（『英語教授』に連載，1907～1908年）。㉔1903年文部省より2年間の英米両国留学を命ぜられる。オックスフォード大学ではHenry Sweetの発音学を聴き，ハーバード大学では発音の実験機器を試みたという。1906年広島高等師範学校

でphoneticsの講義をしphonetic symbolsを教える(②)。㉔①『官報』3316, 1894年7月19日。㉔松村幹男「杉森此馬先生に関する報告」（『英学史研究』3, 1971年。大村・高梨・出来『英語教育史資料 5』1980年，東京法令出版。http://72.14.235.104/search?q=cache:3fIM_iI5E9YJ:tom.edisc.jp/hiroshima/sugimori-konoma.htm+%E6%9D%89%E6%A3%AE%E6%AD%A4%E9%A6%AC&hl=ja&ct=clnk&cd=1

鈴木安三郎（すずき-やすさぶろう），北海道庁士族

㉔第4回（1888年8月4日）(①)。

㉔①『官報』1530, 1888年8月4日

高田貞弥（たかだ-さだや），新潟県士族

㉔第9回（1896年6月12日）(①)。

㉔『高田氏小志』1938年，高田家。

㉔『高田氏小志』の著者と同一人物と思われる。㉔①『官報』3885, 1896年6月12日

高田年（たかだ-ねん），石川県士族

㉔第1回（1885年7月21日）(①)。

㉔京都府立第一中学校嘱託（1894年9月～1895年9月）(②)。㉔①『官報』616, 1885年7月21日。㉔『京都府立第一中学校一覧』1904年7月。*京都府立総合資料館では製本した本誌の表紙に「京都府立第一中学校校則」としている。

高島保三郎（たかばたけ-やすさぶろう），徳島県平民

㉔第4回（1888年8月4日）(①)。

㊦①『官報』1530, 1888年8月4日
高林璞蔵（たかばやし－はくぞう）,
東京府平民

㊦第5回（1891年12月14日）（①）。

①群馬県師範学校助教諭（1894年～
1896年）（②）。㊦①『官報』2538,
1891年12月14日。②清水楨文「明
治期の群馬県における教育会の歴史的
展開」（『東北大学大学院教育学研究科
研究年報』54-1, 2005年）

土岐隆次郎（とき－りゅうじろう）,
兵庫県平民

㊦第1回（1885年7月21日）（①）。

㊦①『官報』616, 1885年7月21日
富岡徹（とみおか－とおる）, 東京府
士族

㊦第10回（1897年7月9日）（①）,
予備試験の記録不詳。①1903年当時
大阪府茨木中学校勤務（「大阪府茨木
中学校」の肩書きで国民英学会主催の
スワン氏英語夏期講習会に出席してい
る。スワン氏とは F. Gouin の高弟で、
当時東京高等商業学校教師 Howard
Swan のこと）（②）。大阪府立茨木中
学校教諭（1907年3月末現在）（③）。

⑤『英文読本』（全6巻, *New Na-
tional Readers; with Notes*）1897年,
春陽堂（④）。『英語試験に必ず出る最
近和文英訳単語熟語応用の急所』1930
年, 青々書院（⑤）。『新英文解釈の根
底』塩谷栄と共著, 1934年, 研究社。

㊦①『官報』4205, 1897年7月9日。
②松村幹男『明治期英語教育研究』
1997年, 辞游社。③『自明治卅九年
四月／至明治四十年三月 第十二学

年 大阪府立茨木中学校一覧』。④外
国語教育史料デジタル画像データベー
ス [http://209.85.175.104/search?q=c
ache:NilvusPexwsJ:133.42.49.132/data
base/search.php%3Fmode%3D0%26
dispnumber%3D20%26name%3D%
25C9%25D9%25B2%25AC%25C5%25
B0%26sort1%3Dtitle%26sort2%3Dn
one%26sort3%3Dnone%26dispstart
%3D0+%E5%AF%8C%E5%B2%A1
%E5%BE%B9&hl=ja&ct=clnk&cd
=5](http://209.85.175.104/search?q=cache:NilvusPexwsJ:133.42.49.132/databse/search.php%3Fmode%3D0%26dispnumber%3D20%26name%3D%25C9%25D9%25B2%25AC%25C5%25B0%26sort1%3Dtitle%26sort2%3Dnone%26sort3%3Dnone%26dispstart%3D0+%E5%AF%8C%E5%B2%A1%E5%BE%B9&hl=ja&ct=clnk&cd=5)。⑤三康図書館 [http://www.f2.d
ion.ne.jp/~sanko/](http://www.f2.dion.ne.jp/~sanko/)

富沢久蔵（とみざわ－きゅうぞう）千
葉県平民

㊦第5回（1891年12月14日）（①）。

①静岡県立静岡中学校教諭（1896年9
月28日～1897年7月19日）（②）,
新潟県立新発田中学校（1897年7月7
日～1899年6月12日）（③）。⑤『警
誠模範英国々会奇譚史』（浜野理介と
編訳, 序文中村正直, 1889年, 三省
堂）。㊦①『官報』2538, 1891年12月
14日。②『静岡県立静岡中学校一覧』
1901年10月。③『新潟県立新発田中
学校一覧』（1911年10月）

豊島定（とよしま－さだむ）, 岩手県
士族

㊦第7回（1894年7月19日）（①）。

①海軍兵学校教授（②）。慶応義塾高
等部（③）。⑤『英語アクセント教授
書』1902年, 国民英学会。『英語必携』
1906年, 東西社。『海軍英文書翰文集』
1909年, 横須賀海軍機関学校（④）。

⑥第2回合格者栗野健次郎の弟。㊦①

『官報』3316, 1894年7月19日。②『英語青年』15-12, 1906年9月15日。

③『慶應義塾七十五年史』1932年。

④三康図書館蔵書検索－語学 http://209.85.175.104/search?q=cahce:JcxVmsxA-OcJ:www.f2.dion.ne.jp/~sanko/gogaku02_01.html+%E8%B1%A%E5%B3%B6%E5%AE%9A%E3%80%80%E8%8B%B1%E8%AA%9E&hl=ja&ct=clnk&cd=3. <http://133.42.49.132/database/jinmei.php>

内藤信夫（ないとう－のぶお）、石川県士族

◎第9回（1896年6月12日）(①)。

①海軍兵学校教授（②）。⑤川井田藤助と共著『英和海語辞典』1910年、賞文館。『英文教科書 巻之一』川井田藤助、堀英四郎と共著、1908年、海軍兵学校（②）。◎①『官報』3885, 1896年6月12日。②明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース <http://133.42.49.132/database/search.php?mode=0&dispnumber=20&name=%C0%EE%B0%E6%C5%C4%C6%A3%BD%F5%A1%A2%C6%E2%C6%A3%BF%AE%C9%D7%A1%A2%CB%D9+%B1%D1%BB%CD%CF%BA&sort1=title&sort2=none&sort3=none&dispstart=0>

南日恒太郎（なんにち－つねたろう）、富山県平民

①1871～1928（②）。⑧1889年富山中学校中退。1895年国民英学会入学（同会で学びながら、数多くの英米人の指導を受ける）(②)。◎第9回

（1896年6月12日）(①)。⑩1893年富山中学校国語科教諭。1897年正則中学校教師1900年第三高等学校講師，1902年学習院教授（1917年英語科主任），1922年依願免官。1923年富山高等学校創立と同時に校長（以上②）。

⑤『英文解釈法』1905年、有朋堂，*New English Course* (No.1～3)，1911年，三省堂，『英文和訳法』1914年，有朋堂，『英詩藻塩草』1916年，北星堂。⑥1893年文検国語科に合格。◎

①『官報』3885, 1896年6月12日。

②『英語青年』59-11, 1928年9月1日。『英語青年』60-3, 1928年11月1日
野田佐三郎（のだ－ささぶろう）、福岡県士族

◎第2回（1886年6月16日）(①)。

◎①『官報』886, 1886年6月16日

長谷川きた（はせがわ－きた）、千葉県平民

①1872～1925（②）◎第9回（1896年6月12日）(①)。⑥免許状：高女英語科。◎①『官報』3885, 1896年6月12日。②日本キリスト教人物史 HP <http://www5e.biglobe.ne.jp/~BCM27946/00education.html>。ここでは「長谷川きた子」で掲載されている

蜂屋可秀（はちや－よしひで）、宮城県士族

◎第5回（1891年12月14日）(①)。

⑩京都府立第一中学校教諭（1897年4月～1898年9月）(②)。「東京高等師範の平田、石川の二教授の後任には蜂屋可秀，片山寛，清水泰次郎三氏が入ることとなつた蜂屋氏は附属中学の英

語主任である、云々」(④)。関東都督府中学校教諭(1910年4月1日～1931年5月現在)(③)。⑤*Annotation to Macaulay's Milton, designed for Japanese teachers and students*, 1893年, The Office of the Museum. *The elementary speller for Japanese students*, 1899年, 金港堂。G. M. Bunt 著, 蜂屋訳『ばんと初等会話篇』『ばんと中等会話篇』1903年, 宝文館。『諸官立学校英語入学試験問題集』1908年, 明治教育社。⑥①では峯屋可秀で発表されたが, 2日後の『官報』(2540, 12月16日, 203頁)で蜂屋と訂正された。⑥①『官報』2538, 1891年12月14日。②『京都府立第一中学校一覧』1904年7月。*京都府立総合資料館では製本した本誌の表紙に「京都府立第一中学校校則」としている。③『関東都督府中学校一覧 大正五年五月』1916年7月, 『関東都督府中学校一覧 大正六年五月』1917年7月。④『英語青年』18-1, 1907年10月1日

馬場勝弥(ばば-かつや。馬場孤蝶), 東京府士族

①1869～1940(②)。③明治学院普通部本科4年6月卒業(1891年)(②)。④第8回(1895年7月11日)(①)。⑤1891年12月高知の私立共立学校(後の土佐女学校)英語教師, 1893年東京の日本中学校教師, 1895年彦根中学校教師, 1897年浦和中学校教師(以上②)。1906～1930年慶應義塾大学で英文学を講じる(③)。⑥翻訳『戦

争と平和』1914年, 国民文庫刊行会など翻訳家, 随筆家としての作品は多数あり。⑦自由民権運動家馬場辰猪は次兄。⑧①『官報』3609, 1895年7月11日。②『明治学院人物列伝』1998年, 新教出版社。③『英語青年』83-8, 1940年7月15日。『英語青年』83-10, 1940年8月15日号。昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 46』1977年

林文五郎(はやし-ぶんごろう), 石川県士族

⑤石川県啓明学校(1877年頃か。同校は同年7月に中等師範学校と改称)(③④)。⑥第2回(1886年6月16日)(①)。⑦京都府立第一中学校教諭(1891年9月～1899年10月)(②), 岡山県高梁中学校長か(③)。⑧代数, 幾何, 論理の免許状も所有(①)。⑨①『官報』886, 1886年6月16日。②『京都府立第一中学校一覧』1904年7月。*京都府立総合資料館では製本した本誌の表紙に「京都府立第一中学校校則」としている。③<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/2297/3178/14/1sho.pdf>。④『学制百年史』第1編第5節3, 1972年, 帝国地方行政学会

平山久太郎(ひらやま-きゅうたろう), 東京府士族

④第4回(1888年8月4日)(①)。⑤①『官報』1530, 1888年8月4日

古田鎮三(ふるた-しずぞう), 新潟県平民

④第7回(1894年7月19日)(①)。

㊦①『官報』3316, 1894年7月19日
本莊太郎 (ほんじょう-たいちろう),
島根県士族

㊦特約生教育学科 (1890年7月修了。
帝国大学文科大学に付設) (①)。㊦第
2回 (1886年6月16日) (②)。㊦東
京府尋常中学校 (特約生教育学科修了
直後) (①), 視学官 (1899年当時)
(④), 長野県松本中学校第2代校長
(1914年9月~1917年3月) (③)。㊦
『俄氏新式教授術』(デ・ガルモ原著。
1891年, 牧野書房), 『教育古典』
(1894年, 博文館), 『教授法』(1899
年, 哲学館)。㊦動物, 植物, 心理,
教育学の免許状も所有 (②)。英語教
授研究会編『英和双解熟語辞典』
(1905年, 吉川弘文館)に, 凡例と序
言を寄せて, 英米人には説明を要しな
い常套の語句が, 実は英語を修めよう
とする者には難しい, そうしたところ
に編集の重点を置いたと述べ, 「明治
卅八年三月 英語教授研究会に於て
本莊太郎識す」と結んでいる。㊦①
『東京大学百年史 通史一』1984年,
東京大学。㊦②『官報』886, 1886年6
月16日。㊦③[http://www.nagano-c.e](http://www.nagano-c.ed.jp/fukasi/gaiyou/enkaku.htm)
[d.jp/fukasi/gaiyou/enkaku.htm](http://www.nagano-c.ed.jp/fukasi/gaiyou/enkaku.htm)。㊦④
久木幸男「慈善洛東学院とその周辺」
(『横浜国立大学教育紀要』22, 1982年)
前波仲尾 (まえは-なかお), 福井県
士族
㊦第5回 (1891年12月14日) (①)。
㊦鹿兒島県立第二鹿兒島中学校長 (②)。
㊦『日本語典』1901年, 金港堂書籍,
『明治こくごとくほん』(前波仲尾等編,

1901年, 吉岡平助) ㊦①『官報』
2538, 1891年12月14日。㊦②『英語青
年』33-12, 1915年9月15日

前原八三 (まえはら-はちぞう), 山
口県士族

㊦第1回 (1885年7月21日) (①)。
㊦経済免許状も所有 (①)。㊦①『官
報』616, 1885年7月21日

牧田宗太郎 (まきた-そうたろう),
大阪府平民

㊦第9回 (1896年6月12日) (①)。

㊦大阪府四條畷中学校教頭から校長に
任命された (②③)。㊦『戦後英米学
校巡り』1921年, 博文館。㊦①『官
報』3885, 1896年6月12日。㊦②『英
語青年』44-12, 1921年3月15日。㊦③
<http://www.shijonawate-gakuen.ac.jp/jh/info/ayumi/index.html>

松木正雄 (まつき-まさお), 高知県
士族

㊦第8回 (1895年7月11日) (①)。

㊦『実験英文法教科書』1894年, 金
港堂。㊦①『官報』3609, 1895年7月
11日

水谷六郎 (みずたに-ろくろう), 奈
良県士族

㊦第5回 (1891年12月14日) (①)。

㊦①『官報』2538, 1891年12月14日。

三谷たみ (みたに-たみ), 京都府平
民

㊦1873~1945 (②)。㊦女子学院在学
中に文検受験。1890年女子学院卒業
(第1回生)。1900年米国ノースフィー
ルド大学, 続いて英国オックスフォー
ド大学留学 (②)。㊦第10回 (1897年

7月9日）(①) * 予備試験の記録不詳。①新潟県高田女学校教師。1896年女子学院教師。留学帰国後女子学院高等部教諭。1927～1945年女子学院院長(②)。⑤②では三谷民子としてある。⑥①『官報』4205, 1897年7月9日。②<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~BCM27946/mitanitamiko.html>
宮川敏（みやがわ-とし），大阪府平民

④1866～(①)。③神戸女学院最初の卒業生。1892年米国マサチューセッツ州マウントホリヨーク大学卒業（文学士）(①)。③第9回（1896年6月12日。免許状は尋常師範学校女子部，高等女学校）(②)。①神戸女学院卒業後フェリス女学院講師。神戸女学院文学講師，文学部長。1901～1907年神奈川県立高等女学校英語科主任(①)。⑤1899年平田義道牧師と結婚，平田敏子(①)。⑥①『横浜近代史辞典』（改題横浜社会辞彙）。②『官報』3885, 1896年6月12日

宮森麻太郎（みやもり-あさたろう），広島県平民，

④1869～1952。③1889年4月慶応義塾別科卒(③)。③第7回（1894年7月19日）(①)。④1890年春広島に山陽英和義塾を開くが1年未滿で閉塾。1894年7月宮崎中学校英語主任教諭(③)。1897年4月～9月京都府立第一中学校教諭(②)。水戸中学校で教える。1900年10月慶応義塾大学予科講師，1909年4月同予科教員，1917年慶応義塾大学文学科教員。その他早稲田，

東洋，中央大学などでも教える(③)。

⑤*Easy lessons in grammar and composition*, 1903年, Kokkosya.『近松とシェークスピア：傑作俳句の英訳』1916年，同文社。⑥①『官報』3316, 1894年7月19日。②『京都府立第一中学校一覧』1904年7月。*京都府立総合資料館では製本した本誌の表紙に「京都府立第一中学校校則」としてある。③昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書72』1997年

矢野静太郎（やの-せいだろう），愛媛県士族

③第9回（1896年6月12日）(①)。

⑤『ナショナル補習読本』第1巻，1905年，富山房。⑥①『官報』3885, 1896年6月12日

山本宜喚（やまもと-ぎかん），静岡県士族

③第4回（1888年8月4日）(①)。

④群馬県尋常中学校長（1893年2月～1894年2月。現群馬県立前橋高等学校）(②)。⑤1903年女子教育の重要性を痛感した棚橋一郎らと私立東京高等女学校（現東京女子学園高等学校）を開校(③)。⑥①『官報』1530, 1888年8月4日。②<http://www.maebash-hs.gsn.ed.jp/gaiyou/index-gaiyou.htm>。③<http://www.tokyo-joshi.ac.jp/gakuen/index.html>

横瀬守太郎（よこせ-もりたろう），長崎県平民

③第5回（1891年12月14日）(①)。

⑥①『官報』2538, 1891年12月14日
渡辺盛次郎（わたなべ-せいじろう），

新潟県平民

◎第10回(1897年7月9日)(①)

*予備試験の記録不詳。◎①『官報』4205, 1897年7月9日。《メモ》<http://www4.library.pref.ishikawa.lg.jp/searchstep3.php?target=0000000245350000&page=1>の「物語七尾高<52>教師列伝」「北陸中日新聞」、また「輪島高校の歩み」<http://www.ishikawa-c.ed.jp/~wazifh/outline/history.htm>に出てくる渡辺と同一人物か。<http://www.issen-k.jp/IssenPDF/016.pdf>の第1頁にも名前があるが、同一人物か。またその少し後に予備試験に数回合格した末七太郎の名前もある

和田正幾(わだ-まさちか)、東京府士族

①1859～1933(②)。②1873年開成学校官費生となるが、後年退学し、同志社神学校に入学、約1か年間に在学(②)。同志社英学校余科第1回卒業生1879年6月(③)。◎第9回(1896年6月

12日)(①)。③1881年東京築地の耕教学舎(後の青山学院)で数学、物理、化学、英語を教える。1887年仙台の東華学校で教授と経営に当たる。1892年同校閉鎖されると東京英学校(耕教学舎の後身)に戻り、1933年まで青山学院で教える。1899～1931年第一高等学校講師、また正則英語学校、日本大学、明治大学、中央大学等にも出講した(②)。◎①『官報』3885, 1896年6月12日。②『英語青年』69-5, 1933年6月1日(写真あり)。③同志社大学卒業生ネットワーク<http://209.85.175.104/search?q=cache:Zjp4QjiAn68J:www.doshisha-u.net/photo.html+%E5%92%8C%E7%94%B0%E6%AD%A3%E5%B9%BE&hl=ja&ct=clnk&cd=3>。大村喜吉『斎藤秀三郎伝』1972年、吾妻書房

*種々のHPから情報を得たが、この度掲げた青木欣四郎から和田正幾までのHPについてはいずれも2008年5月31日にアクセスして再確認した。

(原稿受付 2008年6月5日)

文 検 英 語 科 年 表

【凡例】

- 1) この年表は、文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験のうち、「英語科」に関わることを対象としたものである。
- 2) この年表は「文検英語科略年表」（茂住實男・高橋敏夫，科研費研究成果報告のうち，2007年）を基としているが，作成するにあたり『官報』、『英語青年』（研究社），『日本近代教育史事典』（平凡社），寺崎昌男・「文検」研究会『「文検」の研究』（学文社）などを用いた。

年	文 検 英 語 科
1875 明治 8	8 月 13 日 ★東京師範学校内に中学師範学科を設置（開校は翌 76 年 4 月。中等教員養成機関のはじまり）
1884 明治 17	8 月 13 日 「文検」法制化（「中学校師範学校教員免許規程」文部省達第 8 号）＊従前の卒業資格主義を基本とはするものの，検定合格者も有資格の中等教員として公認することになった。品行，学力および教授法が検定の対象
1885 明治 18	3 月 16 日～4 月 17 日 第 1 回文検英語科試験（選抜は 1 段階，試験日は特定できず） 7 月 21 日 第 1 回文検英語科教員免許状授与者（5 名）発表
1886 明治 19	4 月 1 日～5 月 17 日 第 2 回文検英語科試験（試験日は特定できず） 4 月 10 日 ★師範学校令公布（師範学校を尋常・高等の 2 等に分ける） 4 月 29 日 ★東京師範学校を高等師範学校とする 6 月 16 日 第 2 回文検英語科教員免許状授与者（6 名）発表 12 月 22 日 尋常師範学校尋常中学校及高等女学校教員免許規則（文部省令第 21 号）＊この規則の下で第 3 回～第 6 回の試験が行われた
1887 明治 20	4 月 25 日～5 月 24 日 第 3 回文検英語科試験（試験日は特定できず）。 ＊英文和訳，和文英訳の他に，Oral Translation（口頭解釈）問題が確認される。英訳問題がローマ字で出題 ＊12 月 29 日付『官報』号外に，第 3 回文検試験に合格し免許状を授与された者が 14 学科にわたり掲載されているが，英語科については見えない。第 3 回は英語科は教員免許状授与者無しとしておく。
1888 明治 21	5 月 11 日，12 日 第 4 回文検英語科試験 8 月 4 日 第 4 回文検英語科教員免許状授与者（6 名）発表
1889 明治 22	＊この年と翌 1890 年は試験は実施されなかった。受験者の学力に問題があり，試験も浪費多く，効益少なく，好結果をもたらさない，と判断されたようだ

年	文 検 英 語 科
1890 明治23	3月25日 ★高等師範学校女子部，独立して女子高等師範学校となる
1891 明治24	9月～11月 第5回文検英語科試験（試験日は特定できず） 12月14日 ★高等女学校を尋常中学校の一種と定める（中学校令改正） 12月14日 第5回文検英語科教員免許状授与者（10名）発表
1893 明治26	1月～2月 第6回文検英語科試験（試験日は特定できず） 5月24日 第6回文検英語科教員免許状授与者（1名）発表
1894 明治27	3月5日 尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員免許検定ニ関スル規定（文部省令第8号） 5月3日 第7回文検英語科試験 7月19日 第7回文検英語科教員免許状授与者（7名）発表
1895 明治28	5月13日，20日，24日 第8回文検英語科試験 7月11日 第8回文検英語科教員免許状授与者（6名）発表
1896 明治29	5月8日，15日，20日 第9回文検英語科試験 6月12日 第9回文検英語科教員免許状授与者（9名）発表 12月2日 「文検」の試験が予備試験と本試験の2段階制となる。また検定試験の程度は，尋常師範学校・尋常中学校教員においては高等師範学校の学科程度に，尋常師範学校女子部・高等女学校教員においては女子高等師範学校の学科程度に準ずるとされ，すべて教授法を併せて行うこととなる（「尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員免許規則」文部省令第12号。 * 予備試験の合格者のみが本試験の受験可）
1897 明治30	4月30日 第10回文検英語科予備試験 * 第10回予備試験合格者については不詳 6月19日，22日 第10回文検英語科本試験 7月9日 第10回文検英語科本試験合格者（7名）発表
1898 明治31	3月12日 第11回文検英語科予備試験 * 第11回予備試験合格者については不詳 4月30日，5月10日 第11回文検英語科本試験 6月6日 第11回文検英語科本試験合格者（7名）発表 10月15日 予備試験合格の効力が3年間となる（文部省令第21号による。同省令第12号（1896年）の一部改正）
1899 明治32	2月7日 ★中学校令改正公布（尋常中学校を中学校と改称，男子の高等普通教育機関とし実科教育を排する） 2月8日 ★高等女学校令公布（女子の高等普通教育機関とする） 4月5日 ★中等教員無試験検定の途が公立学校，私立学校などに開かれる（文部省令第25号） 4月5日 第12回文検英語科予備試験

年	文 検 英 語 科	
1899 明治32	5月1日	第12回文検英語科予備試験合格者（20名）発表
	5月18日, 20日	第12回文検英語科本試験
	6月20日	第12回文検英語科本試験合格者（9名）発表
	11月29日	第13回文検英語科予備試験
1900 明治33	1月22日	第13回文検英語科予備試験合格者（28名）発表
	2月28日, 3月2日	第13回文検英語科本試験
	3月5日	第13回文検英語科本試験合格者（16名）発表
	3月30日	教員免許令（勅令第134号）
	6月1日	教員検定ニ関スル規程（文部省令第10号）
	11月28日	第14回文検英語科予備試験
	12月20日	第14回文検英語科予備試験合格者（33名）発表
1901 明治34	2月4日, 7日	第14回文検英語科本試験（ バラフレーズ問題初出 ）
	2月9日	第14回文検英語科本試験合格者（20名）発表
	5月9日	予備試験合格の効力3年間、は廃止 （文部省令第12号による。同省令第10号（1900年）の一部改正）
	11月5日	第15回文検英語科予備試験
	11月30日	第15回文検英語科予備試験合格者（44名）発表
1902 明治35	1月21日, 2月3日	第15回文検英語科本試験（本試験2段階選抜方式。＊筆記試験合格者のみに口述試験の受験を認めるこの方式が、これ以前の回について行われていたかどうかは未確認）
	2月6日	第15回文検英語科本試験合格者（21名）発表
	3月28日	★広島高等師範学校設立, 高等師範学校を東京高等師範学校と改称
	3月28日	★臨時教員養成所官制公布（勅令第100号。中等学校の急増による教員不足を臨時に補充する機関）
	8月29日	第16回文検英語科予備試験（この回より高等女学校, 女子師範学校, 師範学校女子部のみの教員志願者に対して試験問題量が減じられることになった。中学校など中等教育機関のどこでも通用する免許状と2種類になったようである。この措置は第26回まで続けられた）
	10月8日	第16回文検英語科予備試験合格者（86名）発表
	11月1日, 19日	第16回文検英語科本試験
	11月21日	第16回文検英語科本試験合格者（24名）発表
1903 明治36	8月27日	第17回文検英語科予備試験
	10月1日	第17回文検英語科予備試験合格者（63名）発表
1904 明治37	2月12日, 20日	第17回文検英語科本試験（ 英詩のバラフレーズ問題初出 ）
	2月24日	第17回文検英語科本試験合格者（27名）発表
	8月25日	第18回文検英語科予備試験
	10月13日	第18回文検英語科予備試験合格者（59名）発表

年	文 検 英 語 科
1905 明治38	2月17日, 22日 第18回文検英語科本試験（ 外国人教師が補助員として試験委員に加わる。「書取」など担当 ） 2月24日 第18回文検英語科本試験合格者（22名）発表 8月19日 第19回文検英語科予備試験 10月21日 第19回文検英語科予備試験合格者（65名）発表
1906 明治39	2月15日, 21日 第19回文検英語科本試験 2月23日 第19回文検英語科本試験合格者（15名）発表 8月28日 第20回文検英語科予備試験 11月13日 第20回文検英語科予備試験合格者（65名）発表
1907 明治40	2月15日, 21日 第20回文検英語科本試験 2月23日 第20回文検英語科本試験合格者（24名）発表 4月25日 「教育ノ大意」（のち教育大意）が予備試験科目に加わる。英語科受験資格に師範学校、中学校、高等女学校に準ずる外国の学校を卒業した者、の1項が加えられた（文部省令第13号による。同省令第10号（1900年）の一部改正） 8月16日 第21回文検英語科予備試験 10月4日 第21回文検英語科予備試験合格者（72名）発表
1908 明治41	2月14日, 21日 第21回文検英語科本試験 2月24日 第21回文検英語科本試験合格者（22名）発表 4月1日 ★奈良女子高等師範学校を設置。これに伴い女子高等師範学校を東京女子高等師範学校と改称 8月26日 第22回文検英語科予備試験 11月4日 第22回文検英語科予備試験合格者（92名）発表 11月26日 検定制度の整備完了（文部省令第32号による。同省令第10号（1900年）の全面改正）
1909 明治42	2月17日, 24日 第22回文検英語科本試験（ 「作文」に新形式導入。「会話」で西洋絵はがきを用いて口頭説明を求める ）。西洋の絵はがきや絵を用いて英語で説明させる方式は以後も続く 2月26日 第22回文検英語科本試験合格者（31名）発表 8月26日 第23回文検英語科予備試験（試験科目「教育ノ大意」実施） 10月6日 第23回文検英語科予備試験合格者（54名）発表
1910 明治43	2月16日, 21日 第23回文検英語科本試験 2月23日 第23回文検英語科本試験合格者（20名）発表 9月6日 第24回文検英語科予備試験 11月8日 第24回文検英語科予備試験合格者（41名）発表
1911 明治44	2月20日, 22日 第24回文検英語科本試験 2月24日 第24回文検英語科本試験合格者（16名）発表 8月22日 第25回文検英語科予備試験 10月6日 第25回文検英語科予備試験合格者（35名）発表

年	文 検 英 語 科
1912 大正元	2月19日, 23日 第25回文検英語科本試験（バラフレーズ問題が消え、自由作文が登場） 2月27日 第25回文検英語科本試験合格者（17名）発表 8月19日 第26回文検英語科予備試験 10月4日 第26回文検英語科予備試験合格者（37名）発表 11月5日, 8日 第26回文検英語科本試験（バラフレーズ問題復活） 11月11日 第26回文検英語科本試験合格者（12名）発表
1913 大正2	8月18日 第27回文検英語科予備試験 10月11日 第27回文検英語科予備試験合格者（34名）発表 11月24日, 29日 第27回文検英語科本試験（バラフレーズ問題を中止し、自由作文となる） 12月3日 第27回文検英語科本試験合格者（11名）発表
1914 大正3	8月26日 第28回文検英語科予備試験 9月19日 第28回文検英語科予備試験合格者（48名）発表 11月25日, 30日 第28回文検英語科本試験 12月3日 第28回文検英語科本試験合格者（23名）発表
1915 大正4	7月28日 第29回文検英語科予備試験 9月8日 第29回文検英語科予備試験合格者（41名）発表 10月20日, 23日 第29回文検英語科本試験（「作文」に大きな変化：音声重視の Hearing and Written Comprehension となる。また「読方」が「読方解釈文法」という統合的な科目となる） 10月27日 第29回文検英語科本試験合格者（21名）発表
1916 大正5	3月29日 「国民道徳要領」が予備試験科目に追加，また「教育ノ大意」が「教育大意」と改称（文部省令第8号による。同省令第32号（1908年）の一部改正） 8月19日 第30回文検英語科予備試験（試験科目「国民道徳要領」実施） 10月9日 第30回文検英語科予備試験合格者（37名）発表 11月14日, 17日 第30回文検英語科本試験 11月20日 第30回文検英語科本試験合格者（17名）発表
1917 大正6	8月16日 第31回文検英語科予備試験 9月26日 第31回文検英語科予備試験合格者（33名）発表 11月10日, 13日 第31回文検英語科本試験 11月15日 第31回文検英語科本試験合格者（17名）発表 この年 ★Daniel Jones: <i>An English Pronouncing Dictionary</i> (Webster 式から IPA (国際音標文字) 方式へ)
1918 大正7	8月7日 第32回文検英語科予備試験 9月30日 第32回文検英語科予備試験合格者（28名）発表 11月4日, 7日 第32回文検英語科本試験 11月9日 第32回文検英語科本試験合格者（9名）発表

年	文 検 英 語 科
1919 大正 8	8月5日 第33回文検英語科予備試験 9月23日 第33回文検英語科予備試験合格者（29名）発表 11月3日, 8日 第33回文検英語科本試験 11月11日 第33回文検英語科本試験合格者（17名）発表
1920 大正 9	8月5日 第34回文検英語科予備試験 9月27日 第34回文検英語科予備試験合格者（32名）発表 10月23日, 28日 第34回文検英語科本試験 11月4日 第34回文検英語科本試験合格者（14名）発表
1921 大正10	3月4日 予備試験に合格した者は次の検定試験で同一学科目を受験する場合、予備試験免除となる（文部省令第14号による。同省令第32号（1908年）の一部改正） 8月10日 第35回文検英語科予備試験 10月10日 第35回文検英語科予備試験合格者（29名）発表 11月18日, 22日 第35回文検英語科本試験 12月8日 第35回文検英語科本試験合格者（16名）発表
1922 大正11	3月27日 ★H. E. パーマー、文部省英語教授顧問として来日 6月22日 第36回文検英語科予備試験 8月2日 第36回文検英語科予備試験合格者（29名）発表 9月27日, 28日, 10月2日 第36回文検英語科本試験（H. E. パーマーが試験委員として参加） 10月6日 第36回文検英語科本試験合格者（13名）発表 12月6日 第37回文検英語科予備試験
1923 大正12	1月15日 第37回文検英語科予備試験合格者（23名）発表 2月23日, 24日, 27日 第37回文検英語科本試験（発音記号で書き換える問題初出） 3月5日 第37回文検英語科本試験合格者（13名）発表 5月12日 第38回文検英語科予備試験 6月11日 第38回文検英語科予備試験合格者（23名）発表 7月23日, 24日, 28日 第38回文検英語科本試験 8月11日 第38回文検英語科本試験合格者（15名）発表 11月27日 第39回文検英語科予備試験 12月26日 第39回文検英語科予備試験合格者（26名）発表
1924 大正13	1月7日, 8日, 13日 第39回文検英語科本試験（「書取」が短文で行われるようになり、より聴取力が必要となる。第43回まで続く） 1月24日 第39回文検英語科本試験合格者（12名）発表 5月2日 第40回文検英語科予備試験 5月31日 第40回文検英語科予備試験合格者（27名）発表 6月23日, 24日, 28日 第40回文検英語科本試験（発音記号が大量に出題。120 words 分の発音記号を読ませる問題で、出題者は岡倉由三郎・市河三喜）

年	文 検 英 語 科	
1924 大正13	7月7日	第40回文検英語科本試験合格者（16名）発表
	10月16日	第41回文検英語科予備試験
	11月12日	第41回文検英語科予備試験合格者（38名）発表
	12月5日, 6日, 12日	第41回文検英語科本試験
	12月29日	第41回文検英語科本試験合格者（19名）発表
1925 大正14	5月9日	第42回文検英語科予備試験
	6月4日	第42回文検英語科予備試験合格者（32名）発表
	7月1日, 2日, 3日, 8日	第42回文検英語科本試験（「作文」は Hearing and Composition となる。試験日が4日となる）
	7月27日	第42回文検英語科本試験合格者（17名）発表
	10月10日	第43回文検英語科予備試験
	11月5日	第43回文検英語科予備試験合格者（50名）発表
	12月3日, 4日, 5日, 11日	第43回文検英語科本試験（「作文」は Hearing and Written Comprehension に戻る。新形式の作文追加）
	12月29日	第43回文検英語科本試験合格者（28名）発表
1926 昭和元	5月5日	第44回文検英語科予備試験
	6月8日	第44回文検英語科予備試験合格者（50名）発表
	7月1日, 2日, 3日, 9日	第44回文検英語科本試験（教授法の出題形式は工夫され変化に富む）
	7月28日	第44回文検英語科本試験合格者（22名）発表
	10月19日	第45回文検英語科予備試験
	11月15日	第45回文検英語科予備試験合格者（33名）発表
	12月6日, 7日, 8日, 13日	第45回文検英語科本試験（教授法の出題形式は工夫され変化に富む）
	12月28日	第45回文検英語科本試験合格者（25名）発表
1927 昭和2	5月10日	第46回文検英語科予備試験
	6月10日	第46回文検英語科予備試験合格者（59名）発表
	7月1日, 2日, 4日, 11日	第46回文検英語科本試験（教授法の出題形式は工夫され変化に富む）
	7月29日	第46回文検英語科本試験合格者（29名）発表
	* 10月に第47回予備試験, 12月に同本試験が実施されたが（国語科, 数学科など）、英語科や理科などは行われなかった。以後いずれの科目もおおむね1回置きの実施となる	
1928 昭和3	5月14日	第48回文検英語科予備試験
	6月11日	第48回文検英語科予備試験合格者（57名）発表
	7月5日, 6日, 7日, 12日, 13日	第48回文検英語科本試験（教授法の出題形式は工夫され変化に富む）
	7月23日	第48回文検英語科本試験合格者（32名）発表

年	文 検 英 語 科	
1929 昭和 4	5 月14日	第 50 回文検英語科予備試験
	6 月17日	第 50 回文検英語科予備試験合格者（63 名）発表
	7 月 4 日，	5 日， 6 日 第 50 回文検英語科本試験（「読方解釈文法」が第 2 回試験に移り，出題形式が工夫され変化に富む問題が筆答試験となり第 1 回試験へ移る）
	7 月25日	第 50 回文検英語科本試験合格者（59 名）発表
1930 昭和 5	5 月10日	第 52 回文検英語科予備試験（試験問題に大きな変化。＊予試は従来英文和訳と和文英訳の 2 科目であったが，幅広く英語力を試す問題となる。英語基礎学力観の変化）
	6 月13日	第 52 回文検英語科予備試験合格者（90 名）発表
	7 月 4 日，	7 日， 8 日 第 52 回文検英語科本試験（筆答試験の出題形式は工夫され変化に富む）
	7 月25日	第 52 回文検英語科本試験合格者（51 名）発表
1931 昭和 6	5 月11日	第 54 回文検英語科予備試験（英文和訳問題に部分訳出題，予備試験では初出）
	6 月11日	第 54 回文検英語科予備試験合格者（86 名）発表
	7 月 2 日，	6 日， 7 日 第 54 回文検英語科本試験
	7 月17日	第 54 回文検英語科本試験合格者（47 名）発表
1932 昭和 7	5 月10日	第 56 回文検英語科予備試験
	6 月 9 日	第 56 回文検英語科予備試験合格者（85 名）発表
	7 月 2 日，	6 日， 7 日 第 56 回文検英語科本試験
	7 月19日	第 56 回文検英語科本試験合格者（38 名）発表
	8 月30日	従前の英語，仏語，独語という学科目が「外国語」に統合・改称。これに新たに支那語が追加された（文部省令第 15 号による。同省令第 32 号（1908 年）の一部改正。＊中学校令施行規則による中学校学科目改正の反映）。第 15 号により，「教員検定二関スル規程」は「師範学校中学校高等女学校教員検定規程」に改称
1933 昭和 8	5 月13日	第 58 回文検英語科予備試験
	6 月 9 日	第 58 回文検英語科予備試験合格者（61 名）発表
	7 月 8 日，	11日， 12日 第 58 回文検英語科本試験
	8 月 2 日	第 58 回文検英語科本試験合格者（45 名）発表
	10月14日	従前は出願学科目に合格しても国民道徳要領および教育大意に合格しなければ「不合格」となったが，そういう場合には成績優良証明書を授与し，その所持者は次回以降は国民道徳要領，教育大意のみ受験すればよいこととなる（文部省令第 16 号。省令第 15 号（1932 年）の一部改正）
1934 昭和 9	5 月11日	第 60 回文検英語科予備試験
	6 月 9 日	第 60 回文検英語科予備試験合格者（50 名）発表
	7 月10日，	13日， 14日 第 60 回文検英語科本試験

年	文 検 英 語 科	
1934 昭和9	7月23日	第60回文検英語科本試験合格者（29名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（4名）も発表
1935 昭和10	10月5日 11月4日 12月14日,	第63回文検英語科予備試験 第63回文検英語科予備試験合格者（35名）発表 16日, 17日 第63回文検英語科本試験（この回より第1回 と第2回試験の間のハードルが取り払われ、本試験受験者全 員が第2回試験も受験することになった）
1936 昭和11	1月6日 10月15日 11月16日 12月17日,	第63回文検英語科本試験合格者（21名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（8名）も発表 第65回文検英語科予備試験 第65回文検英語科予備試験合格者（38名）発表 18日, 19日 第65回文検英語科本試験（「書取」に新方式）
1937 昭和12	1月14日 10月14日 11月9日 12月4日,	第65回文検英語科本試験合格者（35名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（4名）も発表 第67回文検英語科予備試験 第67回文検英語科予備試験合格者（26名）発表 6日 第67回文検英語科本試験
1938 昭和13	1月12日 10月12日 11月10日 12月2日,	第67回文検英語科本試験合格者（20名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（5名）も発表 第69回文検英語科予備試験 第69回文検英語科予備試験合格者（35名）発表 3日, 5日 第69回文検英語科本試験
1939 昭和14	1月18日 10月18日 12月13日	第69回文検英語科本試験合格者（17名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（8名）も発表 第71回文検英語科予備試験 第71回文検英語科予備試験合格者（18名）発表
1940 昭和15	1月11日, 12日, 13日 3月4日 10月14日 12月19日	第71回文検英語科本試験 第71回文検英語科本試験合格者（23名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（1名）も発表 第73回文検英語科予備試験 第73回文検英語科予備試験合格者（21名）発表
1941 昭和16	1月25日, 27日, 28日 3月12日 9月16日 11月10日 12月2日,	第73回文検英語科本試験 第73回文検英語科本試験合格者（10名）発表。併せて成績 優良証明書授与者（4名）も発表 第75回文検英語科予備試験 第75回文検英語科予備試験合格者（14名）発表 3日 第75回文検英語科本試験
1942 昭和17	1月23日	第75回文検英語科本試験合格者（9名）発表。成績優良証 明書授与者なし

年	文 検 英 語 科
1942 昭和17	10月10日 第 77 回文検英語科予備試験 12月14日 第 77 回文検英語科予備試験合格者（34 名）発表
1943 昭和18	1 月11日, 12日, 13日 第 77 回文検英語科本試験 3 月11日 第 77 回文検英語科本試験合格者（22 名）発表。併せて成績 佳良証明書授与者（3 名）も発表 3 月31日 中学校高等女学校教員検定規程（文部省令第 35 号。「外国語 科ハ英語，独語，仏語，支那語，マライ語ノ五部二分チテ検 定ヲ出願スルコトヲ得」（第 2 条））。また同第 35 号により， 「師範学校中学校高等女学校教員検定規程」は「中学校高等 女学校教員検定規程」と改称。＊4 月 1 日より師範学校が専 門学校程度の学校に昇格となるため 8 月31日 第 78 回文検英語科予備試験 11月 9 日 第 78 回文検英語科予備試験合格者（21 名）発表 12月11日, 13日 第 78 回文検英語科本試験（英文和訳に新形式の問題 （Picture Drawing）や教案作成を意図した新しい問題）
1944 昭和19	1 月22日 予備試験に「副科目」が新設され，外国語科の副科目は「国 民科国語」（文部省令第 3 号） 3 月20日 第 78 回文検英語科本試験合格者（10 名）発表。併せて成績 佳良証明書授与者（4 名）も発表
1945 昭和 20	8 月14日 ★ポツダム宣言受諾。翌 15 日に太平洋戦争終結
1946 昭和 21	11月 3 日 ★日本国憲法公布
1947 昭和22	3 月20日 ★『学習指導要領 一般編（試案）』，『学習指導要領 英語 編（試案）』 3 月31日 ★教育基本法，学校教育法公布 4 月 1 日 ★新学制による小学校・中学校発足 4 月10日 第 79 回文検英語科予備試験 7 月 4 日 第 79 回文検英語科予備試験合格者（35 名）発表 7 月16日, 17日, 18日 第 79 回文検英語科本試験 8 月 6 日 第 79 回文検英語科本試験合格者（26 名（英語 2 名，外国語 科の内英語 24 名））発表。併せて成績佳良証明書授与者（9 名。いずれも外国語科の内英語）も発表
1948 昭和23	3 月29日 ★文部省，教員養成はすべて大学で行う方針を発表 10月19日 第81回文検英語科予備試験（英文和訳を別にしてすべて英問英答） ＊第 81 回予備試験合格者については不詳
1949 昭和24	3 月17日, 18日, 19日 第 81 回文検英語科本試験（「書取」は行われた が，いわゆる筆記試験はなく，口述試験であった） ＊第 81 回本試験合格者については不詳

執筆者紹介

小 池 和 良 （外国語学部教授，スペイン語学，スペイン語文法・語彙論）

藤 田 守 （北短助教，日中音声比較研究，日本語・中国語教育）

オスカル・メンドサ （外国語学部特任講師，文化人類）

関 口 美 幸 （外国語学部非常勤講師，日中比較文学比較文化，日中翻訳）

坂 田 貞 二 （商学部教授，ヒンディー語学，昔話研究）

長谷川 文 子 （外国語学部准教授，Listen&Read I～IV，米国研究入門）

茂 住 實 男 （外国語学部教授，英語科教育法）

編集委員／石川 守（外国語学部教授）

先川暢郎（政経学部教授）

拓殖大学 語学研究 第118号

平成20年10月24日 印刷

平成20年10月31日 発行

（頒布1200円）

編集兼発行人 石川 守
言語文化研究所所長

発行所 拓殖大学言語文化研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14

TEL 03(3947)7595(直通)

印刷 株式会社 外為印刷